
死んでいく人たちへ

酒主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」「で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んでいく人たちへ

【NZコード】

N5126D

【作者名】

酒主

【あらすじ】

安田総合病院内科4病棟。別名「死に病棟」と呼ばれるこの病棟で働く、新人ナース、渡辺ミサに映る現実とは。

第1話 死に病棟（前書き）

酒主のブログ「小説を書きたい」を作りました。

執筆にあたつてのこぼれ話や余談、日々の苦惱など書いていきたいと思います。

小説を書いている、他の先生方とも、交流できれば幸いです。

http://blog.goo.ne.jp/syusyu_2008/

第1話 死に病棟

安田総合病院 内科4病棟。

朝は深夜のナースからの引継ぎで始まる。

「401号室の白井さんですが、一昨日から意識レベルが落ちて、呼びかけにも反応なし。3時頃から脈40代、血圧は測れません。先生に連絡はとつてありますが、まだ到着してません。家族の方は、みな揃っています」

慣れた様子で申し送るのは福永真。ふくながまこと 10年目のベテランだ。ここで、日勤帯ナースの「はあ～～つ」というため息。

「2日前から急に悪なつたもんなア、白井さん。挿管すんの？」

「うん、NO-CPRなんで何もしないって。家族の人にも2日前に説明済みやし。あ～～深夜でだめかと思つたけど、もつて良かつた～」

「高津先生はまだ来ないんですか？」

「来るわけないやん。NO-CPRでしょ。高津のこじやできつぎりにしか来ないよきっと」

「言える……」

「あ～～忙しくなりそうやなア～

ざわづく//サたち日勤帯ナースを一蹴するように福永がさあざつた。

「はいはい。死に病棟なんだから、仕方ないでしちゃ～！」

福永は、記録を書き終え、カルテを棚にしまつと、ポンッヒ//サの肩を豪快にたたき、不敵な笑みを浮かべた。

「日勤さん、後よろしくね。お疲れ～」

「え～～～～。福永さん帰っちゃうの～？」

「当たり前やん。勤務終わつたんやから。おればおるだけこき使われるやん。//サは、白井さんの受け持ちなんやからがんばつてーな（白井さんの娘さん……。大丈夫かな。いつもそばにいて、お世話

してたから)

3台並ぶモニターはアラームの音が頻繁に鳴り響き、忙しく働いている。白井さんの、モニター上の脈はだんだん間隔がのび、経験の少ないミサであっても、危険な状態であることは察知できた。波形を記録し、自分のバイインダーにはさむ。

「おはようございます」

足取りも重く、401号室のドアを開ける。ナースステーションの横に位置するこの部屋は、重症患者の部屋になつてている。親類一同が困るなか、7・8人の間をかきわけ、白井さんを覗き込み、覗き込むミサをまた、覗き込むように人垣ができる。

軽くプレッシャーを感じながら、検温を続けた。意識はなく、ぐつたりと横たわっているその姿は、トレードマークのニット帽をかぶつていないので、別人のようにみえる。何度も行われた、抗ガン剤投与で禿げ上がってしまった頭。その中に残った白く長い数本の髪が異様な感じを与えた。

白井 長子 68歳。血液疾患で入退院を繰り返していた。

陽気なおばあちゃんで、入院するたびに「また、死に病棟かへ、死にに来たわ」なんて冗談を言つていた。

「ミサちゃん」

声をかけたのは、白井さんの長女、和子である。介護休暇をとつて、日中はずつと付き添つていた。献身的に寄り添う姿はとても印象的で、おばあちゃんが寝ているときは、そばで二ツト幅を編んだりして過ごしていた。

2日前から白井さんの意識が無くなり、ほとんど泊まりこみで番をしていた和子だったが、親類への連絡や対応に追われ、かなり疲れている様子がうかがえた。

親類が困るなか、隅の方で座っていた彼女がミサに寄りボソッと発した。

「お母ちゃん、もうダメかな……」

「今回は厳しいかと」

いつもの口調とは違い、言葉を選んでそう答えた。よそいきの言葉がやけに白々しい気もした。

突然、白井さんの息子らしき人が口を開いた。

「和子！ 身内がそんな弱氣でどうすんのや。まだ、望みがないわけじやないやろ。あかんあかん。そんな弱氣じやあかん」

妹と目を合わすこともせず、背中ごしに会話を続けた。

「わしらが諦めたらどうすんのや。母ちゃん、しつかりせいや…」

そしてミサに対しても

「苦しそうやから、何とかできへんのか。先生はまだ来ないのか！」
と苛立ちをぶつけた。

しきりに白井さんの手を握つたり、頭をなでたりしている息子であつたが、何をされても、だらつと力の抜けた白井さんの体は、もう、魂が抜けてしまつたんではないかとミサは思った。

「兄ちゃん。母ちゃんは助からへんわ。ね、看護婦さん、もうね…」

…

ため息まじりの小さな声。すがるよつな顔で、ミサに視線を放つた。

毎日付き添つていた彼女には、長い間かけて母の死に對しての受容ができていたが、兄の方は違つた。

（無理もないか。前回お見舞いに来たのは3ヶ月も前なんだから）

「だめなんか？ 看護婦さん。もう、何も治療してくれへんのか？」

ミサは、すっかり部屋を出るタイミングを失つてしまつていた。

ガタンッ。入ってきたのは主治医の高津。病棟主任を務めるやり手の医者だ。何から何まで整つた身なり。別段急ぐ様子もなくスマートに部屋に入る。そして、つかつかと長女の和子をみつけて近寄る。

「朝早くから来てもらつてすみません。先日にもお話したんですが、状況はかなり厳しいです」

あらかた、今までの経過を話すと

「結論から言って、挿管して、人口呼吸器につなぐところはし

ないつもりです」と綴つた。整然としたその言葉は、まるで何かの台詞のように聞こえた。

今まで遠慮がちに座っていた親類もざわざわとざわめきたつ。

「何とかならんのかなあ。かわいそうになあ」

「この前、お見舞いに来た時は、元気に話してたしね。まさか、こんなに悪いとは思わなかつたんだけど」

ヒソヒソ話す声を振り払つように、高津は部屋を出よつとしていた。

「挿管しないってどうじつことですか？ 何もせずに見捨てるつちゅうことですか。わしら、何も聞いてへん」

その声は太く震え、ざわざわしていた親類も静まりかえつた。しかし、高津は驚く様子も見せず、ふと振り返り、話を続けた。

「娘さんに、全部お話して了解を得てます」

「和子。何でそんな大事なこと、わしらに相談せんのや。母ちゃんこのまま死んでもええんか！」

「（）家族で話し合つていなんですか？」間髪いれず、高津が口をはさむ。

「今、挿管して人口呼吸器につないだとしても、苦しむ時間が長くなるだけです。抗ガン剤の投与も行つてきましたが、限界だと」「ちょっとと考えさせてくれ……」

高津の話をさえぎるように、息子の言葉が響いた。

部屋はしんと静まり、機械音だけがやたら耳についた。

「どうして、こんなことになつたんや。こんなに悪いんだつたら、早よ来るべきやつた！」

今まで献身的に付き添つていた娘は、遠慮がちに親戚の輪から離れ、うつむいて座つている。挿管しないことを同意した彼女はまるで罪人のような表情を浮かべている。

今まで、黙つていた親類の1人が口を開いた

「高広は、母ちゃんつ子やつたからな。つらいのもわかるが。長子もこんなに瘦せてしまつて。これ以上苦しむのはかわいそうや！」

和子もようつ面倒みた。もつええやないか、な

「でも、何で教えてくれんかったんや。こんなに悪いんやつたら、

意識のあるうちに会いたかった」

すまなさそうとうつむいている和子を見て、ミサは言わずにいら
れなかつた。

「意識がなくなる前までは、普通に話してたんです。病状は前々から悪かつたんですけど、こんなに早く意識が無くなるなんて、私達も予想もしませんでした」

「でも……」諦めきれない様子で息子はミサの顔をみた。
緊張して紅潮した頬、泣き出しそうな顔でミサは言った。

「1ヶ月前くらいの夜中に、突然、白井さんが息が苦しいって訴えたことがあるんです。家族に連絡をとりますので頑張つて！ と言つた私に白井さんは言されました」

ミサはその時の光景を思い浮かべた。瘦せて小さい体に一ツト帽。荒い息。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。息子は心配性だから。私に何かあ
るつて言つたら、仕事でも何でも放つて飛んでくるから性格だから。
まだ、私は大丈夫！ つて息切れしながら言つんですね」

「もう、いいです」
「もう、いいです」

下を向いた息子はうなだれ、言葉に詰まりながら「もう、いいで
す」と繰り返した。

ボトボトと大粒の涙がつたつて、大きな肩が震えた。

結局、白井さんが亡くなつたのはそれから3時間後。長い間、闘
病を続けた彼女。

皆に囲まれ息を引き取つた。

「いつも、ありがとな」と、しわしわの手で握手するのが白井さん
の癖だつた。

「どうも、長いことお世話になり……」

娘の和子さんが深々とお辞儀した。乾いた冷たい廊下に涙がポタポタ落ちた。

白い布をすっぽりかぶった白井さんを乗せた車は、ゆっくりと動きだした。ミサと主治医の高津と師長は、車が走り去るまで頭を下げ見送った。

「もう行かれましたよ」

頭を下げ、礼を続けるミサに、師長が声をかけた。
顔をあげたミサの目は真っ赤になっていた。

（白井さんも逝ってしまったんだ）

後日、白井さんの娘の和子は、両手にドーナツをかかえて4病棟を訪れた。

「ちょっとミサちゃんに見せたいものがあつて」

ミサは、勤務の途中であつたが、師長の許しもあり、面会ルームへ案内した。座つたか座らないかのタイミングで、和子がいきなり話し始めた。

「私ね、お母ちゃんの付き添いをしてる時、いつそのこと死んでくれたら……。って考えたことがあつたんです。母は昔から、兄ばっかり可愛がつてましたから。こんなに辛い思いをして付き添つているのに、ぐちばっかり言われて」

「え～～、あの、白井さんがですか？」

「ええ」

そして、話を続けた。

「だから、なんで介護休暇までとつて世話をしたのか自分でもわからんないです。きっと、母に認めてもらいたい。愛されたい。そんな風に心の奥ですっと思つてたんでしょうかね。

でも現実は、介護を続けても、母の態度がかわることはなかつたんです。たまにかかる兄の電話は、あんなに嬉しそうにとのることについて、悔しくて。母に苛たられるたびに、いつそのこと、早く死んでくれつて」

「とても、そんな風にはみえませんでした」

「母も私も外面がいいんですかね。ふふ」

そして、かばんの中から紙きれをとりだし、ミサの前に差し出した。

「読んでみて」

和子へ

いつもありがとひ。

かんじふさん達には素直に言える言葉。

和子にはとうとう言えなかつた。
私は根っからの強情つぱりやね。

和子の作った帽子、かんじふさんに人気やつた。
むこうでも大事にするよ。

こんな、はげ頭じや格好悪いから

かんおけに入るときにはこの帽子かぶせてちょうだい。

ほんとうにありがとひ。

「荷物を整理してたときにも、床頭台の引き出しがでてきたんです
ぶるぶると震えた字。筆圧がなく、読み取れるか読み取れないか
くら」の

その文字は、白井さんの体調が良くないのを物語っていた。
「いつだつたかな、ミサちゃんに帽子のことを褒められて、照れて
いた母の姿を思い出しました。それにしても、いつ、書いたんでし
ょうね、母は……」

お互に言葉に詰まり、そのまま深々とお辞儀をして別れた。

(いったい、私は何を見てきたんだろう)

陽気で温厚なおばあちゃんを演じてきた白井さん。彼女の辛く、

苦しい胸の内を感じることすらできなかつた。せつと、娘の和子さんにしか本音を言つことが出来なかつたのだろつ。

「何にもしてあげられなかつたな」ふと、言葉になつた。

「渡辺せーん。405号室が呼んでますーー！」

（死に病棟か…）

ミサは401号室の前で、一度立ち止まり会釈をし、そのまま405号室へ走つて行つた。

第1話 死に病棟（後書き）

CPRとはCardio-Pulmonary Resuscitationの略語で心肺蘇生法のことです。

NO-CPRは、CPRをしないということ。

第2話 なじめない自分

安田総合病院は一般病床数600床、診療科目は24科あり、地域の基幹病院として位置する。

研修医受け入れ病院でもあり、定期的に大学病院より研修医レジデントがやって来るシステムになっている。3ヶ月で各科をローテートするレジデントを、ここ安田病院ではローテートと呼んでいる。

「ちょっとさア。ローテートの林つたら、静脈留置針入れるのも時間かかるて、拳句の果てには看護師さんお願ひします！だつてー。こつちも忙しいのにサーフロー位ちゃつちゃと入れてくれへんかなあ」

病室よりキレ氣味で帰ってきた、惠綾子めぐみあやこである。でっぷりした体に、きつくかかつたパーマ。真つ赤な口紅。

「別名 パンチ」

もちろん本人の前では口が裂けてもいえないが、いつの間にか4病棟のスタッフの中でついたあだ名である。

ナース道25年の彼女は、例え医師であろうとも容赦なくたたつ切る。そのため、ここ4病棟では、誰もが恐れる人物なのである。

「そうそう。林つて要領悪いよねー」

相づちを打つのは、角野亜里沙かくのありさ。7年目の中堅で恵の取り巻きの1人である。容姿端麗なその姿にだまされる医師も少なくない。

ミサはこの2人がとても苦手なのだ。

「あ～、渡辺さん！」

この2人から逃げるよつて、点滴を準備していたミサにパンチが喰らいついた。

「あんた、安達さんから薬、頼まれてたでしょ（あ、忘れてた…）

「すみません」

「何で、そんなに簡単なこと忘れるの？いい加減にしてくれる。い

つまでたつても薬が届かないからって、私が怒られたんだからねつ。

働いて、もうすぐ2年目だつていうのに、なんでそんなに要領が悪いの！ほんとに林といい、あんたといい…事故がおきないのが不思議なくらい。さつさと安達さんとこ行つて謝つてきなさいっ

一言余分なうえに、周囲に聞こえる様に攻め立てる姿に、その場

に居合させたスタッフは凍りついた。

「はい。気をつけます」

「さつさと謝りに行く」

「・・・・」

（あー、また怒られたあ）

ミサは、ひきつった顔で、安達のところへ向かう。

（安達さんあんまり怒つたりする人じゃないのになあ。どうしよう）いろんな思いをめぐらせながら、ドアをノックし部屋に入る。

「失礼します」

「はいはい、36度5分、めし10割」

てっきり、検温だと勘違いした安達はミサが話す間もなく答える。

「あ、いえ。検温じゃなくて」

「ん？」

「安達さん。すみませんでした」

「はー？」

「あの、薬のこと、頼まれてたのに」

ミサは顔を真っ赤にしながら頭を下げた。すると安達は、その人懐っこい目でミサの顔を覗き込んで言った。

「あーごめんごめん、また、パンチに怒られた？」

入院慣れした安達は、スタッフの内情までお見通しなのだ。

「いや。あんまり薬が届かないんで、詰所にとりに行つたらさー、いくら、入院が長いつていつても、詰所の中まで入つてこられたら困る、個人情報があるからって、パンチに叱られてさー。あんまり腹がたつたもんだから、薬が届かないからわざわざ取りに来たのに、

その態度は何だ！ つて言つてやつた

「本当にすみませんでした」

「こやこや、そしたら、誰に薬を頼んだのか？とか聞くもんだから、つこみサちゃんの名前を出してしまって。本当に恐ろしいわ。あのおばちゃん。俺が院長だったり、すべくビしてやるー。」

「俺も賛成！」

カーテンを開け、隣の川内も話に入ってきた。

「ミサちゃんみたいに可愛い看護婦さんをいじめるなよ、許さねー！俺、パンチから守つてあげるから。何なら付き合つ? ね？ ね？」

半分おちょけた態度でミサに視線を向ける。

「あ、でも・・・」

ミサが言葉に困つていると、安達が助け舟を出した。

「川内！ あなたにミサちゃんはもつたいないわ。鏡みて出直していい！」

「ジャニーズ系の何が悪いんや～」

「ひやア～よく言つわ。髪型だけやんか！」

「つっせー、はげおやじ」

「何だとーーーお前もそのつまびらかうつるーーー！」

困惑するミサをよそに50代と20代の男2人がけんかを始める。
(なんか子供みたい...)

「こつちに顔出すなよ！」

安達が仕切りのカーテンを閉めると、川内が意地になつてカーテンを開けようと/orして、お互にカーテンの引っ張り合いになつた。
(あ~~~~~！ーーー危ないーーー)

ミサが言葉に出す間もなく、カーテンのレールの留め金がはずれ、川内がベッドの下へダイビングした。

「いってえーーー！」

「あはははははー」

「.....」

安達と川内は田を歩きとさせた。いつも、おとなしく、あま

り感情を出さないミサが笑つたのだから。

きょとんとした安達と川内を見て

「す、すいません」

いつもの、気を使いすぎるミサの表情が現れた。

「やだなア。ミサちゃん。せつかくいい顔して笑つたのに、すいません、だなんて」

「あ、すいません」

「あ～～！ また言つたー！」

あはははは。みんなで笑つた。

「あんまり遅くなると、パンチに怒られるから、早く戻りなー。」「はい。そうします」

案の定、ミサが詰所に戻ると角野亜里沙がかみついた。

「点滴の準備を放つたらかして、いつまで患者のどこ行つてんの？ 全部、私と恵さんでやつといたから。ほんとに、あんたみたいな人がいると、他に迷惑がかかるんだよね」

「あの、安達さんのところに謝りに…」

「そんなのぱつぱつとすませちゃえばいいじゃない。どうせ、安達なんて、大した病氣もないのに居座つて」

ミサは角野のフランス人形のように大きくくりつとした瞳、艶のある小さい口元、陶器のようにピカピカひかつた肌をボーッとみつめていた。

「何、ボーッとしてんのよ」

ふんつと氣位の高い彼女は自分の言いたいことだけ言って、恵の横に座り記録をはじめる。

ボソボソと嫌味な笑みを浮かべて話す2人に、他のスタッフも交わり話し出す。

(きっと、私。また、何か言われてるのかも)

他のスタッフの輪からはずれ、少し離れたところにある、小さい作業台を机にしてミサも記録をはじめる。

(角野さんみたいに何でも要領よく出きたらどんなにいいだろ？。)

ミサは、自分の意見もはつきり言えない自分自身に嫌気がさしていた。

ミサの近くのドアが開いた。

「こんなちは。丸山製薬です。あ、どうも」

長身でイケメンを絵に描いたような男である。

「あ～加藤さん、久しぶり～」

男が詰所に入るか否かのタイミングで角野がすり寄る。

「あー。ありさちやん。高津先生いる？」

「うん。今呼ぶわ」

連絡をとっている間、加藤のまわりに輪ができる。

「そういや、加藤さん。今度、歓迎会をしたいんだけど、どうかい
いとこある？」

恵が口を開いた。

「そうやなア。富久屋ふくやとかどう? つまい酒もそろつてるし」

「さすが、プロパーさんやね」

「やだなア。恵さん、プロパーは古いつて! 今はMRエムアールつちゅうん
です」

プロパーとは、製薬会社から医療機関に出向いて、医薬情報の提供や宣伝を行う担当者のことで、昔そう呼んでいた。古いナースは今でもプロパーと呼んでいる。

MRと呼ばれる製薬会社の担当者は、医師が業務が終わるまで、待つてたりするので、自然とスタッフとも顔見知りになるのだ。

「ところで、歓迎会つて、また移動があるんですか?」

加藤が情報収集をはじめる。

「ローーターの林先生のかわりに、外科から、1人研修に来るのよ」

「へ～。いちいちローーターが来るたびに歓迎会なんてしてたら大
変ですね」

「そなんだけね、うちの病棟、酒好きで騒ぐの好きな人が集ま
つてるから、何かと口実つけて飲みたいってのが本音」

「へ～。看護婦さんたち、お酒強いからなあ」

加藤が談笑していると、今まで高津に連絡をとっていた亞里沙が話しかける。

「加藤さん！ 先生ね、あと30分待つてっ！」

「ありがとう。先生の30分は1時間だからなあ。今日も帰り遅いか…」

「ところでさ、今度みんなで飲みに行かない？ 加藤さんも、たまには仕事抜きで発散しようよ、ね。毎日、高津の相手なんかしてたら大変でしょ！」

「んー。で、他に誰が行く？」

「うん。4病棟のみんなに声かけとく」

「あんまり、派手にふれ回らないでくれよ。仕事上、やせこじくねるから」

加藤は亞里沙に耳打ちした。

「わかってるって！」

亞里沙は嬉しそうに笑い、「連絡してね」と付け足した。

そんなやりとりの中、ドアに背を向け、ミサは一人記録していた。誰とでも仲良く、交流の広い加藤や角野のような人物に憧れがあつたが、どうせ、自分なんか・・・と自分を卑下し話に入らないようにしていた。

「じゃあ、ロビーで待たせてもらいます」

加藤は詰所のスタッフに挨拶すると、ドアに手をかけ、いつたん廊下に出かけた加藤だが、忘れてた、という表情で、また入りなおした。

「あの、ボールペン、また持ってきたんでみんなで分けてください近くて背を向けていたミサに近寄り、ボールペンの束をそっと作業代のうえに置いた。

「え？」という表情を浮かべているミサに、加藤は「みんなで分けて！」と笑顔を見せた。まぶしかった。

「渡辺さんも飲み会に来るといいよ！」

と加藤は言つたが、角野から誘つてもらえないと分かつていたミ

サは、ハイともイイエとも返事せずうつむいた。

丸山製薬と書かれた、3色ボールペン。いろんな種類があった。

MRといつ名前がついても

営業は営業。どこの製薬会社も名前を売るのに必死なのだ。

ミサはみんながいる机にボールペンの束を持つていった。

「あの、加藤さんが、分けてくださいって」

「あー！私、この「アラがついてるやつがいい！」

「私これー。鉛筆もついてるじゃん」

ナースにとって、ボールペンは必需品。ペンの争奪戦がはじまり、結局、ミサの手元に残ったのは、何の変哲もない、普通の3色ボールペンだった。

丸山製薬と書かれたそのボールペンを、ミサは白衣の胸ポケットにさした。

第3話 一杯のお茶

夜勤は、経験の少ないナースにとっては、とてもプレッシャーのかかる勤務だ。日勤帯には平均5～6人の患者を受け持つが、満床であれば、16人の患者を一人で看なければならぬ。

内科4病棟は48床あり、3チームに分かれ勤務している。夜勤の場合は各チームから1人ずつ、全員で3人となる。急変があった場合など、勤務中一度も座れなかつたなんてよくある事だ。

夜勤には準夜勤、深夜勤と2種類あつて、準夜勤は16時～翌1時まで、深夜勤は0時～9時までである。仮眠など、とんでもない休憩がとれるかとれないかのギリギリの勤務なのである。

「何事もありませんように」ミサは、必ずそう願い勤務に臨み、「良い良かつた。今日は無事だつた」と胸をなでおろして、くたくたに疲れながら家に帰つていいくのだった。

老人の患者などは入院などの環境の変化で不穏な状態になることがある、点滴を引き抜いて、床中血まみれになつたり、ベッドの上に立つて、転落したりとか、思いもかけないハプニングが起つたりもある。死に病棟の夜は、さながらサスペンス劇場のようである。

そして、ハプニングが起こるのが大抵、夜中なのがミサは不思議でならない。

ミサは今日、準夜勤であつたが、いつもより少し緊張が解けていた。

（今日は福永さんと一緒に勤務だ！一緒に夜勤するのどれだけぶりだろう。）

福永 真ナース歴10年。ミサの教育係である。いつもは同じBチームなので、夜勤を一緒にすることは無いが、他の勤務者の都合で、今回、福永はCチームの夜勤になった。

風貌はといふと、茶髪に細い体。スナックのママさんのように酒

やけしたような、がらがらの声。元ヤンキーをナースにしたような、という感じだ。

そんな風貌とは別に、誰にでも分け隔てなく接する福永を尊敬していた。そして、彼女にいつも助けられている。福永がいなければ、ミサのような弱気な人間は、とつととの過酷な医療現場から消え去つていただろう。

「ミサ！今日はよろしくね」

「あ、福永さん、よろしくお願ひします」

安堵の表情を浮かべているミサに、福永は横田でにやりと笑つて釘をさした。

「何も起こらないといいねえ～」

「あ、そんな脅かさないでください！」

「最近、401号室の前でラップ音が聞こえるんだってえ～」

「だからあ、脅かさないでくださいって」

「あははー」

福永はミサをからかうのが楽しいといった感じでおどけた。福永がいるだけで、場がぱっと明るくなる。おしつけがましくない明るさに、救われた患者もたくさんいるだろう。ミサも、福永がいることをとても心強く思つた。

準夜勤の大まかな仕事内容といつたら、まず30分程情報収集をし、仕事にとりかかる。夕食後の配薬。準夜帯で行う点滴の準備。夕食の食事介助。検温。消灯。消灯後の見回り。寝たきりの患者がいる場合は、定期的に体位変換、吸痰、オムツ交換など、正直言つて、超過酷である。

「そろそろ、休憩しようか」

福永と山中がミサに声をかけた。

「すいません。まだ、検温の記録書いてないんで、先に休んでください」

「こんなに落ち着いてんのに、まだ終わっていないの？」

もう1人の勤務者の山中が怪訝そうに言つた。

「ミサは丁寧だから、仕方ないね。もつひみつと、手を抜くとい」抜かないといボロボロになっちゃうよ」

さりげなく福永がフォローこまわった。

「手を抜くって言つたつてー」

ミサは子供がだだをこねる時みたいに口をとがらせた。唯一、福永だけには自然体でいることができるのだ。

「いい意味で。手を抜くの。早く、記録終わらせて休みな」

ちらちらちらちら～

「乙女の祈り」もとい、ナースコールが鳴つた。403号室。

ミサのチームの患者だった。

（あ～はじまつた・・。）

あと、もう少しで記録が終わるといつこりで中斷を余儀なくされた。

「神田のばあちゃんかー。また始まつたねー。」やれやれという顔で福永が立ち上がつた。

「あ、いいです。福永さん。私のチームなんで、行つてきます。」

403号室の神田さん。夜になると、ナースコールを鳴らしまくるので、みんな困惑していた。

「どうされました？」半ば飽きたように部屋に入ったミサ。

「あんな。茶をとつてくれ」

消灯を過ぎたにも関わらず、大声で話す。2人部屋であったが、神田さんがいつも夜中に騒ぎ出すため、隣のベッドは空気になつてゐる。

「どこのあるの～お茶？」

「弓を出し」

と床頭台を指した。1段目から3段目まで探したがみつからない。

「無いか？」

「はい。無いです。お茶、入れてきましょうか？」

「いひちやつたかな」

整理棚の方を指差して、自分も探そうとベッドから降りようとていた。

「神田さん！」

脳梗塞の既往があり、麻痺のある神田さんは立つことは無理である。ミサは必死に説得した。

「お茶なら入れてきますから、少し待つて。絶対にベッドから降りないで！」

「あー、そうか」

ミサは神田さんが、床に落ちないように棚をきかせると固定し、部屋を出た。が、部屋を出た瞬間に、また、ナースコールが鳴った。（もう、どうしたらいいんだろ）

「今度は何だった？」

「お茶が欲しいって」

ミサが言つと山中がつっこんだ。

「そんでお茶取りに来たの？ 消灯すぎてるからダメってはつきり言わないと！」

「でも、約束したので」

そうこいつしているうちに、また、神田のおばあちゃんからナースコールが鳴り、福永が代わりに行つてくれた。

「不穏時の指示は？」

休憩しているのを邪魔されたと言わんばかりに、不機嫌になつている山中がミサに聞いた。

「沈静剤の指示があります」

「それで、寝かすしかないよ」

「……」

「夜寝ないから、昼間寝て、また夜中に騒ぎ出す。昼夜逆転もいいところじゃない。不穏患者には鎮静剤いべべきだと思つた」

「はい」

山中に言われる通り、ミサは沈静剤を用意し始めた。

その時、福永が神田のおばあちゃんを車椅子に乗せて詰所に連れ

てきた。

「はい、神田さん。ここでお茶飲もうか。」

ミサも山中もあつてにとられた。

「あんた、何してんの？」

福永はミサに投げかけた。

「鎮静剤を……」

「少し騒いだら、鎮静剤があ。ベッドから落ちてもうつたら困るから、それも正解だけど……」

福永はその先は言わなかつた。

そんなことをよそに、神田のおばあちゃんは、詰所の机の真ん中を陣取り、あつたかいお茶を美味しいそうにすすつた。

「美味しいね」

とても嬉しそうな顔をしてつぶやいた。

「こんな食堂でお茶をよばれるなんて、久しぶり」

詰所を食堂だという神田さん。どうして夜中に騒ぎ出すのか、福永にはわかっていた。

美味しいね……

ミサの心に何かが響いた。

狭い病室の中、お茶も自由に飲めないこの人たち。寂しくて、怖くて。でも、感情に表現できなくて。彼らなりに行動すれば、騒いでいる、おかしなことをしていると疎まれ、沈静剤を打たれるのだ。こんなことは看護ではない！

何も言わない福永の態度が、言葉よりも多くの事を伝えた。勤務が終わつたあと、ミサは福永に話しかけた。

「ねえ？福永さん」

「へ？」

「私も福永さんみたいな看護師になれるかな？」

「私みたいな？無理無理。もっと人生勉強しなきゃ 無理無理」

舌を出して、おひけの福永は、どこか照れ隠しをしている様だった。

夜中の駐車場。キラキラと輝く星空に手を合わせた。

(今日も無事終わりました。ありがとうございました。)

第4話 飲み会

世間は3連休。休日のため、検査もなく、病状の落ち着いている患者は外泊にでかけている。

病棟に残っている患者も割と安定しており、いつにもなく暇な4病棟では、看護師たちは、薬袋に貼るラベルを切つたり、針やルートの補充などの内職をしていた。

「外泊してる患者が多いと楽だよね」

「ところでさ、今度来るロー・ティーって変わってるんだって」

噂好きの山中がそう言った。

「え？ 林も大分変わったけど、ろくな人が来ないよねー」

角野亜里沙や横にすわっていたスタッフが話しに加わる。

「もつと、ドラマみたいにカッコイイ医者っていないのかな？」
「ね。高津つていつたら、堅物な昔の政治家みたいだし…」
「加藤さんみたいな医者だつたらいいのに」

「ねー！」

ミサはもくもくと自分の仕事をしていたがふと、話をしている方に目を向けた。

「そういえば亜里沙ちゃん。例の加藤さん…」

山中が意味深そうに聞いた。

「あ、言つの忘れてたー！」と角野は本当に今思い出したように言った。

「加藤さんとー、来週の水曜日に、飲みにいこうって約束してたんだ」

「あー、するい。私も行くー」

「いいよ、いいよ。人が多いほうが面白いから」

「でも、お邪魔じやない？」

「山中さん！ 邪魔だつて言つてもつこいくるくせこ…」

角野が皮肉っぽくそう言つた。

結局、その場にいるスタッフのほとんどが参加することになった。「あ、渡辺さんはどうする?」と、山中が聞いた。ミサにとつては思いがけない誘いだつた。

角野はちらつと山中を見て、何で?という顔をしたが、あまり空氣の読めない山中は続けた。

「あなたも、行くわよね。多人数の方が会費安くなるでしょ!」

「あ、はい。じゃアお願ひします…」

少し間をおいて、ミサはそう答えた。

正直、角野の不満そうな顔もわかつていたし、必ず^{パンチ}恵も飲み会に来るに違いない。誘つた山中にしても、会費のためだけで、自分に来て欲しいというわけではないと、わかつたいた。

が、断らなかつた。

ミサは、加藤と話したい、という気もあつたし、何よりも、4病棟に就職してもうすぐ1年が経とうとしているのに、他のスタッフとぎくしゃくしているのが嫌だつたのだ。

何とか、仲間に入りたい一心だつた。

仕事を終え、ミサは家についた。1人暮らしとしては広い、2LDKのその部屋は、ところどころに雑貨やぬいぐるみが飾られており、女の子らしい雰囲気を出していた。

両親のすすめで、夜勤のときに危険がない様に、病院に近く、他の住人が家族連れ、という物件を探した結果、2LDKのこの部屋になつたのだ。

ミサには少し広すぎる気もした。

この冬のボーナスの時に衝動買いした、赤色の2人掛けのソファーにすわり、ボーッとしていた。

(飲み会の約束をしたけど、どうしよう。飲み会の場で、1人暗くなつてたら、本気で嫌われちゃうかも)

「そうだ。福永さんに電話しよー」

ミサは手帳を開き、福永が休みなのを確認して、携帯に電話した。

「あ~はい」

「あ、今、だいじょうぶですか?」

そつけない福永のがらがら声に気を使つたミサだったが

「あ”～珍しい。ミサから電話くれるなんて～！」

と割れるような大声に、ふつ、と笑つた。

「で、何?また、なんか問題?」福永は言つた。

いつも、ミサのことを心配してくれるのである。

「あのお、来週の水曜日に」

「あ～聞いた、聞いた。飲み会のこと?」

酒好きの福永である。もう、ちゃっかり誘われていた。

「良かつたア。福永さんいなかつたら、私、どうしようかと…」

「また、そんな弱氣で!ミサはね、もうひょいとずりついくら
いで丁度いいの!」

少し離れた、お姉さんの口ぶりだった。ミサは2つ離れた双子の弟との3人兄弟。

(福永さんがお姉ちゃんだったらしいのに…)
いつも、そう思つのだつた。

期待半分、不安半分、その日はやつてきた。病院から徒歩3分ほどにある居酒屋に向かうため

病院の正面玄関で待ち合わせる。もう、半数くらいが集まっていた。
(福永さん遅いな)

早くから待つていたミサは、落ち着かないといつた感じで、きよ
うきよろと福永の姿を探していた。

角野 亜里沙とパンチが、こちらへ迎つて歩いてきた。角野のいでたちといったら、スレンダーな体にぴったりのワンピースにコート、リボンのついたブーツ。おろした髪は大きめのカールがかかつており、皆の注目を集めた。そして、洗練されたブランド物のバッグは、彼女のセンスの良さを象徴していた。

「やっぱ、おしゃれやねー

山中がしきりに畠里沙を褒めるが、角野は当たり前つといった感じで、「そう？」とだけ答えた。

それからもパラパラと人が集まり、集合時間の18時には全員集合。総勢15人が、ぞろぞろと3分ほど歩いたところにある居酒屋へむかう。

「福永さん来ないかと思つちゃいました」

「まさかあー。飲み会は快出席なんだから」

ミサは列の一番後ろを福永と並んで歩いていた。

あつという間に店に着き、顔見知りの店主は「いらっしゃいませ」という代わりに「毎度！」と、一いつ貫いつた。

「加藤さん、もう待ってるよ！」

いつものスース姿の彼とは違い、ラフな格好で座敷の一番奥のところに座っていた。

「お疲れ様で～す！」と、加藤が手をあげた。

加藤をみつけると、すかさず、角野が横の席を陣取り、加藤の前にパンチが座った。

ミサと福永は一番加藤に遠いところの端に座つた。

みんなが席につくと、加藤が立ち上がり挨拶をし、

「今日は貸切だから、大いに盛り上がりください～！」と締めくくつた。

「加藤さん、さすがねえ。やつぱプロパーさんは違うわ」パンチが言つた。

「恵さん～。何度言つたらわかるんですか！今はエムアール！エムアール！」

「何でも、一緒じゃない！ま、今日はプライベートなんだから、あんたもゆつくり飲みなさい～！」

パンチとパンチは加藤の肩を叩いた。しかし、加藤はじつくり座つていられないという様子で注文する用紙とペンを片手に、注文をとつてまわった。

「皆さん、飲み物、何頼みますか？」

加藤がミサと福永のところまで来た。ミサは緊張で、正座してそのまま固まってしまった。

「福永さん、何、飲れます？」

「何つて、ビールに決まってんじやない。」の子にもビールやつて！」

福永は、加藤にそう言った。

（ウーロン茶、ウーロン茶…）

加藤に聞かれたら、そう答えようと必死になつていたミサであったが、福永の一言で変更せざるを得なくなつた。

「渡辺さんも、飲めるの？」

意外といった顔で加藤は聞いた。

「あの、少しなら…」

そう答えるのがやつとだつた。

「そり。楽しんでつて」

にこりと笑うと、加藤は店の奥にいる店主に、注文の紙を渡しこ行つた。

まさか、ミサが加藤に好意をよせているなんて、思つてもいない福永は

「あんた、コート脱がないと…暑いんじゃない？」

真つ赤になつたミサに、そう声を掛けた。世話好きな彼女は、お母さんのようでもある。

飲み会は盛り上がり、そのうち、席を関係なく、ウロウロ酒をつぎにまわる姿がみられた。

ミサは、角野と加藤が楽しそうに話しているのを気になつたが、福永の今までの経験談やヤンキー時代の話が面白く、山中や他のスタッフも輪に入り始めた。ミサは満足していた。

「渡辺さん、笑つたら可愛いじゃない！いつも存在消してるからね

え」

噂好きで、少しいじわるな山中も、酒がはいつて陽気になつ、ミサに話しかけた。

「そうですか？私、暗いのかなあ？」

「暗いも何も、雨戸を閉めた部屋のように真っ暗よー。あはは」

福永がそういうて茶化した。

「ヤンキーの福永さんには言われたくありません！」

「んだと、こらー。」と冗談っぽく襟をつかむ福永に「きやーごめんなさい。」と笑って、おどけるミサに周囲は驚いたが、ミサ自身も驚いていた。

「あんた、いつも飲み会欠席するけど、何か意味あんの？これからも、出席したらいいじゃない」と真顔で山中が言った。

言葉は悪いが、誘われたことが、とても嬉しかった。

「さあ、飲も飲も！」

すっかり酒が入り、おっさん化した福永は、周囲にも酒をすすめまくり、ミサも、その被害者になっていた。

「ふくながさん。もう、飲めませんよー」

すっかり、ろれつが回らなくなつたミサだが、周りも相当、酔つ払っていた。

時計は21時をまわり、貸切の時間が過ぎようとしていた。

「2次会行く人～！」パンチの掛け声がかかった。

15人ではじまつた飲み会であるが、1人帰り、2人帰り、2次会に行く人は半数以下になつた。

もちろん、加藤、角野、パンチ、山中はいつもの2次会メンバーである。

ミサはふらふらになつていたが、福永の強引な誘いもあって、2次会のカラオケボックスに向かうタクシーに乗せられていた。

ミサが斜め前方に視線をやると、助手席に加藤が座つていた。彼はあまり酔つた様子もなく

2次会の場所を運転手に説明している。

「ねえ、ミサー。絶対1曲は歌うのよー！」

ぐでんぐでんに酔つた福永は、ミサにもたれかかり、そう言った。

「福永さんだいじょうぶですか？」

加藤が後部座席を振り返った。

「だいじょぶ、だいじょぶ」と言つて、くだらない話を続けていた福永だったが、しばらく車に揺られるうちに静かになつた。

「福永さん眠っちゃつたね。渡辺さんも大丈夫？」

振り返つた加藤に、一瞬ドキッとしたミサだったが

「少し飲みすぎたかな・・・でも、大丈夫です。」と答えた。

しばらく車内は沈黙が続いたが、意を決したように、ミサが口を開いた。

「加藤さん、彼女とか…いるんですか？」

酔いにまかせての質問だった。

加藤は一瞬、え？という顔をした。

横の福永はいびきをかいして眠つてしまつている。
大分、間が空いて

「うん、いるよ。」と加藤は答えた。

ミサの質問は、大失敗であつた。

タクシーは目的地に到着し加藤が先に降りた。加藤はお金を払うと「予約してくる」と、先に店に入つて行つた。

「福永さん、着きましたよ！ 起きてください！」

運転手も、迷惑そうに大声で言つた。

「お客様さんっ、着きましたよっ！ 大丈夫ですかっ？」

つばがかかりそうな運転手の勢いに、困つたミサは、もたれかかつている福永を思いつきり、ゆつさゆつさと揺さぶつた。

「失恋したからって、当たんないでね～！」福永がボソッと言つた。

「うわー！ 寝たふりして、聞いてたんだあ～。ひどい！」

「あはははは～。さあ、行くよ～」

2人は酔っ払つたサラリーマンのように、肩を組み、よろよろしながら店に入つていつた。

第5話 最低な男

カラオケボックスに先に入った加藤が「あらに向かつて手を振つている。

「福永さん、こっちこっちー」この曲がったといろの16番ですか
らね」

「う、ん、ちょっとトイレ…ミサ、行くるー」

（行くるーって完全な酔っ払いじゃないですか）

福永に手をひかれて、トイレまで一緒にいく。女子中学生の連れトイレみたいなもんだ。

ミサは福永がなかなか出でこないので、トイレの入り口で待つことにした。

（16番つていってたな・・ビッちだろ）

ミサが右側の廊下をのぞくと、何やら男と女が険悪なムードでやつて來た。

「ちょっと…待つて……」

清楚な感じの女人だった。カラオケの雰囲気には場違いな、そんな感じがした。

（うわっ。なんか、ややこしそう。福永さんまだかな）

男が帰ろうとしているところを、つかつかと後ろから、女が追つかけてきて、男の前方をふさいだ。2人は丁度トイレの前で、つまり、ミサの前で口論を始めた。口論というよりは、女が一方的に話している感じであった。

やきもきしてゐるミサを全く無視し女は続けた。

「やだ、もう」

泣いているようだった。

「もう、無理」

男が一言だけ言った。

感情の無い冷たい言葉に、ミサはつい男の顔を見た。男は整つた

顔であつたが、女を見据える冷たい視線に、思わずたじろいだ。

ミサは女子トイレの中に戻ろうとしたが（今、動いたら気まずい）と思い、友人を待つてます的な態度を装い、知らん顔を決め込んだ。女が号泣して、男の腕にすがろうとすると、邪魔だ！　というよううに女を押した。

バタンッ

細いその女は廊下に投げだされ、そのまま置き去りにされた。

（貴一とお富か…）

「おまた～～！」

長々とトイレにこもっていた福永が戻ってきた。

「もう～～！　福永さん、遅いです！」

「何か最近のカラオケはすごいね～～！　これ、見てみ～～」

廊下にある大きな花瓶に抱きついてキヤー・キヤー言つている福永をよそに、ミサは泣いているの方に目を向けた。

女は立ち上ることもできず、しばらく泣いているようだった。

（あんなに、人を好きになることができるのかな…）

激しい恋の終わりを目の当たりにしたミサはそう思つた。

「カラオケ、パリジエヌだつて！　す～～！」

全く雰囲気の読めない福永を引っぱって16と書かれたドアを開いた。加藤が「浪漫飛行」を歌い、皆が酔いしれているところだった。

（やつぱ格好いいなア　あ）

その後、何かをふつきつたようにミサも歌い、その歌声で周りを圧倒した。

何より、後ろで踊る福永には、皆大爆笑であった。

ミサの歌にはパンチも関心し

「若い子は歌がうまいね～～！」と、ミサの肩をバンつとたたいた。おばちゃんは感動すると、人の体を叩く習性があるらしい。

「今度の歓迎会もあんた来なよ～～！」

「はいっ。お願ひします」

ニサはとても嬉しそうに返事をした。

結局、2次会でも加藤とあまり話せなかつたミサであつたが、周囲に少し馴染んできた自分が嬉しくて、何だかつきつきした気持ちになつていた。

数日後、高津が新しいローテートを連れて、病棟の案内をしていった。詰所に入つて来た時、皆、驚いた。

「やだ、格好いいじゃない。誰が変わつてゐて書いたの？」

山中かひそひそ声で恵に言つた。

あんたが言つてたんじゃなし

とハンチに軽く手にまれていた山中を罵で、沙は笑った。

何原で「」と書いていた。

思わず顔を砕けりか

第6話 理想と現実

「やっぱ新しいローテートって変わってるよね
研修医の仲原がやつてきてから1週間。彼のマイペースな行動が
目につきはじめた。

カツカツカツカツカツカツ、革靴の音を響かせて、険しい顔で高
津が詰所内に入つて來た。

「仲原はいなか?」

傍にいたミサは驚いて、すぐっと立つと

「あの、410号室で処置しています。」と、小声で答えた。

「研修医のくせに」

詰所を出る際、高津は「うづいた。ヒラヒラとなびく白衣が高圧
的にみえた。

(トイレの貫一。今度は何をしでかしたんだろう〜。)

ミサは、仲原のことを勝手にトイレの貫一と命名していた。

ミサ達、看護師は清拭にとりかかっていた。お風呂に入れない人
達に、あたたかいおしほりタオルを渡すのだ。

「田中さん、はい、どうぞ」

2本のタオルを保温バッグに入れ手渡していく。

「いらん」

70代のその患者は言った。

「でも田中さん、昨日もその前も拭いてないですよね。今日は手伝
いますから」

ミサは困った表情をして、田中に言った。

「いらんつていつたら、いらん!」

ミサがすすめれば、すすめる程、意固地になつていつた。ミサが
出でいかないので

田中はしげれをきらして言った。

「体、拭いたことにしといたらえーやないか」「また、後できます」

ミサはいったん部屋を出て、考えこんだ。難しい患者を何人か見てきたが、田中のかたくなな態度に疑問があった。
(入院してきた時は、そんなに難しい人じやなかつたんだけど…)
「ちょっとお、渡辺さん。ちゃつちやと配らないと検温する時間がなくなる…」

脅迫めいた声で、パンチが注意する。

あの、飲み会以来、少し周囲にとけこんだ感じのミサであつたが、やはり、仕事場では注意されてばかりだつた。

「あの、田中さんが…」

「もう、あのじいさん！本当に頑固なんだからっ」と、パンチは鼻を膨らませて、ミサからおしごりタオルを奪い取り、田中のもとへ置きに行つた。

「ちょっと行つてくれる！」

(あー、相談するんじやなかつた)

ミサは反省した。

パンチは田中のところに行つてきたかと思うと、すぐ手ぶらで戻ってきた。ミサは田中の事が、とても気になつていたが、業務に追われていた。

自分で拭ける人にタオルを配つたあとは、寝たきりの患者の清拭が待つっている。もたもた時間をかけていると、必ず言われる言葉がある。

「さんだけ、特別扱いはできないんだからね！」

しばしば、新人のナースは学生時代に実習してきたことと、現実とのギャップに悩まされる。ゆっくり、1人に関わり、話を聞いたり、お世話したりしてきた学生時代。

今は、ゆっくり患者の話に耳を傾けることもままならない。

いつもミサは思っていた。学生時代は、バケツにたっぷりのお湯を汲んで、タオルをしぼり拭いていた。そして、必要に応じて手浴、

足浴を行い、洗髪を行う。実習先の看護師も、看護学校の先生も、そうする事が当たり前のように教えた。

(1人に時間をかけすぎてはいけない)

ミサが就職して初めて知った現実。

実際、ミサが患者の話を聞いていると、必ずといっていい程、注意されるのだ。

「どうしてたの？ 何してたの？」

やつと、全員の清拭が済み、ミサは検温の準備をして、真っ先に田中の部屋に行つた。

机の上には、パンチが置いていつた保温バッグが、開けることもなく置いてある。田中は、壁の方を向いて、ミサの方を向こうともしない。

「田中さん」

「…」

「検温をせんください」

「…」

「朝のこと、怒ってるんですか？」
ミサはストレートに聞いてみた。

「風呂…」

田中はそれだけ言った。

「お風呂に入りたいんですか？」

ミサがそう問い合わせ返すと、壁の方を向いて横になっていた田中が、急に起き出して怒鳴つた。

「もう、何日も前から、お風呂に入りたいって言つてんだろー！あんたら看護婦は、聞く耳を持つていなか！」

ミサは初めて聞いたことだが、田中はスタッフの誰かに、お風呂に入りたいことを訴え続けていたようだ。

一瞬、田中の剣幕に驚いたミサだったが、冷静さを取り戻し、こう言った。

「田中さん、点滴が抜けないと、お風呂は無理ですよね。だから、

拭かせてください」

田中は、もういい、と諦めた表情を浮かべ
「誰に言つても一緒！だから、看護婦は嫌いなんだ」
そう言い放つた。

「じゃ、点滴抜こうか！」

不意にカーテンの向うから声が聞こえた。

「え？」

ミサも田中も驚いて、カーテンの向うに視線をやつた。
隣の患者を診ていた仲原だつた。カーテンを開けて、入ってきた

彼はもう一度

「今から、抜こう！」 そう言つた。

「せ、先生。大丈夫なんですか？」

田中は来たばかりの若い研修医を半信半疑でみつめる。
ミサとて同じだった。

(また、勝手なことしたら高津に怒られるに違いない)
点滴は抜きます。その代わり、『はん、もつちゅう』と食べてください

田中は抗ガン剤のあとで食欲不振で、低栄養のために点滴が入つ
ていた。

「ほんとに、抜いてくれるんですか？」

「今、半分くらい食べられてるから、抜いても大丈夫ですよ。食べ
られなかつたら、また入れなおしたりいいんだから」

仲原は田中の病状を把握しているようで自信を持って答えた。そ
して、田中の左腕にある点滴のルートをあつという間に抜いた。

「風呂、入つてもいいんですか？」

「はい、どうぞ」

田中の顔がぱっと明るくなつた。

ミサにとって、こんな、自信に満ちた研修医は初めてだつた。や
つてくるローテーターは、ほとんど高津にお伺いをたてて、まるで自
分の意見を持つていなければならなかったから。

それが良いのか悪いのか、ミサには判断がつかなかつたが、田中には良い先生に映つたに違ひない。

ミサは、部屋から出て行く仲原をボーゼンと見ていた。

(トイレの貫… やるじやない)

実際、看護師の平均離職率は11・6%、新卒看護師は9・3%。日本全国で、1年間に看護学校140校分の看護師が退職している計算となる。せっかく、勉強して授かつた国家資格を、若いやる気のあるはずの新人ナースが、たつた1年で捨ててしまうのだ。新人ナースが辞めていく理由の大半は、理想と現実とのギャップ。ミサも例外では無かつた。

「看護婦は聞く耳を持つていないので！」

そう怒鳴つた田中の声が、ミサの頭の中をこだました。ミサは入院しているすべての患者から、言われているような気がしてならなかつた。

第7話 過ち

「もう、終わっちゃった」
女は無氣力に呟いた。

昼間だというのにカーテンを閉め、うす暗い部屋の中、彼女は何も考えたく無いといった様子でベッドに入った。

「仲原くん…」

佐藤恭子 27歳。彼女の頭の中を別れのシーンが駆け巡る。彼の冷たい蔑んだような目。置いてけぼりをくらつたあの日を思い出していた。

その日、恭子は彼の朝食の支度にとりかかっていた。ごはん、味噌汁、あじの開き、サラダ。恭子は味噌汁を味見しながら、時計を確認した。

「遅いなあ」

時計は丁度10時を指していて、朝食にはかなり遅い時間だった。
(当直が長引いてるのかしら?)

恭子はそう思い、携帯をかばんの中から取り出した。メールが入ってないか確かめるが、やはりいつもの様に連絡は無しだった。

「連絡くらいくれてもいいのに…」

彼女はそう呟くと、椅子に腰掛けた。彼と付き合い始めたのは1年前。はじめから、彼は恭子を待たせてばかりだった。研修医である彼は忙しく、ここ最近は、恭子の部屋に来るのは「飯を食べに来るか、寝に入る位。それでも、恭子は満足していた。

「ただいま」

「考え方」としていると、彼が帰つて來た。

仲原孝也 27歳。彼と恭子とは高校時代からの友人で、あるきつかけで付き合つことになつた。

「おかえり。遅かったね」

「うん」

「やだ、それだけ？」

ふふっと微笑むと、食卓に料理を並べ始めた。無口な彼は、自分の席に座り料理が出揃わないうちから、モグモグとご飯を頬張っている。

「もづ、仲原くん！ 喉つまりちゃうよ」

「うん」

美味しいそつに食べる仲原を恭子はじーっと見つめた。黒い真つ直ぐな短い髪。綺麗な2重の目。鼻筋の通った整った顔立ちに見どれていた。

(愛想が無いのが玉に傷だけど)

「どう、美味しい？」

「うん」

「仲原くん、うん、しか言つてくれないんだね」

恭子は少しうれしそうな顔をして、食器を片付けはじめた。

「3時に、また病院に戻らなきやいけないから、起こして」

呆れる恭子をよそに、仲原はそう言つた。

「ちょっと…自分勝手すぎる」

恭子はそう言つたが、仲原は気にする様子もなく、わざと服を着替え、ベッドにもぐりこんだ。

(私つて愛されてるんだろうか)

恭子はしばしば不安になつた。置いてけぼりをくらつた恭子は、部屋の中でテレビをつける事も出来ず、紅茶を片手にしばらく考え事をしていた。

考えれば、出会つた頃から彼のペースで生活していた事に恭子は気付いた。私の事などどうでもいいに違いない。そんな風に思い始めていた。

仲原を起こすまで、時間がある。恭子は、近所にある行き付けの珈琲店に足を運んだ。

店内は珈琲の香りでいっぱいになつていた。平田の店内は他に客

も無く、店主は暇そうに腰掛けで新聞を開いていた。

「恭子ちゃんいらっしゃい」

ひげをたくわえ、頭には赤いバンダナを巻いた店主が声をかけた。

「どうした？ いつもの無口な彼は？」

「茶化さないでください」

「茶化してなんか無いよ。本氣で心配してんだから」

恭子はいつもの様に、店主に相談をはじめた。店主は珈琲を入れながら恭子の愚痴を長々と聞いていたが、お気の毒といった口ぶりでこう言った。

「でも、好きなんでしょう？」

恭子はそれ以上何も言えなかつた。彼の腕の中にいるとき、彼が自分に優しく触れる時の感触。そして、たまにしか笑わないけど、あの笑顔。

店内に流れるJAZZが恭子の感情を、より揺さぶつた。

しばらく珈琲店で暇をつぶした恭子は、他に行く所もなく、部屋に戻つた。そして、約束の時間まで、そつと音をたてずに待つた。

時計はようやく3時を指し、約束通り仲原を起こした。

「仲原くん！」

「んん……」

「起きて。時間だよ」

恭子は何かを期待したが、仲原はゆっくり起きて、ベッドの恭子がいる方の反対側から降りて身支度を始めた。切なかつた。付き合つてゐるのに片思いのような、そんな感覚にとらわれていた。

「行ってきます」

「行つてらつしゃい」

恭子は、はあーっと、大きくため息をついた。

仲原が出かけたあと、恭子はさつきまで仲原が寝ていたベッドに横になつた。どれ位眠つただろうか。携帯が鳴り、恭子が気付いた

時には外は真っ暗になっていた。

半分、寝ぼけていた恭子は、相手の番号も確認せずに出了た。

「会いたい」

聞き覚えのある男の声だった。

「え？」

「会いたい、今」

恭子には、それが誰だか分かつていて。その声を聞くだけで体の震えが止まらない。

恭子は、男の話が終わらないうちに、携帯の電源を消した。

がちやがちや

「きやつ」

ドアが開き、恭子の恐れていた現実が顔を出した。

「どうした？ 何で出てくれない？」

1年前に別れた彼である。彼とは5年という長い付き合いだった。学生時代の彼はリーダーシップがあり恭子は憧れていた。憧れの人と付き合い、楽しい日々を過ごしたが、就職してから、彼の態度が一変した。

恭子が震えが止まらないのは、彼から受けた暴力のせいである。

「何で、携帯の…」

「ああ。恭子の友達に聞いた」

男は「ぐる冷静に、優しく話した。

「やり直したい」

「…」

恭子は少し、この男から離れて言った。

「付き合っている人がいます」

「わかつてる」

男は今までの事を反省している、といった内容の話をしたが、恭子にはとても信じられず

益々震えは止まらなくなつた。

「ごめん」

いきなり、その男は部屋に入り恭子を抱きしめた。

「ごめん。恭子がいないとダメなんだ」

驚いた恭子が男の顔を見ると、彼の頬を涙が流れた。

「何で？」

彼は恭子を抱いたまま続けた。

「愛してる」

ベッドの中にはいつもと違う2人がいた。恭子は、なぜそうしたのか自分でもわからなかつた。仲原を愛すれば愛するほど、すれ違う感情を補いたかったのだろうか。

恭子が驚くほど、彼は優しく抱いた。今までの彼とは別人のようであり、いつの間にか震えも止まつていた。

「ごめんなさい」

「何で謝る？」

「私、やつぱり…まーくんとは付き合えない」

つい、昔、呼んでいた名前が口からこぼれる。

「まーくんか。懐かしいな」

そう言つて彼は、恭子のおでこにキスをした。いつも、行為を終えたあと、彼は忙しそうに去つて行つた。今の仲原だつて同じことだ。恭子はベッドの中、いつまでも自分の体を離さない彼の態度に驚いていた。

そして、また、身を任せた。

「ただい…」

仲原が仕事を終え戻つて來た。

「や…やだ…」

第8話 慘めな別れ

仲原は「ただいま」と言いかけたが、彼の鋭い目は恭子の隣にいる男に向かう。慌てて、ベッドから降り服を整えていたる恭子とは対照的に、横の男は慌てる様子も無くベッドに居座っている。部屋の雰囲気から大体のことを察知した仲原は、彼女に説明を求めるわけでもなく、その場を立ち去った。

「やだ…待つ…」

恭子は仲原を追いかけようと部屋の外に出たが、仲原の姿をみつける事はできなかつた。どうすることも出来ず、ドアの前に呆然と立ち尽くしてしまつたが、男の言葉にふと我に返つた。

「お前の彼氏は、理由も聞かないんだな」

「また、連絡するから」

男はそう言って、恭子の黒髪を撫で、出て行つた。

恭子は混乱していた。訳も聞こうとせず去つていつた仲原。久々に会つた前の彼の優しい笑み。不思議な感情に囚われながらも、取り返しのつかない事態になつたということは判つた。
(許してくれる訳ない……)

部屋の中にある仲原の物が、自分を恥ずかしい人間だと責め立てている様であり、彼女は部屋にいることが出来なかつた。

恭子は、その後、何度も仲原に連絡をとろうとしたが、電話に出てくれない彼に、絶望し、途方に暮れていた。何度も彼のアパートを訪ねてみたが、全く会えず。

そうしたまま、数日が過ぎ、彼女は仲原の勤務先である病院に初めて電話をした。それ程追い詰められていたのだ。

「はい、安田病院です」

「外科の仲原先生お願ひします」

「お約束でしたでしようか?」

恭子はとつさに嘘をつく。

「はい。佐藤と申します」

「お待ちくださいね。今から、連絡をとりますので…」

どれだけ待つたのだろうか。頭の中をいろいろな言葉が浮かんで、あーでもない、こーでもないと混乱していると、受話器があがった。

「申し訳ございません。仲原先生は…」

バンツ!

「どうして出てくれないのー!」

恭子は携帯を壁にむかって投げていた。

ただ会いたい一心だったのかもしれない。気がつくと、いつの間にか病院に向かっている恭子の姿があった。仲原の研修先でもある外科の3病棟に足を運んだ彼女。会つて何を伝えたいのか、わからぬ位混乱していた。

「あの、すみません」

途中、白衣の医師が通る度にドキドキした恭子だったが、やつとの思いで外科3病棟のナースステーションを見つけるとのぞいて声をかけた。

「仲原先生いらっしゃいますか?」

「あの? どちら様ですか?」

若い看護師は、恭子を見るといつも尋ねた。

「佐藤と申します」

「お約束でしようか?」

「いえ」

恭子は顔を曇らせた。

彼と会つのがこんなに難しい事なのか。約束が無いと会えないのか。恭子は失つたものの大きさに愕然としながら自分の行った行為を悔やんだ。悔やんでも悔やみきれない。

「今、こちらにはおられないのですが」
(やつぱり会えないの…もう待てない…)

看護師は驚いた。田の前にいる女性が、泣き始めたから。

「あ、あの、大丈夫ですか?どちらの患者さまの…」

「いえ、違うんです」

「え?」

「どこに行つたら仲原先生に会えますか?」

看護師は「あつそうか」とこう表情をして、いつ囁つた。

「もしかして?先生の?」

興味深げに尋ねてきたが、恭子は「あの…」と口にもる事しかできなかつた。困惑して立ち廻くしてゐる恭子に看護師は「今日は、送迎会があるので…」と言つて、お店の名前を恭子に教えた。

「7時からなんで、」と、親切な若い看護師は付け足した。

時計は7時半を指している。恭子は看護師から教えてもらつた店の、入り口から少し離れたところで待つた。待ち伏せだ。自分は絶対にこんな事をするような人間では無いと思つていた恭子は、ただ、会いたい一心でここに居る自分自身が信じられなかつた。さつと、冷静さを失つていたのだろう。

2月の寒空のなか、真っ暗になつた街は、いつそう寒さを増した。吐く息も白く、マフラーに顔をうずめた恭子だが、田は仲原の姿を探していた。

店から、人が出て行く度に恭子は田を凝らしたが仲原は出てこない。

8時が過ぎ、店の前で待つ恭子はどんどん不安になつていつた。もしかして、店には居ないのだろうか?何か用ができる、来れなくなつたのだろうか。彼女は、店内に入るか、入らないでおるべきか迷つていた。

ようやく9時になつただろうか。恭子の体は芯まで冷え、馬鹿げた事をしていい自分が情けなく思つた。

ガラガラガラツ

店の引き戸が横に開く。

「やだー先生！」

「あはつはは」

会を終えた人が続々と店から出てきて、入り口で立ち話を始めた。会話から病院関係の人であることを察し、恭子は、酔っ払った人達の中に仲原の姿を探した。しかし仲原はその中にいない。

「先生、次どこ行くんですか？」

「カラオケー予約してあるから！」

「早く、タクシー來たぞ」

「待つてートイレ」

タクシーが3、4台続いて到着すると、騒がしかつた人の束はす一つと消えた。

店の前はまた、寂しくなり、恭子は、また1人になった。

（待つて！ もしかして……）

恭子には心当たりがあった。いつだったか、仲原を迎えに行つたカラオケ店。そして、彼女は記憶をたどり、車を目的地まで走らせていた。どうやってたどり着いたのか自分でも覚えていない程、夢中だった。

店に着き、受付のロビーを見渡すと、先に到着した人たちの集まりに混じつて待つている仲原の姿があつた。

（いた…）

久しぶりに見る仲原の姿。今はとても遠い存在に思える。恭子は静かに歩み寄ると、近くまで言つて声をかけた。

「仲原くん！」

仲原が、声のする方をみると、そこに恭子の姿があつた。仲原は困惑した表情で集まりから離れ、人気のない廊下へ足を運んだ。恭子は仲原の後を追つかけたが、途中、仲原の足が止まり、急に恭子の方を振り返つた。

「何でここに？」

「仲原くん。この前のこと」

仲原は、うん、とうなずいた。話を聞いてくれる様だったが次の言葉に恭子は愕然とした。

「荷物とりに行くから、部屋の外にでも置いといて」

怒った様子もなく、別にどうでもいいといつ無関心な仲原の態度。恭子は苛立ちを覚えた。

「どうして何も聞いてくれないの？」

仲原はしびれを切らせた様で、面倒くさいついでに言い放つた。

「じゃあ何が言いたい？」

「……」

結局、仲原の言つ通り、恭子には何も説明できなかつた。自分が悪いのだ。

「とにかく、荷物とりにいくから」

足早に去ろうとする仲原に、恭子はしつこく食べ下がつた。いつもの控えめで物分りの良い彼女では無かつた。

「もう一度やり直して欲しい」

「元には戻れないだろ？」

仲原は皮肉っぽくそう言つて、集まりの中に戻ろうとした。去ろうとする仲原を追つかけ、彼の前に立ちはだかつた恭子だつたが、冷たく愛情の無い仲原の視線は、彼女の心の奥に突き刺さつた。

「やり直したい。どうしても無理なの？」

そう聞いた恭子だつたが、仲原の答えを聞くまでもなく、結果はわかつっていた。彼の表情からは、自分に対しての愛情のかけらも感じ取れなかつたから。

「もう、無理」

予想した彼の答え。

「やだ、もう」

別れに直面した恭子は泣き出し、必死に仲原にしがみついた。み

つともない姿だと、わかっていたが、自分をコントロール出来ないでいた。

仲原はうんざりだという様に腕を振り払つたが、運悪く、細い恭子の体は廊下に投げ出された。途中、恭子は哀れむようにちらりと向かつた視線を感じていた。

第9話 帰りたくない患者

「ねえ。バレンタインのチョコ買つた?」

「あ～忘れてた」

「忘れてたじや無いわよ!」

「ちゃんと渡辺さんにも言つとかないと」

「はーい」

「30人分位買わなきゃいけないんだから、早めに買ひに行つといでよ」

「面倒だなあ。何で先生に買わなきゃいけないんだろう?」

「恒例行事なんだから…文句言わない!」

ここ4病棟では、バレンタインデーに、ナースからドクターに義理チョコを渡すという習慣がある。チョコレートを買って渡す事は、新人ナースの役目になつてるので、今年はミサと先輩の山口が当番である。

「失礼します」

休憩室はナースステーションの奥にある。皆、時間差でお昼休憩をとりにやつて来るのだ。ミサも今、ひと段落終え、休憩にやつて来た所である。

「丁度良かった! 渡辺さん。先生に渡すバレンタインデーのチョコレートの事なんだけど」

「はい」

「今年は、私と渡辺さんが当番だから、お互ひ、休みの日に買出しに行かない?」

「山口さんと、私で? でも、そんな行事あるんですか?」

「でしょー。昔からの恒例行事だから、断るわけにいかないしどにかく、私、勤務表持つて来る」

ミサはやれやれという顔で、持つてきた弁当に箸をつけた。

(ただでさえ、先生つて怖いのに…チョコレートを渡すなんてやだ

なあ）

1つ先輩の山口は、ナースステーションから勤務表と、「4病棟」と書いてあるノートを持ってきて、チヨコレートを渡す日と人を確認し始めた。

「中瀬先生は大学に戻ったでしょ…上田も…来たのは…仲原とお。いち、にい…うわっ！ 全部で27人だあ」

「そんなにいるんですか？」

「ねー。面倒くさい、もう。買うのは2人で買いに行くけど、渡すのは半分ずつ…だから13人と、14人に分けると…」

手際の良い山口はパツパと事を運んでいく。ノートに何やら書きこんで、ミサに見せた。

「渡辺さんは、こっちの列の先生に渡して。私はこっちの列。」行の最後に仲原孝也という文字があった。

（やだー！ 絶対！）

眉をひそめているミサをよそに、山口はばどんどん段取りを進めていく。

「今度の水曜日、私も渡辺さんも休みだから、買いに行く？ 何か予定ある？」

「いえ。お願ひします」

傍に居て聞いていた角野亜里沙が、割り込んできた。

「ちょっとお、加藤さんも人数にいれた？ 日一、お世話になつてんだから、きちんと入れといでよ」

「あ、はい」山口はすかさず、加藤の名前を書き込んだ。
「渡辺さんの列は1人少ないから、加藤さんの分は、渡辺さんが渡してね。これで、ちょうど14人ずつじゃん」

山口は満足気な表情をして、勤務表を戻しに行つた。そして、ドクターの名前が書いてあるノートを2枚「コピーし、1枚をミサに渡した。

山口は2年目であるが、とても手際がいい。去年、新人の時に当番をしたせもあるが。

ミサは渡された用紙に目を通した。

仲原孝也… 加藤昌弘

(まさひろひつていうんだ。加藤さん……)

ミサは、休憩を終え、受け持ちである安達の部屋に来ていた。

「安達さん、そろそろ退院の話が出ているんですね」

「またかー。婦長に言われたんやろー？」

安達は、まともに話を聞かずとり合おうともしない。そればかりか、テレビの話題にすりかえたりして、明らかに退院したくない様であった。

「安達さん、退院して心配な事つて？」

「あれれ？ ミサちゃんまで、追い出しにかかった？」

「ち、違こま…」

「ミサちゃんは優しいからわかってくれると感づナビ。」

「いえ……」

「俺、返るところ無いの」

「じゃ、じゃあ、帰ると見つけないと…」

「なんで、ここに居させてくれないんだろうなー」

ミサは不思議に思つた。家に帰りたくない人がいるといつ事を。どうやら、安達が「帰る家が無い」と言つたのは本当なのかもしない。そうなると問題は深刻だ。

この前の病棟会で、師長が安達のことについて言及していた。入院費を一切払っていないこと、家族と連絡がとれない事。そして、入院日数が3ヶ月以上に及ぶことを強調していた。

「何とか帰さないと…」と、師長が言つた言葉が胸に突き刺さる。(どうしたらいいんだろう)

これ以上、安達に言つても無理だ。ミサはそのまま部屋を出た。

「ミサちゃん。忘れ物〜！」

考え方をして出てきたミサは、血圧計を忘れてたのだ。安達はミサを追いかけて「はいっ！」と血圧計を渡した。その、人懐っこい

目、にこりと笑った顔。ミサは、ビリして、この人が、家族と連絡がとれないのか、不思議に思った。

(いい人なんだけどなあ)

「師長さん！ 今いいですか？」

ミサは師長の姿を見つけると、深刻そうな面持ちで話し始めた。

「あの、安達さんのこと…」

「あ、受け持ちだったわね。で？ 退院のことか何か？」

「はい」

「困ったわねー。私も何度も説得してるんだけども…」

師長は本当に困った表情をしている。そして、続けた。

「実際、入院費も払ってくれないし、在院日数も長くなってきたし、看護課からも会計課からも、退院させる様に、つるをへ言われてるのよ」

看護課は、看護師長の集まりで構成されていて、言つなれば、看護課長は看護師全体のトップである。病棟の師長とて、看護課の方針で動いているため、逆らうこととはできない。

「ソーシャルワーカー社会福祉士に、療養型の病院を探してもらってるんだけど、ビニ

も満床で、安達さんの様な人を受け入れる先は無いのよ」

ミサも師長も黙り込んでしまった。

「あとで、もう一回説得してみるわ」

師長はミサにそう言うと、ため息をついた。

第10話 片想い

「うわ～いい天氣い」

薄水色の空。冬独特の澄んだ空氣。ミサは早起きをしてベランダで洗濯物を干していた。

朝の出勤に向かうのだろう。忙しく歩く人や車の列を見ながら、自分で休みのような感じがして、得した気分になっていた。

ピ――――――！

「あ、やかん やかん」

忘れっぽいミサの為に母親が用意したものだつた。あまりにも、強烈な音に毎回驚かされている。コンロの火を消して戻つてくると、サンダルの片方が無いのに気がついた。

「あれ～？ どこ行つたんだろう～」

慌ててサンダルを脱いだので、サンダルはベランダの柵の隙間から落ちた様だ。

(私つて、やっぱドジだなあ)

ミサは慌ててパジャマを着替えて、下に降りサンダルを探した。ベランダの下は、こじんまりとしているが、裏庭になつている。芝生の庭はミサのお気に入りだった。

「あつたー！」

ミサは子供っぽく喜び、サンダルを拾つた。ふと、周りの景色に気がつく。1階の住人が植えたスイセンが横一列に可愛く咲いている様子を見て、ミサは思わずしゃがみ込んでスイセンに顔を近づけた。

「可愛い。アヒルみたい」

そつとスイセンに触ると、ニコニコと笑つた。もうすぐ22歳になろうというのに、頬をピンクに染めて笑うミサは、まるで少女のようだ。白く透き通るような肌が、彼女を若くみせているのかもしれない。

ミサはサンダルを片手にアパートの正面にある階段へ回った。正面は駐車場になつていて道に面している。この道は、病院関係者が抜け道としてよく使つている。

ブツ

車のクラクションが鳴つた！

「由比だあ

運転席の同級生をみつけたとミサは嬉しそうに手を振つた。運転席の友達もそつと手をふり返す。出勤途中だらつ。車を止めることなく去つていった。

車が去ると、前方から足早にやつてくる通行人の姿があつた。由比が合つた。

(うわっ！トライレの貫一さん…)

ミサはとつさに逃げようとしたが、あまりに由比が合つてしまつたと慌てていた。

そして、トライレの貫一をこと仲原は、速足で歩きながら声をかけた。

「おはよー！」

「お、おは？」

(あーーー！通り過ぎちゃつてるし……)

ミサは驚きながら、とつと歩いて去る背中を見送つた。寝癖のついた髪。

怖そうだけど、悪い人じゃないかも。ミサはそう思った。

お昼を過ぎ、ミサはパーティで待ち合わせをしていた。1年先輩の山口とバレンタインデーのチョコレートを買つ為である。案の定、特設されたチョコレート売り場では、平日だというのに、たくさんの人で賑わっていた。

ミサは早めに来て待つていたが、さほど待つことなく山口が現れた。

「私も早めに来たつもりなんだけど、もう待つてたんだ」

「そんなに待つてないですよ」

「そう? それなら良かった」

2人は、とりあえず端から順番に見ていく」とこした。

「これ、いいんじゃない?」

全部見ないうちに、山口はかゞにチョココレートをズンドン入れていぐ。

「あの、山口さん!」

「何?」

「それ、あんぱんまんのチョコの方」

「あ、そうか。包んであるからわからなかつたあ。500円の詰め合わせは…」

「向うにもいろんな種類があるみたいですよ」

ミサは、適当にチョコレートをカゴに入れていぐ山口を、制するようになつた。

「いいの、いいの。悩んでるだけ損だつて。好きな人ならともかく、ドクターなんて、どーでもいいんだから」「どーでもつて……」

いつも、買い物に行つても迷つて迷つて、結局買わないミサは、山口の思いつきりの良さに驚いていた。あつという間に人数分のチョコレートを選び終え、山口がレジに並びに行つた。

山口がレジで並んでいる間、ミサはショーケースの中のチョコレート達を眺めていた。

「ねえねえ、これ可愛くない? どう思つ?」

「いいじゃん。」

「あなたもこれにしなよ!」

「やーだ、彼氏甘いの苦手だから……」

高校生くらいの女の子達が会話している。

ミサも彼女たちにつられて、ショーケースを覗き込む。

(可愛いーー)

ピンクのハートの箱に、星の形やハートの形のチョコレートが品

良く詰められている。

チヨココレートとチヨココレートの隙間に、小さい造花が埋められていて、ミサは見入っていた。

(加藤さんのだけ、これにしあやおうかな？)
ミサは一瞬そう思つたが、タクシーでの出来事を思い出して、暗い顔になつた。

「加藤さん、彼女とか…いるんですか？」

「うん、いるよ」

「買つてきたよー！」

物思いにふけつていたミサは、山口の大きな声にびっくりして振り返つた。

山口の両手には、大量のチヨココレート。

「渡辺さん。悪いんだけど、私これから用事があるから。これ持つてつてくれない？」

(えーー。今日、電車なんだけど……)

しかし断れるはずもなく、ミサは大量のチヨココレートを渡され、忙しそうに去つて行く山口をつりめしそうに見つめた。お茶くらい飲むつもりで来ていたミサは、少しがつかりした様子で、駅に向かつた。

いかにもバレンタインという紙袋を持つたミサを、通りすがりの人が見ていく。

(やだなあ。恥ずかしい…)

うつむき加減で歩いていると、後ろから呼びとめられた。

「渡辺さん！」

「加藤さん？　え？　お仕事は？」

「そこのビルにある内藤医院に行つてたもんで」

加藤は追つかけてきたらしく、はあはと息を切らしていた。ス

一ツ姿の加藤は、相変わらず決まっていて、香水の香りだらうか。大人の香りがした。

ミサがしばらく言葉を搜していると、加藤はミサが持っている、いかにもバレンタイン袋を見て笑った。

「はは。今年は、渡辺さんが当番か」

「は、はい」

「大変だね」

「い、いえ」

あまり話したことが無いので、まともに視線も合わせられずドキドキしていた。

「くるま、乗つてく？」

不意に加藤はポケットから鍵を出してミサに言った。

「いえ」

「今から病院に戻るんだけど、ついでだから

「いいんですか？」

遠慮がちにミサは言つと、加藤はうなずいた。「持つよ」ミサが持つている荷物を持って歩く加藤。ミサは、後ろから遠慮がちについて行つた。

(どうしよう、何しゃべつていいのかわからない…)

丸山製薬……

車は一目でわかつた。緑色のラインに白い文字で大きくかれた、丸山製薬という文字。加藤は運転席に乗り込むと、助手席を片付けはじめ「どうぞ」と言った。

ミサは助手席に縮こまりながら座る。逃げ出したい程の緊張感だ。

「寒くない？」

「あの、大丈夫です」

加藤の何気ない気遣い。自然な会話。何もかもがスマートで大人を感じさせた。ミサには会話を楽しむ余裕もなく、ただただ病院に着くのを待っていた。

信号で止まり、無言の時間が流れた。いきなり、加藤がミサに聞

いた。

「そう言えば、僕の分もあるの？」

加藤はチヨコレートの袋を指さして、ミサの顔を覗きこんだ。

「あ、はい…あります」

声はとても小さかった。

「4病棟の人達はいつもくれるから。本当、ありがたいよね。いろいろ病院まわってるけど、4病棟が一番馴染むかな…」

（やっぱり、あの可愛いチヨコにしどけば良かつた……）

ミサが後悔していると加藤は続けた。

「渡辺さんは、誰かにあげるの？」

「えつと、弟と…お父さん…」

「家族想いなんだね」

「い、いえ、そんなんじや…あげる人がいないんです」

ミサがムキになつて答えると、加藤は笑つた。

「あげる人がないか。こんなに可愛い子を放つておくなんて」

ミサは耳まで赤くなつて、呼吸もできなくなるかと思つた瞬間、車は止まつた。

病院に着いた。

「ありがとうございました」

ミサはバカ丁寧にお辞儀をすると、加藤の車を見送つた。そして、まだ、ドキドキしている自分に言い聞かせるように呟いた。

「加藤さんには、彼女がいる…彼女が…」

第1-1話 事件

会計課の田中と歸長の池原は、ナースステーションで頭を悩ませていた。

「で、どうなりました?」

会計課の田中は、請求書を片手に師長に詰め寄る。師長は益々困った顔をして、ふーっとため息をついた。帰らない患者、安達のことだ。

「先日、私の方から、退院について説明をしたんですが、安達さんは、ちょっと待ってくれ、の一点張りで……」

「先生から、言つてもらつたらどうです?」

田中が言つと、師長の顔色が変わつた。まるで、わかつてます、と言つている様に。

「主治医の高津先生にも説明してもらひた様に言つたんですが、部屋の算段は師長の仕事だつて、逆に怒られまして……」

「はー、そうですか?」

「入院費用の方は何とかなりそうですか?」

「入院の時に、保証人になつていての方に連絡をさせて頂きました。どうやら、元同僚のようでしたね。その方が、安達さんの家族を知つてゐるみたいで……」

「一度、家族に連絡する必要があるわね」

師長はそう言つと、また、深いため息をついた。

「退院の件……どうしましょう……」

師長と退院の事で、話し合つてから、安達の行動に変化が出始めた。

他の部屋に行つては、動けない患者の世話をしたり、買い物に行つてあげたりする姿が度々みられた。始めのうちは親切心からだらう、と放つておいたスタッフだったが、段々と問題視する声が聞か

れた。そんな時だつた。

「ただいまー」

「安達さん！」

ナースステーションを横切つた、安達の姿。その場に居合わせたスタッフは唖然とした。

安達は車椅子を押していた。乗つていたのは、脳梗塞で4病棟に入院中のおばあちゃん。売店まで連れて行つたというのだ。

「何？ そんなに驚いて」

「何じゃないわよ！ 安達さん。おばあちゃんをベッドから車椅子まで、どうやって乗せたの？」

「俺、力だけはあるからさ」

安達は事の重大さに気がついていない様子だつた。それどころか、まるで、良いことをしたかの様に振舞つている。それには恵も黙つていなかつた。

「おばあちゃんが、麻痺があるのは知つてゐるでしょ？ 勝手に車椅子に乗せて、こけたら、どうするつもりなの？ それに、女人の部屋に勝手に入つていくなんて……」

「廊下を歩いてたら、呼ばれたんだつて。じゃあ、言わせてもらつけどな、看護婦さん！ つておばあちゃん、ずっと呼び続けてるのに、みんな無視やつたやないか！」

安達も負けてはいない。

「あの人は、見当識障害があつて、ずーっと誰かを呼び続けるのが、あんたも知つてゐるでしょ？」

パンチは恐ろしい形相で、安達を睨み付けた。

「そんなん、知らんわ。呼ばれて行つたら、おばあちゃんがパンが食べたい言つたから、一緒に買ってきてやつただけやろ！ 何がいかんのや、くそつ」

安達は頭に巻いていたタオルをはずすと、パンチの顔先へ向けてタオルを振つた。

「あ、痛——！ あんた、暴力する気？」

「かすつただけやないか」

「暴力を振つて、このまま入院できると思つたら、大間違いだからね」

「待て、かすつただけやないか……」

パンチはその場を離れると、師長の姿を探した。もちろん、安達の暴力を報告する為に。

安達は不安な顔を浮かべて、自分の部屋へトボトボと戻つて行つた。

「ちょっと、師長知らない?」

パンチはでつぱりした体を、ゆるゆる揺らしながら、師長の姿を探した。

「いえ……」

ミサは他の人の入浴介助から戻つてきたので、パンチが何を怒っているのか、全くわからない。険しい表情に圧倒されたミサは、固まつてしまつた。

「ちょっと、あんた。安達の受け持ちだつたね
「はい」

「即、退院してもらうから」

パンチはそれだけ言うと、また、師長を探しに行つた様子だつた。
(安達さん？ なんで？)

ミサは持つっていた入浴セットをワゴンに置いて、安達の部屋へ急いで行つた。

「安達さん！」

安達はベッドに腰掛けて、窓の外を見ている。背中を丸めて、うなだれている彼の様子から、何かあつたに違い無い、とミサは確信した。安達はミサが声をかけても、全く応じず、振り向いてもしなかつた。

(こんな安達さんはじめて)

「どうしたんです？」

「……」

「話して……」

「あ……の……」

安達がミサの方を見て、話をはじめるとと思つた途端、病室のドアが開いた。

パンチに言われたのだろう。師長がやつて來た。

「安達さん、お話を聞きたいで、来ていただきたいのですが

師長はいたつて冷静に、話しかけた。

「……んだよ！ どこに行つても厄介者扱いかつ」

ガラガラガラッ

安達が窓を開けたので、冷たい風がヒューチーと音をたてて舞い込んだ。4階にある部屋にあるこの窓、師長もミサも、安達が何をしようとしているのか、すぐに想像がついた。いきなりの展開に、ミサと師長は、しばらぐ金縛りにあつたように安達の行動を見ていた。

「あ、安達さん？」

ミサが先に声をかけた。

安達はベランダに出ると、肩くじらいの高さにある柵に足をかけた。

「ちょ、ちょっと落ちるじゃない！」

師長が慌てて、ナースコールを押した。

「はい。どうされました？」

ナースステーションにいるスタッフが応じる。まさか、部屋で大変な事が起きているなんて、思いもかけないだろ？ のんびりとしたその声は、師長の声で一変した。

「誰か先生呼んできて！」

「は、はいっ」

2、3分して、仲原と数人のスタッフがやつて來た。皆が部屋に來た時はミサが、よじ登ろうとする安達の体を引っ張つてゐる所だつた。

「バカな事しちゃダメー」

ミサは必死に安達の足にしがみついた。

「どこにも帰るところなんかないんやー。追い出されへりへりだったら死ぬー。」

「や……ダメ……」

「放つとナー。」

仲原は騒動が起きてくる中心に行ひて、安達にしがみつこうとしたミサの手を振りほどいた。

「死にたいやつは死ね！』

その声は、静かであったが、冷たいものだった。安達もミサもあつけにとられ、仲原の顔を見た。鋭い目、深く憎悪のこもった声。その声に圧倒されたのか、安達は、気が抜けたよひに、その場に座りこんでしまった。ミサは、座り込んでしまった安達の肩を抱き、部屋へ入るよう、そつと促した。

仲原は、部屋へ入る安達を確認すると、出て行った。

(貴一さん……あの時の顔だ……)

「安達さん、どうしたんですか？ 訳を……」

師長の話をうなぎるように、安達は言った。

「ただ、役に立ちたかっただけなんです。つにかつとなってしまつたけど、暴力なんか……」

「そう。おばあちゃんを売店に連れて行つたのは、私達を助けるためだつていつの？』

安達は頷いた。

「みんなの役にたつれば、置いてもらひやると黙つて……」

「やうだつたの。』

「安達さん世話好きだから……ね』

ミサがそう言つと、安達はわーっと泣き出した。

「『めんなさこ、『めんなさこ』」

やう言つて、彼はベッドにひれ伏した。

「退院の件、別に追に出すわけじゃないのよ。一緒にビリしたいのか考えましょ」

師長は子供を諭す様に、優しく丁寧に言葉をかけた。

死にたいやつは死ね……

憎悪のこもった仲原の声。彼の過去に何があつたんだろう。やつ、ミサは思わずにはいられなかつた。

第1-2話 最悪の…

「……ちやん、たすけて……」
はつ…

また、悪夢を見ていた。

携帯の音で起こされた仲原は、何日も干していない布団をはねのけると、台所に行って、コップに勢いよく水を注ぎこんだ。ゴクゴクゴク…

掃除されていない部屋はカビ臭く、物が散乱している。

ふと、携帯の着信履歴を見た仲原だったが、恭子と表示されたその文字が、彼をどんどん憂鬱にさせた。

「ちくしょー！」

ボサボサの頭を搔き、何もかも忘れない、そんな感じで頭を振った。彼の視線はベッドの脇にある、一枚の「写真」に向けられる。

真っ白い肌、血の氣のない頬、長い髪を左右に結んだ、少女の写真。

「じめん……」

仲原はそつと「写真立て」を伏せた。

2月14日、バレンタインデー

とうとうやつて來たか……ミサは、憂鬱な面持ちで病院へ向かつた。今日は日勤。例のチョコレート配りが待つている。

ミサがロッカールームで白衣に着替えていると、福永がやつてきた。

「おつはよー！」

相変わらず陽気な福永は、一つ二つ冗談を言っていたが、ミサが元気が無いのに気付き、首をかしげた。

「どうしたん？ 何、何？」

「福永さん」

ミサはそう言って、甘えた表情で福永の方をみた。

「また、何かあつたの？ ん？ パンチ？ 亞里沙？」

福永は急にヒソヒソ声になつて返した。真剣に心配している様だが、どうも的をはずれている。

「違いますつて。チョコレート……」

「ええ～～～！」

福永は勝手に驚いて、大きな声をあげた。周囲で着替えていた人が一斉に2人の方を見る。ミサは真っ赤になりながら、福永の口を手でふさいで言つた。

「まだ、何も言つてませんつてばー」

「ふがふが……って、苦しいわ！ え？ チョコレート忘れて来たんじやないの？」

「チョコレートは休憩室に置いてあるんですけども、ね、福永さんと一緒に配つてくれませんか？」

「まったく甘える～！ そ、れ、は、新人の仕事でしょ！」

福永はさつさと着替え終えると、わざと小走りに去つて行つた。
「待つてーー！」

ミサは福永の後を続いた。

ナースステーションでは、朝の申し送りが始まっていた。深夜勤だつた、角野亜里沙はベテランらしく、ポイントをついている。ただ、たまに吐く毒舌が、周囲を固ませた。非の打ち様のない容姿から、繰り出す毒舌は、何ともいえない威圧感を持つていた。

「…以上です。まあ、今日は落ち着いてたかな」

あつという間に申し送りを終え、スタッフは雑談を始めていた。

「亜里沙ちゃん、今日はどうすんの？」

噂好きの山中だ。もちろん、バレンタインデーのことを聞いている。

「うん、な・い・しょ！」

「内緒つて～」

「そういう山中さんはどうなんですか？」

「何にある訳無いじゃない。そつとえば、先生達のチョコレート用意してあるの？」

一斉に視線がミサの方に集中した。

「ハイ……」

「先生たち捕まえるの大変よー！ 病棟の代表として、きらりと手渡してね」

亞里沙は意地悪そうな笑みを浮かべて、ミサの方を見た。

「あ、そうそう、去年は、先生が見つかなくて、準夜までかかつてたよね。」

「えー、そんなあ。本当ですか？」

「本当！」

一同、声をそろえて答えた。まるで、ミサをからかうつう。（絶対、からかって楽しんでんだから）

「そうだ。高津先生と仲原先生に渡す時に、歓迎会の日を伝えといてね」

「どうせ、高津は来ないだろ？ けどね」

山中が口をはさんだ。

「歓迎会？ 仲原先生の？」

「そうそう。21日に予約しておいたから。例の富久屋さんで

「加藤さんも来るの？」

「もちろん」

スタッフはざわざわし始めた。

「さ、仕事、仕事！」

福永の一聲で皆一斉に立ち上がり、清拭^{せいじき}の準備にとりかかった。ミサが患者の体を拭く、おしごりタオルを用意していると、ドクターの高津が、廊下の向こう側から歩いてくるのに気がついた。

「お、おはようございます！」

「あーおはよー！」

高津はミサには顔も向けず、やつぱり言つてナースステーションの方へ入つて行つた。

「あんた、何してんの。 チョコ、チョコ」
福永はミサの背中を押した。

「え、でも、仕事中……」

「いいの、今日はその為に、スタッフ増やしてあるんだから。先生を見つけたら、ドンドン渡して行かないと、それこそ夜中までかかっちゃうよー！」

「えーーー」

ミサは慌てて休憩室に入つていいくと、高津先生へ、と言つシールの貼つてあるチョコを取り出してナースステーションへ走った。
高津はナースステーションの中央にある、だ円形の大きな机の中央に腰掛けて、カルテを見ている。その、厳しい眼差しに、ミサは声をかけるべきか迷つた。

「あ、の」

しばりぐ、間を置いて、高津が顔をあげた。

「びょ、病棟からです。」

その声は少し震えていたかもしれない。ミサは高津の手の前にチョココレートを置くと、はあーっと息を整えた。変な緊張感で、胃がシクシクしてきた。

「あ、はい」

高津はそれだけ言つて、チョココレートには見向きもせず、カルテに視線を向けた。

「あの、それと」

まだ、何か用事があるのか?という様に、高津は、うつとおしゃうな顔でミサを見上げた。

(もうやだ)

「な、仲原先生の歓迎会なんで……」

ミサがいい終わらないうちに、高津は「欠席で」と、それだけ言った。

お昼を過ぎて、なかなか減らないチョココレート。ドクターは来て

欲しい時には、なかなか姿を現さない。困つてこるミサに福永は耳打ちした。

「医局に行つておいで。誰かいるから」

「えー。入りづらいです」

「じゃあ、夜までかかつてもいいの?」

結局、ミサは福永に教えてもらった通り、最上階の8階にある内科の医局へ向かつた。医局の入り口の前には、ドクターを捕まえようど、MR^{エムアール}が数人、立つて待機している。立つているMRをかきわけ、ミサは医局に入ると、ムサ苦しい男臭いにおいがした。

(やっぱ、やだなー)

「あれ? 4病棟の子やろ」

入り口の方にある机に座つていった安部が声をかけた。

「あ、安部先生。 チョコ……」

大きな紙袋の中から安部の分を取り出すと手渡した。

「名前なんだつけ?」

「渡邊です」

就職して、もうすぐ1年になろうとしているのに、全く名前を覚えられない事に、少し悲しくなつた。

それから、医局にいた2、3人のドクターにチョコを手渡し、残すはあと2人となつた。

(加藤さんと、貫一さん)

ミサは仲原の顔を思い出した。あの冷たい視線。このまま、机にチョコレートを置いていつてしまおう、そう思った。

「安部先生!」

「はい?」

何人か医師がいたが、ミサは愛想の良い安部に声をかけた。

「仲原先生の机つて、どちらですか?」

「あー、あいつ? 窓際の一番端つこ」

安部に教えてもらつた通り、窓際の一番右端にある机に向かつて歩いて行つた。仲原の机は本や資料が山積みになつていて、雪崩が

おきそくな状態だつた。

(貴一さんの机、汚い——)

仲原の机にチョコの紙袋を置いたその時。

ドサドサドサツ

雪崩が起きた。

「やだ——」

「何やつてる？ 人の机で」

「え？」

運悪く、仲原が戻ってきた。仲原の机のまわりには、本と資料が散乱して、ミサが呆然と立つている。

「あ、あの、チョコレートを」

「え？ 僕に？」

「あの、あの病棟からなんですけども、代表で」

「そう。お腹空いてたんだ」

仲原は落ちている、チョコレートの袋を拾つと、そのまま、包みを開け、ムシャムシャと美味しそうに食べた。あつとこつ間に無くなつた。

(今、食べますか……)

ミサは呆れて、仲原の顔を見た。

仲原もミサの顔を見ていた。白く透き通るような肌。

仲原は急に、ミサに顔を近づけると、両手で頭をつかんだ。

「きやつ！ 何？」

「いや、お前」

「え？」

そう言つと、仲原はあっかんべーとこつ様に、ミサの両手の下を下げる、覗き込んだ。

「まさかな……」

「ちよつと、かんいち？」

ミサはこきなりの出来事で、かなり緊張していたのだろう。思わず貴一と口走つてしまつっていた。

「かんいち？ はは。お前、変わった奴だな」

(貫一が笑つた……)

ミサは何が何だかわからなくなつていたが、今、目の前にある仲原の顔をまじまじと見た。端整な顔立ち。優しそうな笑顔。今、湧き上がつてくる感情が何なのかも、理解できないでいた。

「お前、血液検査した方がいぞ」

仲原は硬直しているミサに向かつて、そう言つた。

「貧血ですか？」

「わからん！」

(えーー？ 何それ？)

ミサはますます呆れてしまつた。そして、とつと歓迎会の事を伝えて、医局を後にした。

途中、加藤に会つたが、いろんな所でチョコレートを貰つた様で、いつもと違う袋をいくつか持つっていた。

「（）苦労さん！」

最初に声をかけたのは加藤の方だった。

ミサは疲れた顔で、おもむろにチョコレートを取り出ると、無言で加藤に渡した。

「あ、ありがと」

気がつくと、猛ダッシュで休憩室に戻つて来ている自分がいた。
(最悪のバレンタインデーだ)

第1-3話 病気になるといふ事

その日、戸塚良美はこの4病棟に入院してきた。

——化学療法を受けられる方へ——

そう書かれたパンフレットを片手に。相変わらず4病棟はバタバタとしていて、廊下を忙しく早足で通り過ぎる看護師達の姿。良美はキヨロキヨロと病棟の様子を見ていた。

「あの、入院さんです！」

良美を案内してくれた、外来の看護師は、カルテとフィルムをナースステーションに置きに行つて、「ここでお待ちくださいね」と告げると、さつさと戻つて行つた。

良美は荷物の入ったかばんについている、小さなお守りを握り締めた。

「渡辺さん、入院さん來たよー。」

「はーーい」

ミサがナースステーションを出て、名前を呼ぶと、椅子に座つていた女性が立ち上がつて答えた。ミサは正直驚いて、女性の顔を見た。

(確かに、今日の入院さんは、乳がんの再発で肺転移の……)

目の前には、何の変哲もない、患者らしからぬ女性の姿。驚いたのは彼女が若い、ということ。

ミサは驚きながらも、感情を抑えると、一通り入院の説明を行つた。

た。

「受け持ちの渡辺ミサと申します。また、お話を伺いに来ますので、パジャマに着替えてお待ちください」

「はい。よろしくお願ひします」

ミサは部屋を後にすると、急いでカルテを確認しに行つた。

乳がん 再発 肺転移

やはり、カルテの表紙の診断名にはそう書いてあった。彼女で間違いない。そして、年齢を確認した。

「36歳……」

良美は狭い病室で、荷物の整理をしながら、いろいろと想いを巡らせていた。

4年前に乳がんの手術をし、化学療法を行つて、治つたようにみえていた。もうすぐ、5年目のお祝いをしなきや、というところだ、ガンはみつかつた。かかさず診察を受けたのに、今度は肺にも転移しているという。定期的に検査も受けていたのに、なんで？ どうして？ 頭の中は黒いモヤモヤとした怒りでいっぱいになつた。

乳がんが初めてわかつた時は、夫と当時12歳だった娘と、一晩中泣いた。7歳だった息子には告げず、何も知らず甘えてくる息子の顔を見るたびに、泣きそうになつていた良美だつた。

その後、手術をして、化学療法、検査、通院。長くこの生活が続いた。3年くらいたつた時に息子に告げた。

「お母さん、ガンだつたの」

「お姉ちゃんから聞いて知つてた」

その時の息子の顔は忘れないだろう。自分が思つていたよりも、強く、成長した息子を頼もしいとも思つた。

でも、今度はダメだ。がんばれない。体が思つようにならない。神様は残酷だ。他のお母さんたちは、皆、楽しそうに子供達とプールへ行つたり、おしゃれを楽しんだりしてゐるのに。私なんて、お風呂に入る事一つをとっても、家族が寝た頃に、周りを気にしながら入るというのに。何で私だけ、何で私だけなの……。今まで、治ると信じて頑張つてこれた。少し、不自由なことがあつても、生きているだけで幸せなんだと思い、自分に言い聞かせてきた。もうやだ。もう我慢できない。良美はそう思う様になつていった。

そして、昨日のことだ。

良美は夕方から、入院の荷物の用意をしていた。16歳の娘と1

1歳の息子は学校だ。1人、黙々と準備を進めた。パジャマに、歯ブラシ、バスタオルに…ふと、良美の手が止まつた。

お守り…

初めて、手術をする前に夫に渡されたお守り。4年前のもの。1年経つたら「お焚き上げ（おたきあげ）」といつて神社に返すのが普通なのだが、手術も成功し、このお守り無しではいられなくなつた。もう生きているのも嫌になる、と思いつつも、お守りに執着している自分を愚かだと思った。あの時、返さなかつたから、バチが当たつたのかな？ なんて、自分を責めてみる。

「ただいま。今日の「こはん何？」

良美は、元気よく帰つてきた息子の声で、ふと我に返つた。

「うん、野菜の炒め物と…」

「なーんだ、つまんないの」

「そんな事、言わないの！」

そうか、しばらく入院だから、ハンバーグでも作つておくれべきだつたかな？なんて反省していると、高一の娘も帰つてくる。

「ねえ、お母さん、今日雨降つてるから、塾に送つてつ…」

「あー、はいはい。わかつた」

私がいなくなつたら、この子達どうするんだろう？ と、心配をしながらも、この子達だったら何とか生きていけそうだわ、と勝手に思つてみる。

息子は相変わらず、ゲームに夢中になつていて。そして、娘は2階にある部屋から降りてこない。まあ、いつもの事だ。

「もう、「こはんよ！」 謹遅れるから、降りてきなさい。こひ、あつくんもゲームはやめて、もうすぐお父さん帰つてくれるから片付けて！」

夕方からの時間はあつとこつ間に過ぎる。7時を過ぎ、夫が帰つてくる。

「ただいま」

「今日は早いんだね」

「ああ」

良美にはわかつていた。いつも9時過ぎまで帰つて来ない夫だが、夫なりに早く帰つてきたこと。何にも言わないが、氣を使つているところがヒシヒシと伝わる。私さえ、病気にならなければ、こんなに夫に氣を使わせることが無いのに。

「あれ？ 沙希は？ 熱…」

夫は時計を見るとそう言った。

「さつきも呼んだんだけど……」

良美は、そう言つてもう一度2階にいる娘に声をかけた。返事はなく、良美はだんだんイライラしていた。

私は、明日入院するつていうのに。どれだけ不安かわからない。今日はゆっくり食卓を囲んで、穏やかに過ごしたい。それなのに、こんな特別な日だつていうのに……。

良美の不安は家族に対する怒りに変わつていった。その時だつた。

「お～～！ やつたー！」

ゲームに勝利したのか、息子のガツツポーズが見えた。

「だから、ゲームやめなさいって言つたでしょ！」

良美は、息子のゲーム機をとりあげると、床にたたきつけた。もう、自分で何をしているのかわからなかつた。

「ひじいよ、お母さん……」

ダメだ、こんな事したいんじゃない。明日は入院だから、みんなで、食卓を囲んで……。

良美がそう思つたとき、今まで2階にいた娘が、やつと、降りてきた。

「もう、時間だから送つてつて」

何かが、良美の中で砕けた。入院前だといつこの、相変わらず、「ごはんの準備、塾の送り迎え、それに、何だろう。何だろう、このモヤモヤは。腹が立つ。理解できない怒りでいっぱいになつた。「もう、あんた達がこんなんだから、お母さん、病気になつちゃつたのよー！」

涙があふれ、子供や夫の姿は水の中になつた。

「そんな事、言つもんぢやない」

夫の声を背中で受けながら、良美は2階にある自分のベッドにもぐつこんだ。

こんな事言いたいんじゃない。違つ。今まで一緒に乗り越えてきた家族に、どうしてこんなヒドイ事言えたんだらう。まして、子供に……。今日は特別な日だと思つていたのは、私のH'Gではないのか。子供は普段どおりの生活を続けていただけなのに。もつやだ。母親失格だ。

リビングでは子供達が困つた顔をして、何んでいた。

今朝はシュンとしていた子供達。やはり何も言わない夫。良美は、昨日のことを謝れないでいた。空氣を察したのか、子供達はやけに手伝いをし始め、いつもやつたことも無いのに、茶碗を洗つたりしている。

心の中で言つた。

(お母さん、病気になつちやつてごめんなね)

良美は昨日の出来事を思い出すと、かばんについでいる古びたお守りを握り締めた。

第1-3話 病気になるとこつ事（後書き）

自分が病気になつたら、どうなんだろう?といつ視点で書いてみました。作品全体でいえる事ですが、特定の患者さんをモテルにしている訳ではありません。

この作品はフィクションです。

第1-4話 待ち合わせ（前書き）

待ち合わせ

第14話 待ち合わせ

「戸塚さん。今から点滴に伺いますので、トイレを済ましてお待ちくださいね」

ミサは、ナースコールでそう伝えると抗ガン剤の準備に取り掛かった。最近では医療従事者の抗ガン剤による暴露が問題視されており、抗ガン剤は、薬局で無菌調整して病棟にあげられる。そして、医師と看護師双方で容量を確認し、医師がルートをつける。ナースは横で、吐き気止めの点滴や、抗がん剤投与前に行うステロイド剤の点滴を用意する。これが一連の流れである。そして、ルートを接続する医師は、シートを敷いた作業台の上で、ガウン、マスク、ゴーグル着用で行うのが原則。抗がん剤が体に付着しないように、細心の注意を払って行われる、その光景は、まるでインチキな研究室のようだ、不恰好なゴーグルとマスク、使い捨ての紙のガウンに身を包んだ医師は、怪しい研究者といった感じだ。

戸塚良美の担当である仲原とミサは、作業台の前にいた。ボトルに書いてある薬品名と注射箋を読み合わせていく。仲原は、淡々と作業をこなしていった。

「ルート！」

横でステロイドの点滴を詰めていたミサに仲原が言った。

「え？」

「違う。ルート…」

仲原はいつも、言葉が短い。それに加えて怒ったような口調。ミサは慌てながらも頭をフル回転にさせ、仲原の言っている意味を考える。

「あっ……！ すみません」

ミサはルートの種類を間違えて準備してしまったのだ。おどおどしながら、新しいルートを取り出しおこなう。「これで、いいですか？」と仲原に見せた。仲原は、何も言わずミサの持っているルートを奪い、

ボトルに接続した。

それにしても、仲原の仕事は無駄がなく、ミサは驚いていた。た
だ、一方で無愛想な仲原の態度。それを苦手だと感じていた。

「部屋！」

「え？」

「部屋！」

「あ、411号室です」

（もう！ 長年連れ添つた夫婦じゃないんだから……）

ミサは411号室に足早に向かう仲原の後ろを追つかけた。

411号室に入ると、不安そうにこちらを見る良美の姿があつた。
自分より若い医師や看護師が今から大事な点滴をするのだ、無理も
ない。医師や看護師は2人ともマスクと手袋を着用し、無機質な印
象を受けた。

「戸塚さん、今から点滴を入れます。右利きですか？」

ミサはいつものように聞いた。

「はい、そうですが

「じゃあ、左に点滴を入れますので、こちらを頭にして」

ミサがそう言ったところで、仲原は「いいー、右で」と言った。

「でも……」

右利きなのに、右腕に点滴を入れられれば、生活しにくい。なの
に、何であえて右に入れんんだろう？とミサは首をかしげた。

反対に良美は仲原の言葉に安堵の表情を見せた。この人は、自分
の病状をわかつてくれている。病人にとつて、安心させてくれる医
師の存在は、この上もなく心強い。

あつという間に点滴を入れた仲原は、良美に一礼をして出て行つ
た。

「あの、気分が悪くなつたら、いつでも呼んでくださいね」

ミサがそう言つと、良美は軽く頷いた。

「はい。あの……さつきの先生、名前なんていうの？」

「仲原先生です」

「若いわりに、できるわね」

良美はミサにそう言つと、静かに目を閉じた。

ミサがナースステーションに戻ると、仲原が待ち受けていた。ミサと正面に向かい、鋭い目で見つめながら「なんで左?」とぶつきりぼうに問い合わせた。

相変わらず、仲原の言葉は短い。

「な、なんでつて……」

困っているミサの前に、仲原は良美のカルテをバサッと置いた。

「……」

開かれたページの既往歴欄には「左乳ガン 乳房切除術」と書いてあつた。

「あ

ミサはやつと気がついた様子で、しまつた、と言つ表情を浮かべた。

普通、乳がん手術後のリンパ浮腫を予防するため、点滴は手術を受けていない健側けんそくに入れるのが常識である。

「カルテくらい、読め!」

「はい……」

研修医に叱られたのは初めてだ。ミサはすっかり、うなだれてしまった。

夕方が近づき、ミサは段々と憂鬱になつていった。

今日は、仲原の歓迎会があるのだ。仲原が苦手だという事に加えて、こここの所、相次ぐ入院や急変で疲れきっていたミサは、あまり気が進まない。いろいろ欠席の口実を考えたが、小心者のミサが嘘を言える訳がない。

魔法使いがいて、今一番かなえて欲しい事は?と聞かれたら、ミサは真っ先にこう言つだらう。

「あつたかい布団の中で、ゆっくり眠りたい」

昨日は準夜勤で、夜中の2時に家に着いたといふのに、また、今朝は日勤。4時間も眠れたらいい方だ。労働基準法にはひつからぬいのか、ミサは不思議に思った。

「お疲れ様でしたー！」

「お先に」

時間はあつとこつ間に過ぎ、ミサは暗い面持ちで帰り道をとぼとぼ歩いていた。今まで真っ暗だった帰り道が、ほんのり明るく、日が長くなつたのを感じさせた。

「ま、いつか。加藤さんも来るんだから」「

ミサは、独り言を囁うと路地を曲がった。

どどどどどど

不意に、後ろから誰かが走つて来る気配がした。こんな狭い道で、やだ、怖い。ミサは後ろも振り向かず早足で歩いた。家はもうすぐ。通りに出れば、車も通つてゐるだろう。

「おい、待て」

「ひやつ」

仲原の声だつた。

(また、貫一に驚かされた)

白いTシャツの上に羽織つた、チェックのシャツ。ジーンズにスニーカー。大学生の様ないでたちだつた。上を向いた眉毛、はつきりとした二重の目、鼻筋の通つた端整な顔立ち。ミサは不覚にも、格好いい、と思つてしまつた。

「富久屋つてどこ？」

仲原は单刀直入に聞いてきた。この人の言葉は、主語と述語しかないらしい。ミサは、まださつきの驚きから冷めていない様子で、息を切らしながら答えた。

「あの、病院の裏門から出て、えと、えーっと

段々、仲原の眉間に縦皺がよりだし、ミサは焦つた。

「わ、私も歓迎会に行くので、案内します」

「何時？」

(しまつた。余計な事言っちゃった)

結局6時半に、ミサのアパートの前の電信柱で、待ち合わせる

とした。

第14話 待ち合わせ（後書き）

ブログ始めました。作品のこじょれ話、日常生活のこと、看護師の仕事について更新していくこと。

「小説を書きたい！」　by 酒主

http://blog.goo.ne.jp/syusyu_2

008 /

第15話 貫一とお面

約束の時間まで、あと40分足らず。ミサは急いでシャワーを浴びた。何故か、仲原と待ち合わせをしてしまった事を、後悔していたミサだったが、加藤のことを想うと少し気が紛れた。

(え？ もうこんな時間？)

考え事をしていた為に、すっかり時間が過ぎていた。化粧もそこそこ、髪も乾ききらない内に、慌てて外へ出た。

「ひやーー寒いっ」

外は真っ暗。北風は冷たい。雪が降りそうな空気の感じだった。一度、外に出たミサだったが、部屋に戻つてマフラーを取つてみると、約束の電信柱へ向かつた。

約束の電信柱の前で凍えること20分。仲原が早足でやつて來た。

「待つた？ ごめん」

ぶっきらぼうな男だが、最低の礼儀は持つている様だ。

乾きかけのミサの髪は、乾く前に凍つてしまつたみたいになつていたし、白い頬は寒さで真っ赤になつていた。

「行きましょうか」

ミサはわざとつしけんどんな言い方をした。何を話していいかわからない。なんせ、昔から男の人と話すと緊張する性質たまだったから。付き合つた人は過去に1人いたが、「お前真面目すぎでつまんねえ」と軽くフラれた記憶がある。

道を知つているミサの後ろを仲原がついていく。無言で歩く2人。沈黙に耐えかねたのか、仲原が口を開いた。

「お前、血液検査したのか？」

ミサの耳はすっぽりとマフラーに覆われていて、仲原の声が聞き取れなかつた。

「え？」

ミサは立ち止まって、仲原を見た。

「血液検査したのか？」

「あ、はい。ひ、貧血でした。鉄剤飲んでます」

ミサがあまりにも緊張しているので、仲原はくすりと笑った。
(今時珍しいな、こんなやつ)

狭い抜け道なので、辺りには街頭もほとんどなく、たまに街頭があるかと思えば、微妙な明るさ。歩いてこづちこづちこづち、チラチラと雪が降ってきたのが分かった。

(恋人同士だつたら、最高のシチュエーションなのに)

ミサは思った。

「わあ雪！」

「寒いな」

「ううん。あつたかい」

2人がつないだ手は、彼のコートのポケットで温まっている。

彼の顔は加藤・・・・・。

ミサがそんな事を想像して歩いたが、やがて富久屋^{ふくや}に到着した。

「ありがとな」

「いえ」

店の中は活気に溢れていって、ミサ達が入ってくるなり、「らっしゃーい」と威勢の良い声が飛び交った。生簀の中の魚達、包丁を揮う職人たちの後ろに置かれている、地酒の数々。

ミサはキヨロキヨロ周りを見渡し、知った顔を捲した。

「予約の方ですね?」

「はい」

仲原が答えた。でっぷりとして、健康そうな女将に案内され、2人は2階の座敷に通された。

「どうぞ、『じゅつくり』

女将は意味深に言つて、障子戸を開けた。

「えーーー！」

ミサは思わず声をあげた。少し嫌そうに。

女将は驚いて2人を見ながら「井出さん2名様では無かつたですか？」と確認した。

「いえ、ち、が、い、ま、す！」

ムキになつてゐるミサの横で仲原がくすくす笑つてゐる。2人が通された部屋は座椅子が2つ置かれていて、個室になつてゐる。

(〔冗談でしょ！　なんで〕)

「あら、『ごめんなさい』ってつきりアベックかと……ほほ」おつちよこちよいの女将はそう言つて、改めて加藤たちがいる部屋に案内した。その間、仲原はツボにはまつた様子でくすくす笑つてゐるし、ミサは益々赤くなつた。

「笑わないでください！」

「はははは

ツボにはまつた仲原の笑いは止まらないようで、顔をしわくちゃにさせてゐる。

(やつぱ、貫一って最悪)

ふんっ！　とミサは顔を背けると、女将の後ろについて行つた。

「こちらです」

女将は2人を座敷に通した。加藤に角野、パンチ恵、山中、福永、いつものメンバーだ。テーブルの上には、もうビールが並べられて、2、3本開いていた。

「お疲れ様です」

加藤はミサと仲原に声をかけた。

一瞬、加藤の顔が険しくなつたのをミサは見逃さなかつた。しかし、その表情はすぐに消え、いつもの加藤の顔が戻つた。

「先生！　お疲れ様。主役だからこちらへどうぞ」

加藤の前の席を角野がすすめたが、仲原は「ここで」と、端の席に座つた。先ほど見せた笑顔は消え、また、冷たい視線の仲原に戻つた。角野は開けておいた仲原の席へ移り、1人ずつずれて座つた。

そして、変わつてゐるわね、と隣のパンチにヒンヒン言つた。

「さ、主役が来たから飲みましょ！」

モヤモヤとした空氣を吹き飛ばすように、福永はそのまま、店の者に、料理を運ぶように頼みに行つた。

結局ミサも仲原も開いている端っこの席についた。

（何で貴一が隣なの……）

仲原は考え方をしていた。恭子の横にいた男の姿。そこにはいる男で間違いない。でも、そんな事はどうでもいい。恭子とは終わつた。最初から好きだつたかもわからぬ。

仲原の酒を飲むペースが早くなつていつた。

「先生、お酒強いのねー」

福永は仲原の横に来てじやんじやん注いだ。不思議と酒飲みは、酒飲みが好きだ。普段、仕事場で喧々囂々としている恵パンチと福永だけ、毎回酒飲み会には顔をみせる。不思議なもんだ。

飲みっぷりの良い仲原を気に入つた福永は、自分の席からコップを持つてきて、仲原とミサの真ん中に陣取つた。

「この子もね、割とお酒飲めるのよ」

福永はミサと仲原、自分と、交互に注いで福永ワールドを炸裂させていた。

新鮮な刺身、煮付け、てんぷら、美味しいお酒。料理も全部出揃い、皆も酔いはじめてきた。席に座つてるのは最初だけ。うつうろと酌をする姿がみられた。

角野はいつもは、酌を注ぎまわることは無いのだが、仲原のところへ挨拶に來た。仲原は顔は良い。本人は気がついてないが。角野はきっと気に入ったのだろう。あからさまに、獲物を探す女豹のような表情の角野に、福永とミサは顔をあわせた。

「先生、お疲れ様。どうぞ」

「どうも」

角野はミサに席を替わるようにして合図し、仲原の横を角野が独占し

た。

(いつも加藤さんの横にいるのに)

ミサは角野の行動に少し憤りを感じながら、いつもは空いていな
い加藤の横に座つた。

加藤はいつもなく酔つてゐる様だった。

「ミサちゃん、今日は飲も飲も！」

「はー！」

「こここの酒は、いろんな種類があつてね、味見できるんだよ

「へー。凄いですね」

ミサは加藤の話に耳を傾け、こゝにして加藤の横にいる自分が夢の
ように思えた。

加藤が勧めるまま、日本酒を味見するミサはかなり酔つてしまつ
た。

「おいしい！」

「そう。良かつた」

「加藤さん、この前はありがとうございました」

「ついでに送つて行つただけだから」

「本当は加藤さんだけ、違うチョコレートにしようとしたん
すけど

「え？」

「・・・・・」

酔つて喋りすぎでいるミサに加藤は微笑んだ。

「ミサちゃんみたいな可愛い妹がいたらね」

加藤の優しさだった。ミサの気持ちに気がついていてさり気なく
断つたのだろう。ミサもそれが痛いほどわかった。

「妹ですか・・・・・」

分かりやすいくらい落ち込んだミサだったが、氣を取り直して話
を続けた。

「加藤さんの彼女ってどんな人なんですか？」

「うーん。難しいな」

「するい。教えてください」

すっかり目が据わってしまったミサに少し困惑した様子だったが、
しうがないか、という顔で加藤は携帯を取り出した。

「この人」

長い髪、細い線、控えめに笑う上品そうな顔・・・・・・
「わつ！」

ミサが叫んだ。

「何？ 知ってるの」

加藤は少し慌ててミサの顔を覗きこんだ。

「いえ。綺麗だなーって思って」

「はは。ミサちゃん面白いね」

加藤はそう言つて、携帯をそつとポケットにしました。

ミサは動搖していた。見覚えのある女性。トイレに行くふりをして、席を立つた。

（あの女人、お富の方だ！）

仲原が「貫一」で、加藤の彼女が「お富」

ミサは完全にこんがらがつてしまつた。足元はおぼつかないし、日本酒の味見がかなり利いた様だ。ふらふらとトイレの方へ行つた。

「おい、大丈夫か！」

こけそうになつた時、トイレから出てきた仲原が支えた。

「トイレの貫一？」

「何だよ貫一って」

ぼやける世界の中、貫一の顔が間近にあつた。貫一とお富、加藤。

「もう、わかんなーい」

ミサの記憶はここでなくなつた。

第1-5話 貫 -とおぬ（後書き）

酒主のブログ。更新中。

http://blog.goo.ne.jp/syusyu_2008/

ぜひ遊びにきてください。小説談義に花を咲かせましょう！

第16話 ミサと福永と仲原と

「俺、こいつ連れて帰ります」

仲原は座布団3枚の上に寝かされ、みんなのジャンバーや「コートで覆われたミサに目をやりながら、福永にそう言った。

「もうちょっとしたら、起きてくるわよ。それより、主役が抜けたら意味無いし！ ミサだったらいいよ。私の部屋にでも泊めるから。だから、飲んで飲んで」

福永はそう言って、仲原を帰すまいと、無理やりコップを握らせ酒を注いだ。

「そうよそうよ、先生、帰っちゃダメだからね」

先程から、仲原の横にへばりついていた亜里沙が、そう続けた。時折、向うの方から、パンチと山中と加藤の笑い声が聞こえてくる。加藤は酔つたらしく山中とパンチのおばちゃん2人を相手にくだらない事を言つて笑わせていた。

「やだあ加藤さんつたら」

バーンとパンチが加藤の背中を叩いた音が響いた。

「あいだー！ 恵さん、おっさん並の力ですね。化粧落としたら、おじさんになんに変身とかしないですよね」

「わははは。加藤さんたら失礼ねー！」

真っ赤な口が、大きく開いて笑っている。

仲原は向うの方から加藤の声が聞こえてくる度にイライラした。

恭子の事はそれ程好きではなかつた。たまたま、向うから声をかけ、付き合う事になつただけ。そもそも、何人かと付き合つたが、好きだ、愛してるなどという感情は一切起きなかつた。いつも誰かが付き合つてくださいと声をかけ、いろいろと世話を焼いてくれる。しかし、その内に女達は泣いて訴えるのだ。「私のこと好き？」と。そして、何も答えない仲原に背を向け去つて行く。この繰り返し。何かが欠落している。仲原は自覚していた。

しかし、さすがに別れた彼女の男と同席するというのは、不愉快極まりない。仲原は、まだ自分にも人間らしい感情があることに驚いた。

「モウ一杯」

亞里沙が酒を注ぐ

仲原は、もうどうでもなれ、という風にハッカに注がれた日本酒を一氣飲みました。

「すごい。先生」

里少は無地

黒川沙は猫撫で声を出し、甘えるような仕草をした。香水の匂いをブンブンと漂わせて。いつも寄ってくる女達と同じだ。仲原はイラライラした。その度に酒を飲みこんで自分を落ち着かせた。

ほら来た。仲原は思った。女嫌いとか、そ

ほら来た。仲原は思つた。女嫌いとか、そういうわけではない。

がたまらなく嫌だ。上品にお酒を運ぶ仕草、上目使いの視線。時々、携帯のメール音が鳴り、中身を確認する仕草。仲原はイライラして眉間に皺を寄せた。

「なんで聞く？」

仲原の冷たい視線は亜里沙へと向けられた。

「……な、何でって、変なこと聞きました？」
「そうですね、彼女いますよね」

亞里沙の目が光った。闘争心に火がついたというべきか。もてる
男三三九うう清四。此時、ムツモト分擔らう、ミツモト用三つ二。

仲原はもう、質問の答えには答えなかつた。

黙々と酒を進め、無口な仲原と居辛くなつたのか、亜里沙は加藤方へと席を移つた。

「あれれー。先生一人?」

あちこちの話に加わり、騒いでいた福永が戻ってきた。端の方で寝かされていたミサを連れて。仲原の横に座らすと、福永は「水持つてくる」とこの場を離れた。

ミサはまだ、ぱーっとしていて、仲原の顔を見つめ返す。髪の毛はぐしゃぐしゃになつて、頬には畳のあと。よだれを拭きながら、眠い目をこする。みんなのジャンバーや上着をめちゃくちゃに乗せられたので、のぼせたように頬を赤らめている。

「お前、子供みたいだな」

まだ、ぱーっとしているミサの顔を見つめ返すと、仲原は思わず

微笑んだ。眉間の皺が、目尻へ移動した。

仲原は、ふと、妹の影をミサに重ねた。

艶やかな栗毛色の髪。白い肌。真ん丸い目でこちらを見つめ返す表情。決して似てるとは言えないが、雰囲気がよく似ている。何が似ているんだろう。仲原は必要以上にミサの顔を見つめた。

「私、眠つてたんですか？」

ミサが口を開いた。少し酔いは冷めてこるみつだ。寝不足だったのだろう。

「いびきかいてな」

「うそつ。 や、じりじりみつ」

「うそ」

仲原が笑つた。先程のイライラが消えていくのがわかる。妹もそうだった。自分のうそを真顔で信じて、驚く姿。よく、からかつたもんだ。

仲原は、コップに入った透明の液体を自分の中に流し込んだ。

「お水、持つてきたよー！」

福永が戻ってきた。コップの中では、カラランカラランと氷が揺れている。

ミサはよつほど喉が乾いていたのだろう。「ゴクゴクと音をたてて飲んだ。

「つてー！ 福永さん。これ、焼酎じゃないですか」

プハツとミサは息を漏らした。

福永はいたずらが成功したので大喜びで、大笑いしている。仲原もつられて、大きな声を出して笑っていた。

何年ぶりに笑つただろう。

仲原は笑つている心地よさを感じていた。少なくとも、妹が死ぬまでは、仲原はどこにでもいる普通の青年だった。笑いもするし、泣きもある。

それが、妹が死んでから、感情の無い、抜け殻みたいになってしまった人間になってしまった。

妹の死は、あまりにも壮絶で耐え難いものだつた。仲原は今でも思い出す。思い出したくなくても、夢として記憶に蘇つてくる。

「お兄ちゃん、たすけて…………くやしい、お兄ちゃ…………」

・

その声は仲原の心に突き刺さる。突き刺さつた刃がグリグリと動き、自分を真つ二つにする。足元には自分が流した大量の血。そして、仲原は氣体になり、変わり果てた妹のベッドの周りを浮遊する。しなやかな肢体は、ムクムクと腫れ、醜く2倍に膨らんでいる。艶やかだった髪は抜け落ち、つるつとした頭がそこにあつた。そして、顔を恐る恐る覗き込むと、口元からは血が噴出している。その勢いは壁に飛散するほど。そこいらじゅうに漂う血の匂いは、悪魔のよう

に仲原にささやきかける。

「お前が悪い、お前が悪い」

そして、「ゴボッゴボッ」という音をたてて、血の塊が口から排出されるのを最後にすべてが闇につつまれる。

そこで、いつも目が覚める。10年前、目の前で起つた光景が、何度も繰り返される。夢の中で、助けを求められている自分は、何もできず、ただ、ベッドの周りを浮遊するだけ。

夢の中でくらい、妹を助けてあげられないのか、仲原は自分の想像力の無さを嘆いた。

「また、先生、自分の世界に入つてるしーー」

福永の声にはつとして、現実の世界に戻る。

「よし、飲むか」

仲原は勢いよくグラスを空けた。

「まあ、困ったお客様なんねー」

はじめにミサ達を案内したでっぷりした女将が困ったそぶりで、腰に手をやつた。

3枚並べられた、座布団の上には仲原が寝ていた。その横で、福永とミサが体を揺らして起しそうとするが全く仲原は起きない。

「よーいじょっと」

女将に手伝つてもらひ、仲原の上体をあげた。そう太くない体だが、筋肉質なのかやたらと重たい。やつと座らせた仲原の頬を、福永がペニベンと叩くと、ようやく目を開けた。

「みんな帰つたわよ！」

福永が言つたが、仲原は何も言つ氣力もなく、ただ座つてゆらゆらしているだけ。福永は、じょうがない、という顔をして女将に言った。

「すみませんけど、タクシーまわしてもらえませんか？ それと、この人を1階まで下ろしたいので・・・・」

「はいはい、ちょっと待つてね、どつこいじょと」

女将は階下に降りていくと、しばらくして、板前さんを連れてあがつてきた。

「いち、に、のさん！」

何とか立たせて、右に板さん、左に女将、前に福永、後ろにミサがまわり、やつとこで仲原を階段からおろした。

「まあ、久しふりだよ。こんなお客様さん」

女将はぶつぶつ言つていると、タクシーが到着した。さつきの板さんと女将が仲原をタクシーに押し込んだ。当の仲原は夢の中だ。全く起きる気配すらない。福永が窓を開け、「迷惑をおかけしました」と店の者に詫びると、車は動き出した。

「お客様、だいぶ酔つてるようですね」

タクシーの運転手も少し呆れたように言つた。

福永は助手席に座り、後部座席に仲原とミサが座った。

「ミサ！ 仲原先生の家知ってる？」

「えー、知らない」

「あんたら、一緒に来てたじょん」

「うん。でも知らない」

「あ”～～どうしようね。ミサン家に連れてくか」

「え～～～やだあ」

「やだつて言つてもさあ、うちん家は婆さんがいるから、男連れて帰るわけにいかないしだ」

「え～～でも」

「運転手さん！ やっぱ、行き先変えて」

「は？」

「あの、病院の裏の……」

運転手は不機嫌そうにし、どこかの駐車場で方向転換すると、来た道を戻つた。3分も経たないうちにミサの家に着いた。

「めちゃくちや近所ですね」

運転手は軽く皮肉を言つたが、福永は気にする様子も見せず、「ちょっと、運転手さん手伝つて！」と促した。「ついてないなあ」と運転手はいい、2階にあるミサの部屋まで、仲原を運ぶはめになつた。

外はしーんとしていて、雪がちらついている。夕方はこまかい粒だった雪が、今はふわふわと綿の塊になつて落ちてくる。道路も薄く雪で覆われている。滑らないように注意しながら、3人は仲原を支えた。

「昔は、こんなお客さん、よくこましたけどね。今はあまり見ないね」

運転手がぼそっと呟くと、福永も賛同した。

「そう、昔はさあ、上司が飲みに行くつて言つたら、必ずついていくのが常識だつたやない？ そんで、しげたま飲まれて、ぶつ倒れて。バブルのせいもあつたんやろな」

「せうせう。バブルん時は良かつたなー。お密さんも万札を格好よく出して、お釣りいらんわ！ つて。あの頃は良かつたなあ」

最初文句を言っていた運転手も、知り合いのおじちゃんみたく話に加わっている。誰とでも普通に会話できる福永の特技だ。

そうこいつしている内に、ミサの部屋に着いた。

「運転手さんありがとな。今度は長距離お願ひするからーー！」

「つましい事いうな」

手を振る福永に照れながら、運転手は肩をすぼめた。

部屋の中では、ミサと福永が動かない仲原に悪戦苦闘していた。半ば、ひきずるようにして運んだので、仲原のズボンは雪と埃でどうどりになっていた。小綺麗に片付けられた部屋にどうどりのズボン。ミサはため息をついた。

「福永さん！ 見てこのズボン

「うわっ。汚なあー」

「先生！ 起きてください。起きないと、布団貸してあげませんよ」

ミサは仲原の頭をペチペチと叩いた。

福永も面白がって、仲原の耳元で「起きてください」と大声をはりあげている。

「ん……」

仲原の目がかすかに開いたように見えたが、やはりすぐ眠りにつてしまう

そのうちに、イライラした福永は「ちょっと、ミサ、手伝つてー」と仲原のズボンを下げ始めた。

「な、何するんですか！」

ミサが目を丸くして驚いていると、福永はケラケラ笑つて「何するって？ 何かすると思った？ 手伝わないんだつたらいいよ。どうどりのズボンのまま布団に入れちゃうからねえ」と脅かした。

ナース2人はお手のもんだ。仲原のズボンをするすると脱がし、ミサの母親のお泊り布団を敷くと、そこへ寝かした。途中、福永が「覗いちやおうか？」とトランクスの端を持ったもんだから、ミサ

は赤面した。ほんとに、福永はいたずら好きだ。

「なーんだ、見たかったのに」と福永は冗談っぽくいい、シャワー借りるねと風呂場の方へ行つた。

ピチャピチャピチャ

福永が浴びているシャワーの音を聞きながら、隣の部屋にいる仲原の姿に目をやつた。『ぞぞぞ』と動いている。さつき、福永が大声で叫んだもんだから、起きてきたんだろうか？お願い、目を覚まさないで、今は！

しかし、ミサの願いもむなしく、『ぞぞぞ』とは段々激しくなり、とうとう、仲原はガバッと起きてしまった。

布団の上に不思議そうに座る仲原。今の状況を懸命に分析している様だ。首をかしげて頭を搔いて。怖いもの見たさか、仲原の行動を観察していると、目があつた。

「おい！」

完全に目が据わっている。

「あー、いい風呂だつた。ミサ、服かして」

「福永さん、こっち来ちゃだ、め……」

「おつ」

タオルも巻かず全裸の福永登場。仲原は慌てて布団の中に潜り込んだ。布団の中で、いつまでもケラケラ笑っている福永と、驚いたようなミサの声を聞いていた。ふかふかの日光の香りのする布団、笑い声、いつもの埃っぽく湿つた布団と比較しながら、仲原はまた眠りについた。

第17話 消せない記憶

「だから、加藤さんみたいな人とは」「わかつてますつて。彼女もいるつて……」

「本当？ 諦めたふりしてるだけじゃないの？」

「もう、福永さんつたらしつこい」

仲原はどれくらい眠ったのだろうか。喉の渴きを覚え、目を覚ましたが、なかなか体が起きてくれない。漂ってくる、パンの焼けた匂い、珈琲の香りを心地よく感じながら、女達のおしゃべりを聞いていた。

「そんでね、亜里沙つたら……」

福永はそこまでいふと、少し声を落として「加藤さんとも付き合つてたみたいだよ」と言つた。

「えー！ 知らなかつた。ショックです」

「あんた、知らなかつたの？ ほんと、アンテナ低すぎつて。それにも、男は見る目が無いよね。あんな、亜里沙みたいな女、外面だけじゃないの。昨日なんか、仲原ツビにつきまとつてたしね。きつと加藤さんとも遊びだつたんだろうね」

自分が仲原ツビと呼ばれている。もつちよつとましなあだ名は無いのかと、布団の中で苦笑した。最初遠くの方から聞こえてきた話し声が、はつきりと耳に届く。仲原は、いつ布団から出でいいものか、タイミングを計つていた。

「そんなん。何がショックつて、加藤さんが浮氣するつて所がショック。聞かなきや良かつたです！」

「だつて、もう好きじゃないんでしょ。だつたらいいじゃん」

「そんなんに、念を押さないでくださいって！」

「大体、あんなホルモン撒き散らしの女と出来る、加藤なんて信じられへんわ」

口悪く言つ福永をくすくす笑いながら、ミサは言つた。

「それを言つならフヨロモンです」

2人は大きな声で笑つて、食事を続けた。正直、仲原にとつて、2人の会話の内容はどうでも良かった。それより、食器のカチカチいう音、トースターがチンッと知らせる音、ポットの湯が沸騰する音。仲原はそれらの音を感じた。

小さい頃に病氣で死んだ母。まもなくやつてきた義母。義母と父の間で生まれた妹。いろんな光景が頭に浮かんでは、それらの記憶をかき消した。

仲原はやつと、布団から起きだすと「おはようござります」と兵力丁寧に2人に挨拶した。

「やだ、先生！」

ミサは洗面所の方から、大判のバスタオルを持つてくると、パンツ姿の仲原に渡した。

「あの、昨日は『迷惑を……』

「ほーんと、パンツ脱ぐつて大騒ぎして、大変だったのよ

「うそっ」

腰にバスタオルを巻きながら、驚いた仲原の顔を見ると、満足した様子で、ふふふんと、福永はいたずらっぽく笑つた。横でミサも笑いをこらえていたが、あまりにも仲原が氣の毒なので「福永さん の嘘ですよ」とかばつた。

「どう？ 朝はん食べられる？」

「あの、水を」

「あ、はいはい」

福永は自分の家の様に、コップを取り出し、氷と水を入れて差し出した。

「ありがとうございます」

仲原は一気に水を飲み干すと、洗面所を使つていいかミサに聞いた。「あ、先生。そこにお客さん用の使い捨ての歯ブラシがあるから使つて下さい」

「あんたん家、何でも揃つてんのね」福永が感心していると「お母さん、お父さんと喧嘩すると、すぐ泊まりにくるから……」とミサは苦い顔をして言った。

洗面所には、化粧品のボトルが行儀良く並んでいる。そして、ところどころに女の子らしく雑貨が飾られていた。仲原は、その中に飾られていた小さな小瓶に惹かれた。小瓶の中には青く着色された砂が半分入っていて、小さなヨットが砂の上にチョコンと置かれている。こんな小さな瓶の中にヨットが入ったもんだ、そう言えば昔流行つたな、と思い出した。

「お兄ちゃん、こんな大きいお船、どうやってこの中に入ったの？」不意に妹の顔が浮かんだ。長い髪を左右に結び、まん丸の目で口をとがらせて真剣に聞く姿を。多分、初めての家族旅行だった。ドライブインに置いてある、瓶に入っている船のお土産を、妹は見入っていた。小さな瓶の口から、どうして船の模型が入ったのか真剣に考えている。妹は小学生になつたばかりだったと思う。

「亞美も瓶にすいこまれちゃうぞー！」

「やだー怖い」

仲原はそつと目を閉じ、溢れてくる涙をザザツと洗い流した。

「先生、珈琲？ それとも」

「あ、水で」

食卓の上には焼けたばかりのパン、目玉焼き、ベーコン、レタスが置かれている。横で、福永とミサがおしゃべりの続きをしている。美味しい珈琲店をみつけただの、あそここのケーキは美味しいだの、横で聞きながら黙々と食べた。ここにいる自分を不思議に思いながらも、何か安らげる雰囲気を感じていた。

「ご馳走様でした」

「早っ！ おかわりならあるよ」

福永は母親のようにそう言つたが、仲原は胃を抑えてもう入らないという素振りをした。

「昨日、随分飲んでたからね。仕方ないか」

「あの、ずほんは」

「あんまり、汚いから夜に洗濯して干したの。まだ、もうちょっと
乾いてないかな。乾くまで休んでつたら？ 仕事、いいんでしょ」

「休みですけど」

「ちょっと私ら、出かけてくるから、寝てもかまへんよ」

福永は、まるで自分の家のように言った。

2人は洗面所でもキャーキャーと何やらしているし、出てきたと思つたら、着替えるからあつち行つて等と指示し、騒がしく準備を終えると、仲原を部屋に残したまま出て行った。

仲原は、やはり重たい頭を抑えつつ、もう一度布団に潜り込んだ。生きてたら、こんな風に女友達と遊びに行つたり、恋をしたりするんだろうつな。仲原は、拭えない妹の影を想つた。

「じこ！ じこ！」

福永は美味しいと評判の珈琲店の看板を見つけると、ミサに左折する様に指示した。

「じこねー、何か豆を選べるじこによ、それに、JAZZもかかつてて。ま、とにかく入る入る！」

「福永さん珈琲に詳しいの？」

「うーん、キリマンジャロにブルーマウンテン、んー」

2人が店内に入ると、休日らしく賑わっていた。店内に広がる珈琲の香りとJAZZのリズムが飛び込んできて、高揚していくのがわかる。福永は、正解だったでしょ、という様な表情でミサに目くばせすると、マスターが声をかけた。

「いらっしゃい。今、ここしか空いてないから」

2人はマスターに促され、カウンターの席に座つた。結局、あまり豆の種類も知らない福永とミサはマスターのお勧めを飲むこととなつた。

頭にバンダナを巻き、髪を蓄えた、赤いエプロン姿の店主はどこか洒落ていた。表に停めてあつた、というか飾つてあつたハーレー

もこの店主のものだわつ。いつもやかましい位の福永も音楽に聞き入っている様子だ。

店主が入れてくれたその珈琲は、すっきりとした苦味、酸味もきつすぎず、まるやかな舌触りで、ミサも福永も満足した。「美味しいねー」と口々に言い雰囲気を楽しんだ。

「オールド、アメリカンつちゅう感じやね、マスター」

福永は例のごとく、マスターに話かけている。本当に、この人の人懐っこい性格がうらやましかった。ミサは横で、福永とマスターの会話を楽しみながら、珈琲を味わった。

カラソカラソと店のドアが開いた。

「あ、いらっしゃい恭子ちゃん！」

入ってきた人物は常連らしく、マスターは親しそうに声をかけると、今空いたカウンターの席に案内した。

「ちょっと片付けるから」

マスターは慌てて皿やコップを片付け、布巾で机を拭いたが、女性は座ろうともせず、「もう1人来るので……」と付け足した。

「あっ、そう。良かつた、仲直りしたんだ」

マスターが大きな声を出したので、数人の客がマスターと今、入ってきた客をチラチラと見た。ミサもその1人だった。

「お、お、お」

「何？何？むせたの？どうしたの？」

「お、おみ、おみ」

ミサははつきり覚えていた。恭子と呼ばれる女性の顔。今店内に入ってきた女。

(お富!)

「マスター、ちょっとお水ちょうどいい。この子むせたみたい

「ちがつちがつ」

ミサは、無理やり福永にお水を飲まされ、はははっと息をきらじた。

カラソカラソと店のドアが開いて、すぐに次の客が入ってきた。

マスターは恭子の顔を怪訝そうに覗き込み「今日は2人?」と聞いた。

「あー、加藤さん! 昨日はどうもお疲れ様でした。例の彼女さん?」

あれだけ、悪口を言つていたくせに、福永は愛想良く、今入つてきた加藤に話しかけた。加藤は「参ったなあ」といいつつ笑みを浮かべながら照れくさそうにした。ミサは、やめて、やめてと福永の服の裾を引っ張つたが、福永は一向にお構いなしで話を続けた。

女性がこちらの方を見た。肩まであるストレートの黒髪、グレーのコートに白いスカート、ブーツ姿。こちらを向かつて会釈をすると、加藤と一緒に奥の2人掛けの席へと消えた。

「お綺麗な人やね」

福永は皮肉っぽく言つた。

「あの人ね」

「何、何、知つてんの?」

福永は好奇心いっぱいの目で、ミサの答えを期待したが「いや、知らない」とミサが言うと、なーんだと眉をひそめた。

やつぱり、言える訳ないか。福永が口が軽いという訳ではない。酔つた勢いで加藤や、仲原に余計な事を言つてしまつ可能性はある。いろいろ考えたあげく、ミサは口をつぐんだ。

1つ、ミサが驚いたことがあった。加藤と彼女が一緒に並んでも、嫉妬を感じなかつたという事。少しづつ、自分の感情が違うところに行つているのだと、その時ミサは気付いていなかつた。

しばらく、仲原はふかふかの布団で「ぐるぐる迺」した。他人の家だ、勝手にいろんな物を使う訳にはいかない。自分が寝たせいで、少し酒臭い布団を臭い、どうしようもない男だなあ、なんて今更ながらに思った。

ガチャガチャとドアの開く音がした。2人が戻ってきた。仲原は、慌ててベランダに干してあるズボンを取りに布団を出た。いつまでも、パンツ姿でいるのも申し訳ない。

「ひやあ~~~~~ミ、ミサ……」

ベランダへ出ようとした所で、背後からミサの母親らしき中年の女性の叫び声が聞こえた。

仲原は落ちているタオルを慌てて腰に巻くと、叫び声の主を見た。片手には玄関に置いてあつた簾^{ほづき}、腰を後方にずらしながら威嚇している。ふくよかな顔はいかにも、お母さんという容貌で、ビジュとなくミサに似ていた。

今日は驚かされることばかりだ。仲原が言い訳を考えていると、ミサの母親はヒステリックに叫んだ。

「ミ、ミサ、いるの？ ちょっと出てきなさい」

「あの、友達と出かけてます」

ミサの母親は、仲原の口調に、少し安心したのか持つっていた簾をようやく降ろした。2、3度自分を落ち着かせるように深呼吸をして、目の前にいるパンツ男に説教をしだした。

「ちよっと、あんた、座んなさい！」

仲原が、その場に正座をせざるをいけなくなつた所で、やつと2人が戻ってきた。

ミサと福永はのん気におしゃべりをしながら、ドタバタと階段をあがる。「あれ？ あれれ？」鍵が開いているので、ミサは不思議に思い部屋に入った。

丁度、ミサの母親が仲原に説教しているところだった。

「あんたね、付き合ひうなら、付き合ひう前に挨拶に来るのが普通でしょ！ それが、まあ、そんな格好で。私だったらからいもの。お父さんだったら、あんた間違なく殺されるわよ」

「お母さん！」

玄関を開けて飛び込んできた光景は、腰を手にあて、怒るおばさんと、タオルを巻いたパンツ男の構図。驚いているミサと仲原の横で福永が大笑いした。

「あら、そうだったの。それはごめんなさい」

福永に事情を聞いた母親は、少し罰が悪そうに頭を下げた。

仲原は乾いたずぼんをやつと穿き「いらっしゃいませ、お嬢さんの部屋にやっかいになつてすみません」と一寧に応対した。

「てことは、もしかして、あなたお医者さん？」

「まだ、研修医ですけど」

先ほどまで、両尻を吊り上げていた母親の表情がぱっと変化し、何か偉い人をみつめるような視線を送った。

「本当にごめんなさいね。ふつつかな娘ですけども」

「ちよつとお母さん！」

母親の脳裏には「医者の嫁」という字が浮かんだに違いない。先ほどとは別人のように、取り入る様に話をすすめた。ミサは口をとがらせて怒っているし、福永は興味津々で状況を見守っている。

「あなた、お付き合いしている人いるの？ ミサなんかどう？ この娘は純情でいい子よ」

「もつ、お母さん！」

单刀直入すぎる問いに、仲原は思わず苦笑した。

ミサの母親もそれ以上は何も言わず、ふと思いついたように玄関に置いたといふか、慌てて落としたスーパーの袋を取りに行つた。

「今日はね、すき焼きでもしようと思つて。こんなに、大勢いるんだつたら、もうちよつとお肉買つてくるわね。真ちゃんもいるんだ

まいと

つたら、お酒も用意しないと」

「おばちゃん、そんなに気を使わないでください」

福永は何度か面識のある母親にそう言った。ミサの母親は、福永のことを真ちゃんと呼んでいる。ミサから、何度もなく福永の話を聞いているからだ。自分の娘の見方になつてくれている福永を親しげに呼んだ。

「あ、それと、先生！ あなたも休みだつたら、一緒に食べる？」

「いや、昨日も泊めて頂いたのに」

「何、帰るの？」

ミサの母親は牛肉のパックをとりだしながら言った。

「……」

牛肉に目がくらんだ訳ではない。しかし、すき焼きは捨てがたい。何て仲原が思つていると

「先生、いつもインスタント物ばかりでしょ。お母さんに甘えたら？」

福永が代弁してくれた。

「じゃあ、あのよろしくお願ひします」

「そう」母親の目が爛々と輝いた。「もつと、お肉買って来なくちゃね。あ、それと、ミサ！」

押入れにお父さんのスウェットがあるから、先生に出してあげなさい

い

「え？ そんなのいつの間にしまったのよ」

ミサは驚きながら、母親の指差す通り、押入れの一角をみると、上下のスウェットが出てきた。どこまで、用意がいいんだろう。ミサは呆れながら、他にも何か隠されていないか、押入れの中を見渡した。

「何やつてんのよ

「お母さんが、何か隠してないかってー」

「まあ失礼な子ね」

仲原は、口げんかを始めた2人の様子を目を細めて眺めた。よく

ある母娘の光景。

結局、晩ご飯までも「馳走にならうこととなつた。

「先生に、お風呂入れてあげなさい」

母親は、娘の婿を扱うようにわざわざ言った。

清潔なバスタブにつかりながら仲原は思った。家族とは「こういうもんなんだろう。湯気で曇った浴室なんて久しぶりだ。心の中に何か満たされるものが湧き上がってきたのを感じた。

自分が必要としているのは、家族なんだ。今まで味わったことのない感情。その先にミサの顔を重ねた。ここからは入ってはいけない、こんな感情を持つてはいけない、そう感じながらも健気なミサの姿を思い浮かべた。ミサを好きなのか、ミサを取り巻く環境に憧れてしまったのか、それとも妹の影をミサに重ねてしまったのか、わからない。ただ、この前から、気になつていたミサの存在が、仲原の中でどんどん大きくなつっていく。

「ふつつか者の娘か……」

仲原は大きく息を吸い込んだ。

「せんせ」

ミサは恐る恐る、仲原に声をかけた。「あの、タオル置いときますから」

ミサの声は仲原に良いタイミングで届き、仲原は感情を抑えられなくなつた。タオルを置くと、すぐに脱衣場から逃げようとしているミサに、思わず声をかけた。

「せっかく、お母さんが言つてたことだけど」

ドアの向うに[ゆ]る影に話しかける。仲原の声は、浴室に響き戻りがかつていて。

「あ、「めんなさい。お母さん熱血だから」ミサは見えもしないのに、浴室のドアに背を向け話を続けた。

しばらく、間が空き、仲原は意を決した様に口を開いた。

「俺、気になつてた」

仲原は言った。

「え？ 何が？」

「お前

相変わらず短い仲原の言葉。しかし、ミサはその意図を理解している様子で、それからは何も言わず慌てて去っていく音がした。途中、ドンッという鈍い音と、いたつという声が聞こえ、困っているだろう、ミサの表情を想像しながら微笑んだ。

自分から声をかけたのは初めてだ。廻り始めた歯車の音を遠くで聞いた。

第19話 本当の

「あんた、風邪でもひいたの？ そんな真っ赤な顔して。この子つたらね、まあ昔つからすぐ真っ赤になるもんだから、保育園の頃なんて、リンゴちゃんなんて呼ばれてねえ」

すき焼きの鍋を囲みながら、ミサの母親の話も弾む。甘い割り下の臭いが部屋中に充満し、風呂から出て来た仲原は、親戚の家に来たような錯覚を覚えた。

「あーやつぱり、お父さんのスウェットだと、ぶかぶかね。ほほ」「お先にありがとうございました」

仲原は軽く頭を下げると、ミサの母親に勧められるまま食卓についた。

「先生は卵入れる派？」

仲原が頷くと、世話好きの福永は、用意しておいた生卵をお椀に入れ仲原に渡した。そして、仲原がお椀を受け取るか受け取らないかのタイミングで、ミサの母親が煮えた肉を入れていく。絶妙なタイミング。まるで、仲居の様な2人に、思わず顔がほころんだ。ふと、仲原が対面に座っているミサの顔を、鍋ごしにみつめる。目が合つ。

ミサは視線をそらし、わざと席を立つて飲み物をとりに行く。「まあ、あんたは気が利かない子だね。先生の分も入れてあげなさい！」

そつとして欲しいミサの気も知らず、母親はそう言つた。

「いえ、お構いなく」

「そんな遠慮せんと。ビール？ 燃酎？ たくさん買つてきたから。ミサ！ とりあえずビール出してあげて」

仲原の答えも聞かず、ミサの母親は勝手にビールと決め付けてしまつた。

ミサは言われるがまま、ビールを冷蔵庫から出し、ふとため息

をついた。

俺、気になつてた……

仲原の声が頭を駆け巡る。私のどこがいいんだろう？ キツとからかってるのかも。等と思いながらも、誠実そうな彼の態度に、もうしかして？ という気持ちも湧き上がってきた。先ほどから、明らかに自分を見つめる仲原は、何か自分にメッセージを送っている様な目だ。

プシュッ

ミサが缶ビールの蓋を開け仲原に渡した。

一瞬、ミサの指と仲原の指の先が触れた。ミサはどきっとして、手をひっこめた。熱いものを触った時のように。そして恐る恐る、仲原の顔を見た。

仲原の視線は真っ直ぐで、振れることなくこちらを見ている。胸の奥が重たく、何かぎゅっと、つかまれている感覚になつて固まってしまった。彼の視線が自分の内に入ってくる。緊張と何か混じった様な感覚。ミサは右へ動けばいいのか、左に動けばいいのか分からないくらい、混乱していた。

「ありがとう」

端整な顔が、こちらを見てそう言った。少し微笑んでいる様にも感じられた。

「あの」

「好きだ」

「……」
「うそり、小さな声で仲原は言った。

ミサが耳まで赤くなつたのは、言ひ間でもない。
(落ち着け、落ち着け)

ミサは飲みたくないビールをとりに、また、冷蔵庫の方へ行った。

福永とミサの母親は、そんな2人に気がつく様子もなく、おしゃべりに花を咲かせている。

「やだ、おばちやん。真ちゃんはよじれてること

「何で」

「昔、流行ったでしょ。」『れ』

福永は不自然に3本の指を立てたが、ミサの母親は全く分からない様子で首をかしげている。

「あ、ぐわし」と仲原は言つて、はははと高笑いをした。

「あ、あの気持ち悪い『まことちゃん』の事ね。あの、何だっけ、赤と白の縞々の服を着た漫画家のね、ほほほ」

「そうそう、おばちやん。だからね、福ちゃんとか、福りんつて呼んでよ。昔ね、その漫画のせいだ、からかわれたんだから」

ミサは話にのれず、さつきから飲んでいたビールを飲み干した。笑っている3人の声、といづより、笑っている仲原の声を意識していた。

(ダメだ、どうしよう)

ビールを飲んでも、胸のドキドキはおさまらない。それ所か、どんどんどんどんと高鳴るのが分かる。

「あー真ちゃん、焼酎の氷無いわ。ちょっとおばちやんと一緒に買に行つて」

「えー、おばちやん。毎日、飲みすぎやで、今日は『れ』くらいで…」

「いいの、いいのつて!」

「え、え?」

とぼけた顔をした福永を、ミサの母親は半ば強引に引っ張りだした。

「ちょっとお母さん、氷買いに行つてくるでな」

にやっと笑った母親の顔をミサは見逃さなかつた。

(もへ、お母さん、何考えてんのよ…)

「わふー。おばちやん、わふこわ」

きーんと冷えた空は透き通つていて、ミサの母親と2人、買い物

に行く事になつた福永は、ミサの母親にぴったりとくつつき、娘のように甘えた。ミサの母親の方も、くつついてきた福永を、また、娘を見るように優しく見つめ返す。

ペたペたペたと、2人の足音が響く。時折、近所の番犬がワワワワーンと騒いでは、2人を驚かす。そして、あーびっくりしたね、と顔を見合わせ微笑むのだ。

「真ちゃん、いつもお世話になつてゐたいね」

「やだ、おばちゃん。あの子ね、なんか知らんけど放つておけない感じなん。確かに要領は悪いけど……看護師に要領なんていらんと思うしな」

「真ちゃんは、ほんと、照れ隠ししてるので、本当は看護という仕事をよく考へてるんだね」

「そんなことないです、でも

「でも？」

「お母ちゃんが、病氣で長い事苦しんだから、それ見てたら

「うん、ミサからも聞いてる」

「苦しんでいる人の味方になつてあげる事が、唯一の、お母ちゃんへの親孝行だと……」

少し涙声になつた福永が言葉を続ける前に「まあ～この子つたら」と、福永の話に感動したミサの母親は号泣した。

「おばちゃん、泣かないでよ！ 私が泣く場面じゃない？」

「やだ、ごめんなさいね。水戸黄門見ても号泣するから、ミサや弟達にバカにされてんのよ。ほほっ、でもダメだわね、泣けてき」

「泣くか笑うか、どちらかにしてくださいーー！」

「ほほほっ」と笑つたミサの母親はかばんの中からポケットティッシュを取り出すと、ぶーっと大げさに鼻をかんだ。

そうして、歩いて3分程のコンビニに2人は着いた。

「いやー真ちゃん、コンビニって何でも揃つてんのね、これ、パンツなんて買いに来る人いるの？まあー

「おばちゃん、コンビニ来たこと無いの？」

「1、2度はあるけども、すすんでは来ないわね」

子供の様にキヨロキヨロと店内を見渡す、ミサの母親を見て、福永はミサの姿を重ねた。

「やつぱ、おばちゃん、ミサそそくつやわ！」

「やめてよ。ミサみたいに、どんなことを一緒にせんとして！」

それはいいけど、ミサとあの先生どう思つ?」

さつきまで、子供の様だった横顔が、すっかりワイヤードショーフ好きのおばちゃんに変化している。そのうえ、コンビニに並ぶ、お泊りグッズを見ながら、不敵な笑みを浮かべている母親に福永は苦笑した。

「おばちゃん平氣なの? なんかね、私、ミサを守つてあげなきやつて、そんな氣が働いてしまう。だから、変な虫がつかない様に見張つて……」

「そう、ありがとね。でも、あの先生、無口だけど挨拶はきちんとしてるし、顔もジョニーちゃんじゃない?」

「え?」

「2枚目つてことよ。ほら、誰だつけ? ブイ、ブイなんとかの岡田さんだ!」

ミサの母親はロック氷と書かれた袋を、ケースから取り出すと無造作に3袋程とりだしカゴに入れた。

「重~~つ!」

すんすんすんつ、と3袋の氷を手に持つカゴに入れられ、福永の腕には痕がつく程に重みがかかった。ジョニーちゃんだつて、可笑しい。ジャニーズじやない、なんて笑いながら、福永も幸せな気持ちに浸っていた。

ミサと仲原をどう思つ?といつ質問。福永には全くわからなかつたが、仲原とミサ、2人の時間は今、この時、始まろうとしていた。互いに何か探りあうような会話を一つ二つしただけ。

ミサも仲原が何か言つてくれないかと待つたが、無口な彼は相変わらず、テレビを見たり缶ビールに口をつけたり。

何か言いかけようとする素振りはミサにもわかつたが、それが余計にミサを緊張させた。

「あの、先生」

ミサが覚悟を決めて話そうといつ、その時だつた。何か立ち込めるような煙のにおいがした。

「おいつ焦げてる！」

本当に鍋からはモクモクと煙が垂直にあがり、2人は電気コンロのスイッチを切るのも忘れて慌てた。

「え？ あ、どうしよ」

「水！」

「はい」

ジユワーー

焦げくさい臭いがたちこめ、ミサは窓を開けに走つた。仲原も。はあはあと、2人はベランダに出て新鮮な空気を吸つた。はあはあはあ、ふー。やれやれだという様に、お互に必死な顔をしてベランダに飛び込んだ。それがおかしくて、たまらなかつた。あはははは、はははは。

笑いは途切れで、お互いの顔を見つめあつた。

次の瞬間には、2人の顔は一番近くにあつて、ミサは目を閉じた。鼻と鼻が擦れ合い、お互いの息を、呼吸を感じる。彼の顔はミサの右耳の辺りにぴったりとくつき、彼の両手がミサの体をグルリと取り囲んだ。

そして、彼の手は、彼の体は、ぎゅっとキツイくらいミサを抱きしめた。耳元で彼がキスをする。大事な人にそうするように。

ミサは、思わずギュッと体を締め付ける、仲原の手を振り解いた。

「ダメなのか」

確認した仲原の口唇に、ミサは自分の口唇を重ねた。

ミサにしては、大胆すぎる行動だった。でも、本能というものが

邪魔をして、いや、後押しをしてというべきか。素直に、人間らしい行為をミサにさせた。

それから、福永とミサの母親が帰つてくる数分の間、2人は繋がっていた。

第20話 問題（前書き）

やつとの更新です。ちょっとハーレクイン的なところがありますが、決して欲求不満という訳ではありません（^_^; ^_~）なんですね

トントントンタン
軽快に響く足音。その音は段々高くなり2人の部屋に近づいてきた。

その音に我に返ったミサは、仲原の腕をほどき、洗面所へ行つた。私つたら、どうしたんだろう……。真つ赤になつた顔を冷やすよう、冷水でパチャパチャと洗つた。ふーっと深呼吸をして、息を整えてみたが、一向に胸の高鳴りは抑えられない。

仲原はそつと、そんなミサの様子を見守りながら、顔を洗つている彼女の後ろに回つた。

気配を感じてか、ミサは濡れたままの顔をあげると、鏡越しに後ろに立つている仲原の顔を見た。

彼は冷静に一直線にこちらを見る。

鏡越しであつたが、その強い視線に驚き、ミサは顔を背けてしまつた。

「これ」

仲原は洗面所の片隅に鍵をおくと、さつとミサから離れた。

「え？」

これって合鍵？付き合つてこういう事なんだろうか。ミサは慌てて仲原の方へ寄り確認しようとするが、母親達が帰つてきた。

「ただいまー」

片手にはロック冰、片手には空いた酎ハイの缶を持つた福永は、「さつぶー」と言いながらドタドタと入つてきた。「そりや寒いわよ」とミサの母親が福永に続いて入つてくる。

「あの、食べるだけ食べて申し訳ないんですけども」

仲原は、いつの間にか服を着替え、帰る様子だった。

「えー！先生。せっかく氷買つてきたんだから、1杯くらい飲んでいいかな……」

酔つて少しきせの悪くなつた福永を止めるように母親は言った。

「先生も忙しいのよ。真ちゃん」そして、丁寧にたたまれたスウェットの上に田をやると

「これからもミサをお願いしますね」と仲原に声をかけた。

「はい」

仲原はそう言つと、「おじやましました」と帰つていった。

「本当に挨拶の良い先生だねえ。あれ? ミサは?」

「ミサ。先生帰つちゃうよ。ミサー」

2人はミサを探した。

「ト・イ・レ!」「

真つ赤な顔をして出て行けば、何か感付かれるかもしれない。そう思つたミサは先程から、トイレに座つてじーっとしていた。しかし、赤くなつた顔はなかなか戻つてくれない。ミサは手の中にある鍵に視線をやつた。

なんで、合鍵なんて持つてるんだろう?...ドクターツモてるから、やはり遊ばれてるのかもしない。でも、でも。キスの場面を想像したミサは、そうした考えを吹き飛ばした。

次の日、ミサは日勤だったので、母親と福永に見送られ部屋を出た。福永は休みだそうで、まだパジャマを着ている。出来る事なら、勤務を代わつて欲しかつたくらいだ。どんな顔をして仲原に会つていいのか、そう思うとミサは深くため息をついた。

タンタンタンと階段を駆け降り、空を見上げた。空は明るく、うす水色。頬にかかる風はまだ冷たいが、日に日に優しく感じられる。

歩きながら、昨日のことを想つた。いつもいつも受身だった自分なのに、どうして自分からキスをしちやつたんだろう? 仲原の目が寂しげだつたからだろうか。ふと、大胆な自分の行動がよぎると、ミサは目をつぶつて首を横に振つた。

「おはよー

「あー！」

あの時、待ち合わせした電信柱に仲原が待っていた。少し微笑んだ表情で手を上げた。付き合いはじめた中学生のよう、通学路で待ち合わせをしているような彼の姿。ぶつきらぼうな仲原と、その行動が結びつかず、ミサは思わず吹き出した。

「先生、どうしたんですか？」

ミサは少し笑いながらそう言つた。

「昨日、言ひ忘れたから」

真面目な顔でそう言い、歩きはじめた仲原の後ろを、少し遠慮がちについていった。言ひ忘れたといいつつ、なかなか言い出さない仲原。とても長い時間に感じられた。ミサの頭の中でもいろいろな言葉が駆け巡る。付き合ひて欲しい、付き合いたい。そんな言葉を想像し、仲原の言葉を期待している自分がいた。

仲原が急に足を止めたのでミサは驚いて、立ち止まつた。

仲原も照れ屋なのだろう。ミサの方を見もしないで話をはじめた。

「付き合ってくれるかな？」

キター。そんな感じだ。ガチガチに固まりながらもなんとか、声を振り絞るように出した。「ハイ」と一言。

仲原はうんと小さく頷いて、また歩きだした。男らしい背中を追いつつ、ミサは感じていた。いつまでも、受身でいるのは嫌だ。自信が無くて、弱くて、誰かの影に隠れているような自分を変えたくて仕方なかつた。仲原となら何か変われるような気がした。

ミサは急に歩くスピードを速めて、仲原の横に並んだ。

「私も言ひ忘れたことがあります」

鼻筋の整つた横顔が、驚いてこちらを見る。よく見れば、本当に格好よい。今まで何で気がつかなかつたのかわからなかつた位。そして、彼の唇を見ると、その感触を思い出し体中がしびれた様に感じる。優しくて、それで、だめだ、もう言つちゃえ！

「先生のこと好きになっちゃいました！」

「……」

少し間をおいて「お前、面白いな」と仲原は笑つてミサの頭をポンポンっと軽く叩いた。ミサもまんざらではなさそうだ。仲原は柔らかいミサの髪に触れ、離すのが惜しくなったのか、ミサの髪を撫でたあと「夜、ごはんどう?」と単刀直入に切り出した。

病棟での仲原は、朝の表情とはうつて変わって厳しい表情を浮かべている。カルテを開き、自分の担当の患者の情報収集をはじめる。ミサも仲原にみとれている余裕はない。清拭に、点滴、薬くばりに検温、次々と仕事が襲い掛かってくる。ナースステーションに戻つてこれたのは、お昼の休憩になつてからだ。

「渡辺さん、早くお昼休憩いってね」

「血糖測定の人がいるので、それが済んだら行きます」

「つて、渡辺さんが早く休んでくれないと、次の人が休めないじゃない。優先順位を考えて仕事しないと! もういい、私、先に行くから、あなたが残つてね」

「はい……」

角野亜里沙だ。さんざんミサに用事を頼んでおいて、優先順位もへつたくれもない。ミサは眉間に皺を寄せながら、次の仕事にとりかかつた。

ミサが血糖測定を済ませ、ナースステーションに戻ると、大声で怒鳴りあう声がした。

「だから、なんで勝手なことをするんだ君は」「先生が何もしないから、自分がしただけです」
(えー?)

声の主は病棟主任の高津と、仲原。

ミサは田の前の光景を凝つた。
(ちょっと、どうしたつていうの?)

第21話 モルヒネ嫌い

「私が何もしていない、ってどうこうことだ」
ナースステーション中に、高津と仲原の声が響いた。一瞬、何が起きたのかわからなかつたミサは、入り口のところで呆然と2人のやりとりを眺めていた。

高津の声は益々大きく響き、仲原もまた、高津を見据えている。
「じゃあ聞きますが、彼にとつての治療って何なんですか？」
「何だ、私の治療が間違つてるとでもいいたいのか！ 研修医の分際で」

高津の高圧的な態度にミサはぎょっとしたが、仲原は全く動じなかつた。むしろ、高津を軽蔑するような眼で、あざ笑うかのような表情をした。

それには、高津も黙つていなかつた。バンッとある患者のカルテを、机の上に乱暴におき、見る、という様に検査データーのページを開けた。

「このデータが表す意味くらい、君にもわかるだろ」

高津と仲原は、谷山忠治のこと言い争つている様だ。

2人の怒声は、隣の休憩室にも聞こえた様で、師長と亜里沙、数人が出てきて様子を伺つてゐる。高津と仲原は周囲に気をとめる様子もなく続けた。

「谷山さんのモヒの事で怒つてんのね、高津」
ミサの横で亜里沙がヒソヒソ言つた。

谷山忠治 56歳。白血病の再々発。今回は全身状態の悪化で入院してきていた。毎日続く高熱、痛みの訴え、息苦しさにナース達は頭を悩ませていた。

数日前のカンファレンスでも、谷山のことが議題にあがつていた。

師長に主任、恵、亞里沙、ミサ、福永、他のチーム員も交じつての話し合いになつた。

「先生、谷山さんの熱の事ですけども。今の解熱剤、全く効かないように思うんですが」

最初に口火を切つたのは恵パンチだつた。

「腫瘍熱パンチだつて言つてるだり。基本は冷やす事だ。君たちは、何年看護やつてんだ。」

亞里沙が援護射撃を打つ。

「冷やします！ それに、熱だけじゃなくて、痛み止めも全く効かなくて、本当に苦しがつてるんです」

「しょうがないだろ。君たちは何でもかんでも感情的になつて、やれ、苦しがつてるだの痛がつてるだの。全体的にみて判断しなければいけない事くらいわかつてくれ。まして、今は抗ガン剤の治療中だし、その結果を見てだね」

「でも、先生、家族の方が。何とかしてやつてくれ、つて。今の状態何とかならないもんですか？」

「じゃあ、君たちに何かできるのか？」

高津はお決まりの言葉を口にした。ナースごとに意見を言われたくない、そんな表情で。

「モルヒネの使用はどうですか」

そう提案したのは福永だつた。

高津は首を横にふり、馬鹿げてるという風にため息をついた。

「モルヒネを使うということは、病気に負けたという事だ。今、抗ガン剤の治療中だというのに、じゃあ何か。彼の、谷山忠治の治療は無意味だと言いたいのか？ 現に腫瘍マーカーの数値は減ってきてるし、血液データを見ても、彼の状態が改善しているのは明らかだ」

これ以上、論ずる必要はないといつ態度で席を立つた。高津が動くと、ツンと鼻をさす整髪剤のにおいがたちこめた。それは、高津の嫌味な部分をより引き立てている。ナース達は皆、スマートそう

に振舞う高津を怪訝そうな顔でみつめる。

と、その時。あまりに高慢な高津の態度に腹をたてた福永が、去りうとする高津に向かつて食いついた。

「先生！『」家族の方と話していただけませんか！私たち、毎日家族の方に言われるんです。何とかしてくれって。このままじゃ、谷山さんだってかわいそうです」

高津はぱっと振り返り、ヒステリックに叫んだ。

「そこを、きちんと説明するのがナースの仕事だろー！ いちいち神経質な家族に付き合う程、医者は暇じやない！」

ツカツカと高津の革靴が嫌味に音をたて去つていった。

高津が去つたあと、ナース達の不満が爆発した。

「まあー、何、あの態度。今に始まつたことじやないけど

「そつそつ、何であんなにモルヒネ嫌いなんだらうね」「ほんとー、何ていうかさ、あの考え方。絶対おかしいよね。モル

ヒネを使う事が最終段階だなんて。昭和の時代かつてーの「自分の家族が痛がつてたら、どうするんだろうね？」

「ほーんと」「ほーんと」

ミサも高津の態度には疑問があつた。がん性疼痛では、WHO（世界保健機構）の3段階除痛ラダーが世界標準の有効な治療法になつてゐる。そこで示されている通り、モルヒネはがん性疼痛で主力な薬である。にも関わらず、モルヒネの使用を頑なに拒み続ける高津の態度は、自分の治療法を信じ続ける医者の傲慢さを感じた。

第一、谷山の苦しめる様子といつたら、ナースでも目を覆いたくなる様だ。家族にとつてみたら、地獄の苦しみだろう。

あまりに、悲惨な彼の姿に、福永が仲原に相談したのだった。

仲原はもちろん使うべきだと、すぐに対処した。それが、高津の気に障つたのだった。気に障つたというか、逆鱗に触れたとでも言つたほうが良いか。

高津と仲原。2人のにらみ合いは続いた。

差し出されたカルテの検査データを見ず、仲原はこいつ言った。

「こんなデータが、何になるんです？」

高津は頭に血が昇つたような形相で、赤黒く顔を染めている。

仲原はお構いなしに続けた。

「現に、谷山さんは、痛がつて、苦しんでいるんです。それを何とかするのが医者の仕事ではないんですか？ 検査データが良くなつたところで、患者は救われませんよ」

「私に意見する気か」

「カンファレンスです。話し合いです」

「知識の無い人間が麻薬を使って、呼吸抑制がきて死期を早める」とにもなりかねんぞ。そうなつたら、君はどう責任をとるんだ」

「先生は、責任をとりたくないから、苦しがつている人間を見放すようなことをしているんですね。第一、モルヒネで死期は早まりません！」

仲原は笑みを浮かべているようにもみえた。

「好きにしろ！ しかし私にも考えがある」

高津の頭からは、機関車のようにどす黒い煙を吐いているようだつた。2人の話を聞いていたナース達は、仲原の歯に絹きせぬ物言いに爽快感を感じていたが、同時に仲原の処遇に対して不安を感じていた。

（このままで、高津が黙っている訳がない）

ミサは不安げに仲原の顔を見つめた。

第22話 小園事件

「あんなに逆らって大丈夫かなー?」

ふと、福永が口にした言葉は、ミサの心中を表すものだった。

「蛇のような性格だからねえ、高津は」

噂好きの山中がそう言つと、ナース達は皆、一斉に頷いた。

「そうそう、貢、小園先生つていたじゃない? 研修医ではなかつたけど」

「あ〜〜! いたいた」

古くから4病棟にいるナース達の間では既知の話で、皆、納得の表情を浮かべていたが、ミサは話の内容がわからず、眉間に皺を寄せ、食い入るように山中のほうを凝視した。

「小園事件!」

「あつたね!」

首をかしげるミサに、福永はコソコソとミサに耳打ちをした。

「小園先生つてね、元祖、仲原……」

その先は噂好きの山中が、懇々と語った。途中、2回程ナースコードが鳴り、他のナースが対応してくれたが、いつも一番先に動くはずのミサは、そのまま席についたまま話に聞き入った。

小園は小児科の医師で、医師になりたてであつた。彼の受け持つ10歳になる白血病の患者が、化学療法（抗ガン剤）の治療だけでは良くならず、悩んだ彼は、当時、骨髄移植を精力的に行っていた高津の元へ紹介したのだ。

高津は当時38歳。その頃の彼は、今ほど高慢な感じではなかつたが、やはり、病状よりもデータを重視した面があつたと、長年4病棟にいる貢^{パンチ}が付け足した。

移植後、順調にみえた10歳の少女であつたが、移植後の免疫反応に苦しめられ、11歳の誕生日を目前にして亡くなつたのだ。

少女の治療法をめぐっては、何度も小園と高津と口論する姿がみられ、少女が亡くなつた後、小園は辞職した。

彼の辞職にあたつては、当時、高津が人事権を持つ大学の教授達に上伸したのがきっかけだった、という噂が病院中に広がつたのだつた。

「改めて怖いねー。高津つて。小園先生つて一生懸命でいい先生だつたんよ……患者さんからも随分慕われてたしね」

「い、今どうしてるんですか？ 小園先生は

ミサは思わず口をはさんだ。

しばらく、皆、音が無くなつたように静まり返つた。言つてはいけない台詞だつたようだ。

「亡くなつたの」

「うつ病でね」

「あそこから」

ナース達は口々に事の顛末について話した。そして、山中はやや大げさに屋上を指さした。

「柵がついたのも、あの時以来なのよ……」

ナースステーション内は重苦しい空氣に包まれ、話を聞いていた者たちはため息を漏らした。

「さつ！ 検温、検温」

福永の号令で皆、我に返り、ナース達はまた忙しく働きはじめた。昼からの時間はあつという間に過ぎる。本当に「あつ」という間だ。昼の検温をし、注射、明日の検査の用意、説明、バタバタバタバタとナース達の足音が廊下中に響きわたる。

忙しいおかげで、何もかも忘れて没頭していたミサだが、仕事が一段落し記録にかかると、先ほど山中が言つていた話が頭をよぎつた。

(貫一くん……大丈夫だろうか……)

時計は定時の5時を過ぎ、6時にさしかかっている。仕事を終えたナースは1人帰り、2人帰り、ミサはいつものように残っていた。「あのね、時間内に終らすのも実力のうち。優先順位を決めて、ぱつぱと仕事をこなす。これが大事！ 残つてれば残つてだけ仕事がやつてくるんだから、もう少し要領よくしないと、自分が大変になっちゃうからね」

珍しく福永がミサに忠告をした。

「でも、福永さん。角野さんつたら、全くナースコールや電話をとつてくれないし、いつも私ばっかり対応してて、手が空いたから、いや、患者さんの所へ行こうとすると用事を頼んできて。それでね、ミサも珍しく福永に食つてかかつた。

「しつ！ 壁に山中あり、障子に惠^{パンチ}」

福永は冗談っぽく、目を見開いて、そう言った。

あはははは

2人の笑い声がナースステーション内に響く。ミサの顔にもようやく笑顔が戻った。

(やつぱり、福永さんって素敵)

「また、気分転換にどつか行こー 私帰るからね、ミサも断るところは断りなさいよ

福永はじやあね、と手を振つて帰つていつた。

ミサはやつと、最後の一冊に記録しはじめた所だった。

後ろから足音がして、誰か横に座つた。カルテをかかえ、必死に記録していたミサは横の存在には全く気がつかなかつた。

「おい！」

「はつ」

一心不乱に記録していたところに、いきなり声をかけられたのでミサは驚いて椅子から立ち上がつた。

くくくくく

仲原の押し殺したような笑いが聞こえた。

「あ！ もう、驚かせないでください」

ミサは頬を膨らませて、怒った表情を見せた。もちろん怒つてなんかいない。反対に横に仲原がいることがとても嬉しい。

ナースステーション内を準夜のナースが忙しそうに動きまわる。カルテの傍で座つて記録しているミサを邪魔だと言わんばかりに押しのけ、カルテを確認したり、注射箋を確認したりしている。

「渡辺さん、ちょっと向うで書いてくれる？ 指示確認したりするのに、そこに居られたら邪魔なんですけど」

準夜のナースは大抵機嫌が悪い。彼女も普段は割りと気さくであるが、出勤直後のバタバタで少しいライラしている様子だった。ミサもそれくらいは心得ているので「すいません」と素直に頭を下げ、席を立つた。

「約束、覚えてる？」

席を立つたミサに仲原が話しかけた。夕食の件だ。ミサは分かっていたが、傍にいた準夜のナースが不思議そうに2人のやりとりを聞いていたので、ミサは覚られるんじゃないだろうかとドキドキし返答に困った。

様子を察した仲原は、白衣のポケットからペンを取り出し、メモに走り書きをしてミサの前に置いた。

「20時 電信柱」

という文字のあとに、下手くそなスマイルマークが不気味に笑っていた。ミサはナースステーションの奥の方にある机に移動すると、黙々と記録をはじめた。

第23話 写真

約束の時間まであと30分。結局、ミサが仕事を終えたのは、7時前だつた。

（うわー、時間がないー）

ミサは小走りでいつも道を急いだ。はあはあと息が切れる程走つたので、アパートの階段の前ではとうとう一休みをしなければならなかつた。

外は随分あたたかく、走ったせいかミサの顔は真っ赤になり、汗が額に浮かんでいる。やっと部屋にたどり着き、鏡の前に立つたミサは思わず噴出した。

田の前には真っ赤な顔をした自分。はあはあと息をきらし髪は乱れてすごい形相で立つていい。

（やだ、必死じゃない。私……）

先生との初めてのデート。改めてそう思ったミサはドキドキが納まらなくなつた。

約束の電信柱。そう、仲原の歓迎会の時に待ち合わせをした場所。つい最近まで、自分とは無縁に思えた彼と待ち合わせをしている。そして、あの時とは違い、仲原が来るのを心待ちにしている自分がそこにいた。

狭い抜け道でも、この時間帯は車が行き交う。ヘッドライトのせいで運転席は見えないが、誰か職場の人みつかりそうで、ミサは通りには背を向けて立つた。仲原と会つているとこを、山中なんかに見られたら、噂の種になるのは間違いない。

後ろから足音がして、電信柱と一体化しているミサの肩をポンッと叩いた。

「ごめん。待つた？」

仲原だつた。彼は、病院の帰りらしく大きなかばんを持っている。

彼もまた慌ててやつてきたのか少し呼吸が乱れている。

「先生、病院の帰りですか？」

「そう。ちょっと家に寄りたいんだけど、いい？」

「え？」

ミサがすっとんきょうな声をあげると、仲原は笑つて言った。

「あー、このかばん置きにいくだけ」

仲原は大きなかばんを指さしてそう言つた。そして、ミサの顔をのぞきこみ「何考えてんの?」とにやつと笑つた。

「ち、違いま……」

ミサは仲原の肩をバンッと思い切り叩いた。

「痛え〜！」

仲原はお返しにミサの髪の毛をくしゃくしゃつとした。

それまで、緊張していたミサだったが、自然と打ち解けていった。

仲原が歩を進めると、ミサは横に並んで歩いた。途中、何度か昼間の件について話そうと思つたが、雰囲気が悪くなるような気がして、口をつぐんだ。

歩いて3分ほど、少し古びたアパートの前で仲原は立ち止まつた。1階にある彼の部屋の前まで行くと、「入つて」とミサを先に通した。

玄関は殺風景で、1足置かれている大きなスニーカーが男の人の部屋らしい。玄関からすぐの部屋は、部屋全体が、本と資料の山で、湿っぽく埃の臭いがした。部屋にはパイプのベットと、パソコン、パソコンラックの上にも雑然と本や資料が置かれている。医局で見た彼の机と同じだ。

仲原が着替えている間、ミサはきょろきょろと辺りを見回した。

(掃除しなきや、この部屋)

ミサは主婦用線で部屋を眺めていると、写真立てに入つた一枚の写真が目に映つた。それは、部屋の隅にある小机の上に飾られている。そこだけは綺麗に片付けられていて、彼の大事な人なんだろうとこう事は予想がついた。

可愛らしい少女の写真。真っ白い顔に、引き込まれるような黒い瞳。あどけない表情で写っている。部屋とは不釣合いなこの写真に、一種異様な感じを受けた。

仲原はスーツからジーパンに着替え、脱衣場から出でると、写真の方を見ているミサに気がついた。

「あ、ごめんなさい」

仲原の視線を感じ、ミサはとっさに謝った。何で謝ったのかは分からぬ。ただ、何か触れてはいけない物のように感じた。

「これ、妹」

仲原は何でもないといつ仕草をして、写真立てを伏せた。

「さ、行こうか」

仲原の声に頷いたミサは、伏せられた写真を想いながら部屋を出した。

いつまでも妹の写真を持ち歩いている兄なんて、多分いない。きっと、写真の少女は亡くなつたのかも、等と考えながら。

「先生」

「ん？」

妹さんつて？ といつ言葉が口元まで出かかっていたが、無理に聞く話でもないと思つたミサは、「どこ行くんですか？」と、とつさに質問を変えた。

「あー。決めてない。どうしようかなあ」

「え？ ジヤ、先生どこに向かつて歩いてるの？」

「さあ」

行き先も決めずただ歩いている仲原を、ふふっとミサは笑つた。

「私、知つてる店があります。一度、福永さんに連れていつてもらつたから。ここから近いですよ」

「じゃあ、そこにしよう

仲原がほつとした表情をしたので、ミサは益々笑いをこぼされなくなつた。

「あはははは」

「つて何だよ！」

仲原はミサの肩に腕をまわし、もう一つの腕で髪をくしゃくしゃとした。

二十一

「おどけで走っていく仲間をミサは追いかけて

井伊直弼

立ち止まつた彼はミサが追いつく

「カゲの件で、二つに別れた」

口調で言つて「先生って呼ぶのやめてくれないか」というの方を見た。

じゃあ、なんて呼んだらいいんですか？

ミナガ浦ミハノギ

三才に前をだにして、但願の名前を思ひ出しがちである。つがひだ。琴曲

「ん、なんだかなあ

「夕力ちゃん」

—ええーー?」

先生は何で呼んでくれたか？

1076

卷之三

そこの店は居酒屋といふが感じた
色の暖簾には「魚情 二田」文子ご書かれています。

一 濃い店だな

仲原の言つた通り、店内は1人で飲みに来ている男性客が圧倒的
に多く、ちびちびと酒を飲んでいる姿がみられた。

(違う店にしたら良かつたかな?)

少し後悔したミサだつたが、「ここ」の魚料理美味しいんだよ」と

自分にも言い聞かせるように言った。

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

「2人です」

「今日は団体の予約があつて、カウンターしか空いてないんですが
よろしいですか？」

案内してくれた子は、バイトらしく、忙しそうにカウンターを片付け2人に座るように促した。

「とりあえず生中^{ヒール}2つ」

「生中ふたつ」

威勢のいい声が飛び交う。店内はざわざわと騒々しく、時々男たちの馬鹿笑いが座敷から聞こえてくる。団体の客なのだろう。入れ替わり立ち代り座敷からトイレに行く者、注文をしに来る者の姿が見られた。少々、落ち着かない気もしたが、反対にしーんと静まり返った店だったらミサは緊張してしまっただろう。

綺麗な仲原の横顔を眺めながら、ミサは、本当に仲原のことが好きになつていく事を実感した。『いつひとつとした長い指、こちらを覗き込む涼しい目、病院ではみられない彼のいたずらっぽい表情。時間よ止まれ！』とはこの事なんだなあ、とミサは一人頷いた。

「何、頷いてんの？　お前、変わってるな」

「変わつてなんかないです」

「天然！　この魚と一緒に」

「あはは、先生。今、自分で上手い事言つたと思つてるんでしょ

ー。ださださだよー」

「なにー」

仲原がミサの頭をぽんつと押したので、バランスを崩したミサの手が、隣のおじさんの陣地に入つてしまつた。一瞬、おじさんはミサをきつと睨んだが、何事も無かつたようにちびちびと飲み直した。「あ、すいません」

謝るミサに、横で仲原はくくくくつと、また笑いを押し殺した。

「いらっしゃい」

また、客が来たようだ。魚が美味しい事で知られてこるこの店の

中は活気で満ちている。客が来て、帰る、入り口の戸は開いたりしまつたりと大忙しだ。

ミサが入り口の方をちらりと見ると、どこかで見たような2人の男が入ってきた。

- あ！

ヒサは肩をすぼめて、頭を下げ、顔を隠した。

「今度は、何せつてんの？」

一
げ
げ
げ
げ

一
げ?
』

入ってきた2人の男は外科の医者た。病院帰りのようで、スリッ

「ドクターハウス」

ハセガワ

「一ノ」

第一回 聖母子の御出世

卷之三

と回った。私達、付き合つてゐるんだ。言葉にして聞くと、何かもの

凄い事のような気がして舞い上がった。

しかし、病院の近くにあるこの店。

4病棟の誰かはでも見られたらと思ふと気が気でならなかつた
仲原と付き合つてゐる事がわかられば、山中や恵にからかわれそうだ
パンチ

そしてやはり沙はいしめられかねない
そう思つた途端だつた。

「いせじゆう」

また、威勢の良い声が上がつた。少しソワソワしながらも、半分

（こんなことって……）

第24話 不安

ミサがチラリと覗いた先にいた2人。
加藤とお富の2人……。

(どうか、私たちに気がつかないで)

焦っているミサに対し、仲原は何も気がつく様子もなく、釣りの話などをして1人盛り上がっている。

「大学ん時は、バス釣りなんかもしてみたけど、やっぱり、食べられる魚の方がいいから海釣りに替えたんだ。だけど、釣つてきても料理できな事に気がついて、はは」

「あはは……」

気が気でないミサは、適当に相づちを打ちながら、加藤とお富の2人の姿をチラチラと確認した。店内はいっぱい、ビアやら入口で待たされている様子だ。

「カウンター空きましたっ！」

丁度、横のおじさんが立ち上がり、最後の一杯をぐびぐびと流しここんでいるところだった。最後まで飲んでから立てばいいのに、なんて思つたが、同時に空いた席の意味する事を想像し、ぞつとした。

ともあれ、空いたのは一つだけ。まだ、加藤とお富は待たされていいる。

(どうか、このまま帰つてください)

ミサは何事も起きないようにと想つばかりだったが、運悪く店員が声をかけてきた。

「すいません、席を一つずれてもらえませんか？」

ミサは右隣のおじさんがいた席にずれた。

仲原の左隣にいた人も向う側へずれた為、2つの席が確保された。

(どうしよう)

「カウンター入ります！」

とうとう、仲原の横に2人が案内されてきた。驚いたのは向うも同じことだった。

「あの、久しぶり」

声をかけたのはお富の方だった。

「おう」

仲原はいつも渋い顔に戻り、素っ気なく答えた。

加藤はといふと、軽く会釈をするだけで、しまった、という様な表情を浮かべている。そして、ミサの姿を見ると何かを言いかけてやめたような素振りを見せた。

結局、仲原の横にお富が座る形となってしまった。

店内の喧騒とはうらはらに、ここだけ空氣の流れる音が聞こえるようだ。すっかり黙ってしまった仲原だが、「もう1本」と酒を注文した。

気にしないようにと思うが、余計気にしてしまって、チラチラと横目で確認するミサだが、お富の方も気になるらしくチラチラと仲原の方を見ている。話の糸口を捗しているようにもみえた。

加藤が、席を離れた時だった。

「あの、仲原くん」

ついにお富が口を開いた。

「私、やっぱり後悔してる」

「……」

小さい声であつたが、耳を澄ませていたミサには、はつきり聞こえた。彼女は何も答えない仲原をみつめながら続けた。

「病院の方？」

ミサの方を見ながら、お富は仲原に聞いた。ミサは横で頷き、挨拶代わりに軽く会釈をした。お富はミサの会釈には目もくれず、ただ、仲原を見つめている。

「ああ」

仲原も頷いた。彼女はほっとした様に「彼女じゃないんだ」と嫌味にもとれる様な口調で言い放った。

「まあな」

仲原の答えにミサは驚いた。てっきり彼女だと紹介してくれるかと思ったのに、彼の真意が全くわからなかつた。

それにしても、ストレーントの黒髪、小さい顔、上品で知的そうな大人の女といった感じのお富を目の前にし、やはり勝ち目はなさそうだと、ミサは勝手に判断した。そう思いはじめると、益々自分が情けなくなってきて、仲原の横について、勝手に彼女だと思つてしまつた自分を馬鹿に思つた。

喉元まで「帰ります」という言葉が引っかかっていたが、小心者のミサは言い出せず、事の成り行きを見守ることしかできなかつた。加藤がトイレから戻ってきたが、お富は一向に態度を変えない。むしろ、加藤とミサに見せつけるように、仲原の方を見つめた。

「お前、いい加減にしろよ」

黙つていなかつたのは加藤の方だ。ただ、病院の近くの店で騒ぎを起こすわけにもいかないという気もあつたんだろう。いたつて冷静な口調だつた。

「何を?」

お富は加藤の方を向くと、長い髪がふわっと翻り、ほのかに甘い香りがした。

「何をつて、自分が何をしてるのかわかるのか?」

「まーくんの方こそ、私が知らないと思ってるの」

「だから、何のことを」

「私、あなたが病院の人と何回も会つてるの知つてるし、馬鹿にしないでよ。あなたとは一緒にいられない。今日、言うつもりだつたの。あなたが私の前に来るまでは、この人と、本当に幸せだつたんだから」

仲原はそれまで、知らない顔をしていたが、話が自分のことには及ぶと、黙つていられないという風に席を立つた。

「ちょっと来い」

仲原はお富の手を引いて、店の外に連れて出た。

ミサは何が起きたのか全くわからなかつた。2つ席をおいた加藤がため息をついている。ふと、ミサの顔を見ると「悪いとこ見られたな」と苦笑した。

「おあいそ

加藤は勘定を済ますと、ミサに「データだつた?」と聞いた。今にも泣き出しそうな表情から察したのだろう。「ごめん、こんな事になつて」とミサの答えも聞かずそう言つた。

「どうするの? 彼を待つてるの?」

加藤に聞かれると、益々不安が募つた。もしかして、戻つてこないかもしれない。一体、何の話をしているのだろう。2人が出て行ってから、まだ5分も経つていなが、ミサの頭の中は黒い靄でいっぱいになつた。

答えられないミサに、加藤は「もう帰るから」とミサの肩にそつと手をおいて出て行つた。

加藤が帰ると、あつという間に店員がやつてきて後片付けをする。加藤とお富がいた席はすっかり片付けられ、店員は「一ひらも帰られましたか?」と仲原の席も片付けようとした。

「あの、戻つてきますので、このままで

そう言つたミサの声は、涙声になつていた。

(貫一くんとお富……どつなつちやうんだらつ)

「何で、何で私じゃダメなの? あの時だつて、あの人があの部屋に入つてきて……。何度もあの時のことを、説明しようとしても電話はつながらないし。仲原君が怒るのも無理ないけど、私も辛かつたんだから」

「確かにあの時は驚いたけど、怒つてなんかいない

「え?」

「俺、お前があいつと一緒にいた時、今もそうだけど、これっぽっちも嫉妬の感情が出なかつた。好きだったかもしれないけど、愛してた訳じゃないと思う。あの事で自分の気持ちに整理がついた。もう、本当にこれで最後にしたいんだ」

「やだ」

「頼む。きちんと別れなかつたのは、自分も悪かつた。今までのことは感謝してる……」

「どうしてそんな事を言うの？ そんなにきちんと別れたい？ あと腐れなく？」

おしどやかで穏やかな元彼女の姿は、今の形相からは想像もできない。仲原は一瞬、その表情にぞつとしだが、同時にそれだけの愛情が自分に注がれていたことを知つた。

「ごめん。俺」

「やつぱり、やつきの娘と付き合つてるのね」

「お前と俺が別れる事と彼女とは関係ないだろ」
ミサの事になると、仲原は口調を荒げた。

「やつぱりね」

いつもなると、彼女の顔は益々ゆがみ般若のような面持ちとなつた。仲原は彼女をそうさせてしまつた自分を情けなく思つた。

10分ほど話しただらうか。話の間中、彼女は仲原を見据えた。今度は泣いたりしなかつた。すがりつく事も無かつた。ただ、その目は狂気に満ち、仲原は怯んだ。

「ごめん、謝るしかない」

「後悔……するわよ」

最後の方はほとんど聞き取れないような声で捨て台詞を残し、彼女は去つて行つた。

その時、仲原は最後まで聞き取れず、内容を理解できぬいでいた。ただ、店の中で待つミサが気になつて仕方がなかつた。

第25話 不器用な

カウンターで一人ポツンと座っていたミサは、空いた席を眺めながらため息をついた。必死にすがりつく彼女の姿を思い出していった。その時は、あそこまで人を好きになれるものかと思ったが、今は彼女の気持ちがなんとなくわかる。失いたくない。そう思わせる男だ。仲原は。

それにしても、最初見た時とはまるで違う雰囲気を放っていた彼女に、なにか違和感を感じた。何がだろ？ 異様な視線だろ？ 普通ではない、何かを感じミサは震えた。

「いらっしゃいませー」

店の戸が開き、客が入つて来る。その度に、仲原かと思い振り返るが、違うとわかると不安は募り、店の外まで走り出したい衝動にかられた。店の外で話しているであろう、仲原と彼女の事が気になつて仕方がない。

「すみません。お勘定を」

ついに、ミサは耐えられなくなつて席を立つた。仲原が話しに行つて15分も経つていらないだろう。しかし、待つていることが辛くなつたのだ。先ほどのやり取りを聞いていたのか、店員は哀れむようミサを見た。「ありがとうございました」と威勢の良い声を背中に受け、ミサは覚悟を決めて外に出た。

外に出ると、澄んだ空気の匂いがした。ミサはガラガラと店の戸を閉め、キヨロキヨロと辺りを見回した。

丁度、コツコツと早いリズムで、ヒールの音が去つていった。その先を見ると、彼の姿があつた。彼もまた、店へ戻ろうと、視線をこちらに向け、ミサの姿をみつけた。

彼はミサの方へ駆け寄ると「ごめん、大丈夫？」と優しく声をかけた。今にも溢れ出しそうな涙をじらえながら、ミサは首を横に振つた。

「大丈夫じゃないです」

「ごめん」

ミサは仲原の言葉に頷いたものの、店での仲原と彼女のやり取りが気になつて、知らん振りをして家の方へ歩き出した。

「彼女じゃないんだ」

「まあな」

そんな2人の会話を思い出して情けなくなつた。私はあなたの彼女ではないの？ という問い合わせぐるぐると頭の中を駆け巡つた。後ろから、仲原がついて来ているのがわかる。今すぐ、振り返つて、聞き返したい。私はあなたの彼女なんですか？ と。

ミサは仲原から逃げるように、どんどん早足になつていた。いつもそうだ、何か事が起こると自分から逃げ出してしまつ。問題に直面するのが怖い。いつも、そやつて逃げてきた。

「おい、待つて」

後ろから静かに歩いていた仲原だったが、どんどん離れていくミサに追いつくよに走りだした。

ダダダダダ

仲原が走り出すと、ミサも意地になつて走り出した。とうとう涙は溢れ出し、ぐすぐすと鼻は流れるし、こんな顔見られたくないと、もうそれは意地になつて走りだした。

「うつ」

後ろを走る仲原の足音が止んだ。

「え？」

ミサが振り返ると、仲原が道路にしづくまつっている。

「ちょっと、どうしたの、先生、ちょっと……」

ミサは仲原に駆け寄り、必死に仲原の体を揺さぶつた。突然のことで、全く状況がつかめなかつたが、必死だつた。

「先生、大丈夫？ ねえ、どうしたの？」

応答がないので、益々慌てたミサは、うずくまつて仲原の顔を持ち上げた。

「先生、しつかりして！ ね、先生、ちょっとどうしたの？」

ミサは仲原の鼻の辺りに手をかざして呼吸を確かめた。

全く息をしていない事に気がついたミサは、慌てて携帯をとりだした。

「先生、しつかりしてね、救急車呼ぶから」

慌てているので、なかなか携帯がかばんから出でてくれない。額に汗が噴出するのが自分でもわかる。なんとか携帯をとりだし番号を押そうとしたが、ロックがかかっていて押せない。

パニックになつていて、ロックをはずすのも一苦労だ。

ふはあ～

横でそんな音がした。そして、くくくくくとこつもの笑い声。笑い声はどんどん大きくなつて、ミサは目を丸くした。

「先生、息止めてたでしょ～。酷い！」

やつと状況がつかめたミサは思いつき仲原の肩をバシッと叩いた。彼は「イタツ」と言つたあと、ミサの顔を見てまたくくくっと笑つた。

「本気で心配したんだから」

「人工呼吸してくれるとと思つたのに」

ミサは耳まで真っ赤になつて固まってしまった。

やれやれ、と仲原はひざについた砂を払いながら、立ち上がつた。「帰ろうか」仲原はそう言つて、座り込んでるミサの体を抱き起こした。

「ねえ、先生」

「ん？」

「私。先生の事、何も知らない」

「ん……」

「私つて」

ミサは決意したように、仲原の目を正面から見て言つた。

「わ、私って、先生の彼女なんですか？」

先ほど走ったので、まだ、呼吸は乱れたまま。肩を上卜させて、息を整えながら、仲原の答えを待つた。

住宅街の中を通りて一本の抜け道。街灯が少ないため、辺りは暗い。近くにいる彼の表情がようやく読み取れるくらいだ。相変わらず、彼の顔は優しく、そして、どこか寂しげで、何故か遠い存在のように感じた。

「はじめてなんだ」

ようやく仲原が口を開いた。さつきのふざけた表情とは違い、真顔になつた。彼を寂しげに見せてくるのは何か、ミサはまじまじと彼の顔を見た。

いつもの犬が2人に向かつて、ワンワン吠えたてる。2人を追い出すまで、吠えてやる、そんな感じだ。話の最中だったが、あまり犬が吠えるので、家の中から住人が外を確認しに出て来た。

2人は苦笑して、歩きだした。話したいことは山ほどある。元彼女のこと、飾つてあつた少女の写真のこと。話したい思えば思うほど、頭の中でいろんな台詞が浮かんでは消え、なかなか本題に入れない。何で、こんなに口下手なのか。ミサは自分の不器用さにイララした。

それは、仲原も同じことだつた。不器用な2人は、静かに歩くだけだつた。お互いのことを想いながら。

歩いているうちに仲原のアパートが見えてきた。

多分、何時間あっても想いを伝えられそうもない。「送るよ」と仲原が言つたが、ミサは「おやすみなさい」と、自分からそつそつと別れた。

ミサは真つ暗な空を見上げ、ため息をついた。

星一つない空。こんな日もあるんだな、明日は雨かな。憂鬱な気分がミサを襲つた。

(本当に今日は疲れた)

仲原のアパートから、ミサの部屋まで5分ほど。暗いので、少し

小走りで急いだ。

不意に携帯のメール音が鳴った。

ミサは思わず携帯を取り出した。彼からかもしれない。そう思ったミサは暗闇の中、立ち止まって画面に見入った。

—そばにいて欲しい。愛してる—

第26話 愛の形

一そばにいて欲しい。愛してやー

ミサは携帯を握りしめた。瞼を閉じて、彼の姿をそこに描く。やはり瞼の奥の彼も寂しげな表情をしていて、想えば想うほど、もうくはない彼の姿は細かい粒子になつて消え去つた。何故か、不安になつたミサは、今来た道を戻つて彼のところへ駆けて行きたい。そんな衝動にかられた。

暗闇の中でしばらくなつと立ちぬいていたミサだが、意を決したように、ぐるりと向きを変え、彼の方へ歩き出した。はじめはゆっくりとした歩調であったが、彼の家に近づくにつれ小走りになつた。

何か、嫌な予感がするのだ。彼が消え去つてしまつといつ不安。理由は分からぬ。ただ、仲原のことを愛している、そう確信した今は、余計不安が募つた。

はあはあと息をきらしながら、路地から仲原のアパートの駐車場へ続く道を進んだ。

コソコソコソ……コソ……

駐車場では、ヒールの音が、自己主張をしているようにな響いた。丁度、車の影で隠れるよつた形で女が行つたり来たりしている。ためらうといつてはなく、ただタイミングを狙つている。

それにも、女の黒髪はより一層暗く、星一つない漆黒の夜空に融けこんでいくようだ。生氣を失つた様な全く表情のない彼女の手には、バッグの中にある鋭く冷たい物をつかんでいた。

その不気味な存在に気がつかないまま、ミサは彼の部屋の前に居た。大きく深呼吸をして。

トゥルルルルル

仲原が喋りだす前にと思い、慌てて「先生。私、先生の家の前に

います」と早口で伝えた。

力チャヤツ

ドアが開き、携帯を片手に持ったまま、仲原が出た。

ドアの前には、顔を赤らめて、必死にやつてきたミサの姿。仲原はしばらく無言でミサを見つめたあと、身をかがめて、小柄な彼女を抱きしめた。柔らかいミサの髪に顔をうずめながら。そして、ミサの耳元でそつと言つた。

「こんな想い……はじめてなんだ。大切な人……」

彼の腕がしつかりと自分を守ってくれている、そう感じた。大好き、愛してる、そんな言葉じゃなく、大切な人と彼は言った。ミサもぎゅっと彼をつかまえた。

カツカツカツカツカ

女は、玄関先で抱きしめあう2人を凝視し、的の中心に向かつて飛び込んでいく矢のように、走りはじめた。手に握り締めたナイフは、もはやバッグの外から出ていて、背中を向けているミサを狙っている。

仲原が気がついた時には、女はすでに近くまで迫っていた。

カツカツカツカツ

「恭子！」

仲原がそう叫んだが、彼女は止まるこことなく、ミサを狙つた。

「やめる」

「キャツ」

とつさに、仲原がミサを引き寄せ、体を反転させ、かばう様な形になつた。

「何で、そんな子をかばうのよー！」

さつきまで無表情だった、彼女は、逆上して怒りを露わにした。その声はヒステリックで異様だった。

そして、ナイフの先は、行き先を決めかねているようにぶれた。

「あなたが悪いのよ」

恭子は、恐ろしく低く静かな声で言つた。彼女の視線は光を失つ

たかのように真っ黒で、どこか遠くの方を見ていたが、やがてあははははは……と狂ったように笑いだした。ミサには泣いているようにも聞こえ、恭子を憐れむように見た。

「その目が嫌なのよ」

恭子は不意にミサを睨み、そう吐き捨てた。笑いが止んだ時、やつとナイフは迷いから醒めたように狙いを定めた。

「やめてー！」

「馬鹿つ。やめる」

グフツと呻き声がもれ、ゆっくり影が動いた。腹をつたって血が流れ出し、そこから伸びた脚にダラダラと血の線が何本も引かれる。しだいに立つていられなくなつた足は2つに折れ、膝をついたあと、横にどさつと倒れた。

「あああ……」

騒ぎを聞きつけた住人が通報したのだろう。救急車とパトカーのサイレン音がけたましく近づいてくる。住人が遠巻きに様子を伺つてゐる。

「ね、しつかりして

「う……う……」

先に、救急車が到着した。

腹部に刺さつたナイフを見ると、救急隊員はお互に、顔を見合させた。

血に染まつた脚からヒールを脱がすと、恭子を乗せた救急車は、サイレンを轟かせて走り去つた。

血にまみれた彼女。それが彼女の愛の形。あまりにも1人よがりで哀れな姿がそこにあつた。

まもなく、パトカーが到着し、チカチカと赤いライトが、呆然と立ち尽くす、ミサと仲原の2人の顔を照らした。

「事情を説明していただけませんか」

その先はよく覚えていない。ミサは母親に付き添われ手術室の前で、祈るように目を閉じて座っていた。警官にしつこく質問されせいか、頭の奥はキーンと金属の鳴る様な音でいっぱいになつた。

仲原は手術室の中だ。

「ミサつ。どうしたのよ」

福永は化粧もせず、慌ててやつて來た。そして、母親に肩を支えられ、力なくうつむくミサに声をかけた。

「まことちゃん。夜中にすみません」

「おばちゃん、一体？」

ミサは、がっくりと肩を落とし、うつむいたままだ。

福永はミサの傍に座つた。丁度、母親と福永がミサを両方から支える形となつた。

一瞬、自分を体全体で守つた仲原の感触がよみがえつた。あたたかく、強く。彼は一体どつなつてしまふのだろう。そして自分も。割腹自殺を図つた恭子。明日になつたら、この事件は病院中に広がるだろう。そうすれば、仲原の立場は益々脅かされるだろう。嫌味に笑う高津の顔が、ミサの頭に浮かんだ。

ミサが病院に到着したとき、当直師長が怪訝そうな表情をし「あなた、こここの看護師だそうね。何病棟?」と言つたあと「今から4病棟の師長に連絡しますから、きちんと事情説明しなさい」と冷たく言い放つた。問題を起こした看護師、そういう風に扱われたことが辛かつた。

人を救うはずの看護師。命を救うはずの存在が、1人の人間の命を縮める結果となつた。ミサには非はない。母親も福永もそう言って彼女を励ましたが、ミサは罪悪感でいっぱいになつた。

「渡辺さん」

病院に到着してから30分程してから、4病棟の師長が現れた。

「お世話になつています、ミサの母親です」

師長は母親から事情を聞くと「困ったわね……」と少し考えたあと「とりあえず、落ち着くまで休みなさい」と続けた。

「あの、師長さん、ミサはミサは関係ないんです」

福永は師長に言った。

「理由はどうであれ、人の命に関わる事件に関わっているといふこと。病院の方針が決まるまで、私にはどうする事もできないわ」「師長はうなだれているミサの肩にそっと手をおいた。

「ところで、相手の方のご家族の方は？」

「いえ、まだ……到着しておられないようです」

「おかしいですね」

2時間ほど経過しただろうか、バタバタとエICO（集中治療室）のナース2人が、輸送車を押し手術室の中へ入つていった。
それから10分程しただろうか。一つと静かに手術室のドアがスライドした。

思わず、ミサは立ち上がった。

恭子を乗せた輸送車^{ストレッチャー}がミサたちの前を通り過ぎた。

後ろから外科の医師2人が輸送車の後ろを続いた。通り過ぎながら、緑色の手術着に包まれた彼らは、興味深そうにミサの方へ視線を向けた。

きっとこれから、こいつした興味の目にさらされるのだろう。2人は。

「事情を聴いてきますね」

師長はそう言って、手術室の中へ入つていった。

第27話 一身上の都合

プシュー

手術室のドアが開き、師長が戻ってきた。

「出血の割りには、創は浅いそうよ。命にも別状ないみたい……」

「はあー、良かつたあ」

ミサの気持ちを代弁するように、福永が大きな声を出した。横にいるミサの母親も、ほつとした様子で師長に頭を下げる。

「渡辺さん、大丈夫?」

さつきから、うなだれたままのミサを気遣つて師長が声をかけたが、ミサは頷くのが精一杯だった。気になるのは手術室の中にいる仲原のこと。この先、彼にどんな処分が待っているのかを考えると、いてもたってもいられない気分になった。

夜中の手術室の前の廊下はひつそりと暗く、ミサの母親がついたため息の音だつて響いた。

「あの、けがをされた彼女の名前は?」「家族の方に何て言つたら

……」

「おばちゃん、何、言つてんの! ミサは被害者なんだからね。謝る」としたら、向うの方なんだから。おばちゃん、しつかりしてよ

「佐藤 恭子さんつて言つてたわね」

師長は手帳を取り出してそう言つた。

「彼女の父親は、どうも市議会の議員さんみたいでね、連絡したそうなんですけども、来れないって言つたみたいですね。受付から、手術の承諾書や、必要な書類があるから、どうしても来て欲しいと電話したそうなんだけども、断られて……」

「なんちゅう家族や! で、母親は?」

福永は信じられないという顔で師長の顔を覗き込んだ。

「そこまで詳しく述べはわからないんだけど」

「あ、ね、そういう

福永は急に何かを思ついたのかすっとさよのうな声をあげた。

「何？ どうしたの？」

「師長さん、か、加藤さん……丸山製薬の。彼女と付き合つてゐるみたいだつたし、加藤さんに聞いてみたら？」

師長は訳がわからないといつ表情を浮かべ、困惑している様子だった。

「まあ、とにかく今日は帰りましょ。明日の決定を待つて……連絡しますから」

決定という響きが、ミサの肩に重くのしかかつた。

「ちょっと、聞いた？ 手術室の子から聞いたんだけど！」

「え？ うつそー？ 渡辺さん、仲原と付き合つてたの」

日が明けて4病棟では、仲原とミサのことでもちきりになつてい

た。ナースの情報網といつのは恐ろしいものがある。

「渡辺さん……彼女から仲原を奪い取つたつてことなの？ おとな

しそうにみて、わかんないね」

「それでね、その自殺未遂の彼女が、加藤さんのね」

「え――！」

山中が、どこからか仕入れてきた情報を話しだすと、皆驚いて、

首をかしげた。

「わかんないもんだね

「うん、わかんない」

「皆さん、ちょっと静かに。申し送りを続けてください」

師長が皆を制するように、大きな声で言った。

「師長！ 今日渡辺さんは休みなんですね。どうしてですか？ わざと、山中が師長に問い合わせた。

「身上の都合です」

「そんなあ」

理由を聞きたがつてゐるほかのスタッフ達も口々に不満をもらした。

「一身上の都合って、一体どれくらい休むんですか?」

「彼女の夜勤の代わりなんてしたくありません」

「そうそう、なんで事件を起こした人のせいで、私たちが忙しい思いをしなきやならないのよねえ」

パンチ
恵は隣にいる角野に相槌を求めたが、彼女は話に参加しようとしてなかつた。山中は彼女の態度を見逃さなかつた。

「ねえ、亜里沙ちゃんさ、加藤さんから何か聞いてないの?」

山中の意地悪い視線が角野に向けられた。訳のわからない他のスタッフは不思議そうな顔をして2人のやり取りを聞いている。しかし底意地の悪さでは、角野の方が一枚上手である。キッと山中を睨み返すと「私は何も関係ないわよ」と、さらつと答えた。

一瞬ひるんだ山中だが、弱い立場の人間をさらに追い込む性分らしい。「加藤さんと付き合つてたくせに」と言い返した。

「そんなの嘘よ」

角野は、フランス人形のような顔をふいつと持ち上げて、山中をこバカにするように見た。あんたなんか、誰も相手にしてくれないくせに、と言いたげな表情だつた。

「何よ、バカにして! とにかく、こんな乱れた職場でなんか働けません!」

山中は師長につつかかつた。

師長はやれやれという表情をして、ため息をついた。

「事実がはつきりしていない時点で、いろいろな憶測が飛び交うというのはどうかと思います。渡辺さんが関係しているのは事実ですけども、彼女はむしろ被害者のような印象を受けました。まあ、今の時点では何とも言えませんが。皆さんも同じ病棟の人間として、見守つてあげてください。彼女について、少し誤解している部分があるのでは? ね、山中さん」

「見守るつづつてもねえ」

山中は、納得がいかないといつ様に、眉間に皺を寄せた。

「皆さん、時間は過ぎてますよ。患者さんに迷惑をかける訳にはい

かないでしょ。きちんと持ち場についてください」

トゥルルルル

内線電話が鳴った。看護課からの呼び出しだ。師長は2、3回深呼吸をしてナースステーションをあとにした。

いつものように患者の清拭を済ませ、検温に向かうスタッフだったが、暇があれば事件の話題になつた。山中は朝の出来事を消化できないう様子で、仕切りに他のナースたちに話しかけては同意を求めようと必死だ。

「でね、ここだけの話だけど、亜里沙つたら、加藤さんと今でも付き合つてるはず。その加藤さんに彼女がいたんだから、やられたわね、あの子も」

「えーでも、その自殺しようとした人も加藤さんと付き合つてて、仲原先生が好きなんですよ？ 何かよくわかんないですウ。で、悪いのは誰なんですか？」

「ん？ んー」

「ちょっと、あんたら、点滴放りっぱなし！」

パンチ
恵のドスの効いた声が響いた。山中は肩をすぼめて、点滴にとりかかり、一緒に話していた若いナースは「すみません」と何度も頭を下げた。

その頃、ナースの休憩室では、角野が加藤に連絡をとつていた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「あー、亜里沙か。さつきもいろいろ聞かれたよ」

「誰に？」

「師長。話があるから病院に来いつて……困つたことしててくれたもんだよ。恭子のやつ」

「それで、私と付き合つてたつて」と話したの？

「いや」

「そう、良かつた」

「体だけの付き合いだなんて、言える訳ないしな」
加藤はそう言ったあと、皮肉っぽく笑つた。

「あんた、最低ね」

「おまえだつて、恭子のこと知つてて……だろ？」

「……」

「どうにかしても、お前と関係するのがわかると、担当をはずされるのは間違いないし、恭子の自殺だつて俺には関係ないことを証明しないと、俺の立場がまずくなる。何とかしないとな」

「あんた、自分の事しか考えてないのね。それに、彼女が、他の男を好きで自殺未遂したのに、何とも思わないの？」

珍しく冷静な亜里沙が声を荒げた。

「何とも思わないはずがないさ……仲原といつ医者。あいつだけは許さない……」

「何で？ 恭子さんのこと好きだから？」

加藤はふふっと鼻で笑つて「いや、俺のものをとつたから」と呟いた。その声は傲慢で、自分勝手で子供じみていた。亜里沙はぎょつとして、背筋が寒くなるのを感じた。

「もう、連絡してこないで！」

亜里沙はそれだけ言つと、パチンと勢いよく携帯を閉じ、バッグの中に放り込んだ。

面会謝絶と札のかかつたドア。

恭子の傷は浅かつたらしく、酸素も心電図も、はずされていて、朝にはICU（集中治療室）から普通の病室へ移されていた。仲原はドアをそつと開けると、恭子が寝ているbedの横に立っていた。

「何で……こんなこと……」

恭子は普通に寝ているかのように、穏やかな表情で眠っている。昨日から一睡もしていない仲原は、白衣のまま、疲れた表情だ。傍にある椅子に腰かけ、元彼女の寝顔をマジマジと眺めたが、哀れな女、それしか感じることができなかつた。今となつては好きだつたかどうかも思い出せない。

外は雨。シトシトシトシトと聞こえてくる雨音が静かに心の奥で響いた。古い病室は、何か湿氣臭く陰気で、というか、仲原の目に映るもの皆が憂鬱だつた。なぜ、彼女は自殺という手段を選んだのか。いつその事、自分を刺してくれた方が気が楽だ。仲原はそう思つた。

20分程、横にいたどううか。立ち上がる気にもなれず、ずっと窓の外と恭子の顔を代わる代わる眺めていた彼は、深くため息をついて目を閉じた。

あの日も雨だつた。

「先生！ 先生！ ダメだ。ダメだ」

遺体の横にすがる少年。

変り果てた遺体は、修繕されていたが、文字通りボロボロで目を背けたくなる程だつた。遺体の両親であるうつ2人の男女は、顔を歪め、周囲も気にせず大きな声で泣いていた。

ウオオオオオオオ！ ウオオオオオオオ…と。何か動物が吠え

るような、そんな声だった。遺体の同僚であろう、若い医者達が続々と遺体の周りに集まつてくる。

「何で、自殺なんか。バカ野郎！小園！バカだ、お前はバ力だー！」

「ううう」
1人がそう泣き崩れると、周りの者たちも、口々に、何で、何でだ？と疑問の言葉を漏らした。

外は降りしきる大雨。横殴りの雨が窓をたたきつけていた。

「お棺が到着しました」

葬儀の人間だろう。彼らは無残な遺体に驚きもせず、慣れた手つきで棺に納めた。黒いスーツは雨に濡れ、髪からも水が滴りおちていく。少年はその光景に身震いをした。

棺を先頭に、ゾロゾロと白衣の群れが続いた。裏の出入口へと、白い線は続いた。

誰も傘をささず、横1直線に並んだ医師たちは、車が走り去るまで深々と頭をさげ、車が消え去ったあとでも、誰も頭をあげようとしなかつた。

少年は、一人遺体が安置されていた部屋について、動けずにいた。それは、息もできない位。

バタバタと、時折激しく窓をつつ雨音に、我に返った少年は、やつと涙が滴り落ちるのを感じた。冷たい頬にあたたかい涙がつたう。「死ぬなって言ったのは、先生の方じゃないか……」

力なく呟く少年。

それは、10年前の仲原。

彼は、今、恭子のbedの横で立ち上がりになくなつていた。

「失礼します。あつ」

検温の為、訪室したナースは仲原の姿を見ると、いつたん開けたドアを閉めようとした。

「おいつ！」

「ハイ」

「検温だろ？ 続けてくれ」

やつと仲原は、椅子から立ち上がると、ドアの方へと歩いて行つた。

「行かないで」

細い声が仲原の耳に届いた。

「あ、あの、やっぱり、私、後で来ますので」

検温にきたナースは、慌てて病室から出て行つた。

仲原はドアの方を向いたまま話しあじめた。

「何でこんな事したんだ」

「私……」

「くそっ」

仲原は自然とこぶしに力が入るのがわかつた。唇はきつと固く結ばれ、目は閉じたままだ。

「私……ごめんなさい……あなたが誰かのものになる位なら、……」

バンッと壁を殴る音がした。

未だ、恭子に背を向けたままの仲原の背中は怒りで震えている。「死んだ方がまし……っていうつもりか！」

「……」

「どうなんだ。これから先も、俺が傍にいなかつたら、お前は死んでしまうのか！」

「……」

いつも静かな仲原が、怒りに震えている。感情を出したことない仲原が自分に向けて怒っている。恭子は、傷の痛みも忘れ、思わず体を起こした。

「あなたが他の誰かを好きだなんて……私、死ぬしか……」

仲原は動きを止めた。

「死ぬしかなかつた……？　お前のこと……理解できない」

一度だけ、このとき、一度だけ。振り返った彼の眼には涙が浮かんでいた。

「俺は、大事な人間を残して死んだりはしない！」

とり返しのつかない事をしてしまった、と恭子が思ったときには、

もう手遅れだつた。彼の心は完全に彼女のもとを去つていった。

仲原は、早い足取りで、医局の自分の机に向かつた。

医局に入ると、外来日ではない医師が数人、新聞を読んだり、資料に目を通したりしていたが、仲原に気が付くと、一斉に視線が仲原に集中した。

「仲原！　院長がじきじきに来てたぞ。早く行つたほうがいいぞ」「こう、忠言してくれる者もいれば、「仕事覚えるうちから、女なんてな」とからかう者もいた。仲原はまるで何も聞かなかつたように、医局の机に向かつた。

積まれた資料の山。

今まで、誰よりも勉強をした。
人の役に立つと信じて、がんばつた。

仲原は目を閉じた。

「お兄ちゃん、あのね、小園先生つたらね」「なんだよ、また病院の話か。テスト中だから、あつち行つててくれないか」

その頃は、まだ、妹の病気が重いものだとは思つていなかつた、10数年前。はじめは、貧血としか両親から聞いていなかつたのだから無理もない。

「ねー、お兄ちゃん」

甘えてくる妹を少しづつとおしく思いながら高校生だった仲原は教科書を閉じた。

「何だ。少しだけなら聞いてやる」

「あのね、クリスマスにプレゼントくれるつて！　いいでしょー」

「もうすぐクリスマスだもんな。でも、何でだ？　クリスマスに病院にでも行くのか？　また、お前だまされてるんだよ」

「小園先生は、そんな人じやないもんつ」

「で、何が欲しいんだ？」

「お兄ちゃんも買つてくれるの？　うーんとね……そうだ、インラ

インスケートつて流行つてゐるの。ほら、近所の圭ちゃんだつて、なつちゃんだつて、道すべつてゐるでしょ。ピンクのがいいなあ

「わかつた、わかつた。買つてやるから」

「やつたー！」

その時の妹。いつになく甘えてくる妹。もつと、いろんな事を伝えたかつたに違ひない。何も気がつかずに、適当に話をあしらつていた自分が悔やまれてならない。

長かつた髪の毛を急に切つた妹。部屋の中だとこの帽子をかぶつていた。もっと早く気付いてやるべきだった。

妹の入院を知つたのは、次の日。抗ガン剤の治療で白血球が下がつたため、と母親から説明された。

「何だよそれ

「亜美は、白血病なの

「貧血じやなかつたのかよ

「……治るわよ、きっと。あんな可愛い子を連れてつたりしないでしょ、神様も」

「何だよ、それ……クリスマスには帰つて来れるのか？」

「多分、無理ね。1ヶ月はかかるでしょ」

母親のため息が聞こえた。やめてくれ、何だ、何なんだ。これが現実なのか？今まで、妹なんか、わがままで、面倒くさくて。でも、何なんだ、この気持ちは。がらんどうの。

スケートを買ってやるといつた時の妹の笑顔。

幼い彼女は、治ると信じていたに違ひない。退院すれば元の体に戻ると信じていたんだろう。死は容赦なく、無差別に、訪れるものだ。

仲原は目を閉じた。

この先、どんな処分があるうとも、自分は負けはしない
いすれ死んでしまう人間達

その人たちが死んでいく時、自分は医者として、やるべき事がある

やらなくてはいけない事がある

みんな忘れているが、死はいずれくる

死んでいく人たちへ

怖がらなくていい

傍にいる

君が君らしい今まで、天国へいけるよう

願っている

第29話 復讐

ミサは何をする訳でもなく、ただ、考えていた。母親や、福永が一緒に居たが、1人になりたくて帰つてもらつた。

シトシトと雨が降つていて、昨日の星一つない空を思つと頷けた。真面目すぎる彼女の頭の中には、救急車に運ばれる血だらけの恭子の場面が何度も繰り返される。彼女は何で、死を選んだんだろう？大きな疑問が頭の中を埋め尽くした。

ふいに携帯が鳴つた。

仲原からかもしけない、そう思つたミサは、慌てて電話に出た。

「はい……」

「あの、大丈夫かしら？」

電話は師長からだつた。処分が決まつたのだらつ。ミサの携帯を持つ手元が震えた。

「結論から言つわ。あなたには非が無い。そういう事」

「働けるんですか？」

「ええ。ただ、事件のことで4病棟全体が混乱しているといつか……あなたに対する風当たりが強くなることはあると思うの。いつもでも働いてもらつてもいいけども、あなたの事が心配だわ。2、3日、休んだらどうかしら？」

「……はい……ありがとうござります。で……」

「何？ どうしたの？」

「先生は？ 仲原……せん……」

ミサは恐る恐る聞いた。本当に怖かった。自分の事よりも、彼がどうなつてしまふのか、一番不安に思つていた。

「まだ決まっていないわ。医局の中ではいろいろと考えがある様だから……」

「わかりました」

ミサは師長からの電話を切ると、とつと、仲原の携帯へかけた。

呼び出しが空しく聞こえてくるだけで、彼は出なかつた。

「せんせー……」

ミサはやうやく、灰色の窓に視線を移した。

「で、君は今回のこと、どう説明してくれるのか？」

仲原は院長室に呼ばれていた。院長の横には高津と、他の部長クラスの医師が数名、腕を組み、顔をしかめて仲原の方を見ている。誰もが高压的で、仲原のことを見下した様な表情だ。高津がこのじぞじばかりに口を開いた

「それでも、何だね。研修医の立場で、君もやつてくれたね。病院のイメージが悪くなるような、こんな不祥事初めてだよ

「は？ 不祥事とおっしゃいますと？」

堂々とした仲原の姿は、取り巻きの医師たちをより一層苛立させた。

「君は佐藤恭子と付き合つていながら、病棟のナースに手をつけた。それが自殺未遂事件の真相ではないのか？」

「違います」

「ほほう。何が違うんだね」

「佐藤恭子さんは、確かに付き合つていましたが、別れました。彼女……渡辺さんと付き合う事になつたのは、その後です」

「だから、浮氣はしていない」と？

「はい」

「君！ 言い訳するのかね。こちらの情報では、君と佐藤恭子は付き合つていて、病棟のナースに手を出したという事がわかつてゐるだよ

「嘘だ、誰がそんなこと…」

仲原は自然に力が入つていいのがわかつた。いつの間にか、拳が固く握られていた。

「往生際の悪い奴だ」

「医師という職にすがりつきたいのはわかるが、みつともない」

周りの部長連中はざわざわと仲原を罵倒する格好となつた。

「君は知っているかもしだれないが、自殺未遂を起こした、佐藤恭子の父親は、県議会の議員でね。先ほども電話があつたんだが……こんな野蛮な医者は辞めさせてくれと、そういう事を言ってくるんだよ。眞実はどうであれ、君のせいで一人の人間が死を選ばざるを得なかつたのは間違いないのだから」

吐き捨てるような言葉の数々に、仲原の眉はキッと吊り上つた。しばらく黙つて聞いていた仲原は、院長の取り巻きではなく院長を捉えて言った。

「彼女の自殺未遂の件は、自分が至らなかつた、それだけしかいません。しかし、私は、医者としてやるべき事があります。だから辞める訳にはいかないんです」

「罪は認めるけども、償わない。そういう事か？」

高津が嫌味にそう言った。

「面白いな君は」

黙つていた院長が初めて口を開いた。

取り巻きの医師たちは、首をかしげて院長の方に目を向けた。

「個人的には、君のような人間は好きだ。しかしながら、病院はイメージが大事だという事は君にも理解できるだろ?」

「辞めるという事ですか?」

「そうなるな……」

院長は、立つたまま、こちらを見ている仲原にそう言った。

取り巻きの医師達は口々に当然だ、といふような言葉を交わし、立ち上がり、仲原を横目で見ながら院長室から出て行った。

仲原は、ぞろぞろ出て行く部長連中には目もくれず、しばらく院長の顔を見据えた。院長も仲原の顔をまじまじと見る。

ザーハー

静かな室内に、不意に激しく降る雨の音が響いた。

ザザー———
———

「君、あの時の子だね……あの口も畠で……」
「え?」

「君がうちの病院に就職すると聞いた時は、本当に驚いたよ
仲原はまだわからないのか、記憶のかけらを探していた。
雨、病院……子供・白衣の列。

「小園君のことは残念だったよ。今も思い出す」
「院長?」

「「めんなさい」、「めんなれ」……」

病室では、まるで呪文のよう、「ごめんなさい」を繰り返す恭子の姿があった。

何てバカな事をしたんだろ? これで完全に仲原は去つていった。私を軽蔑して。2度と戻つて来ない。嫌われた。助けて。行かないで。

そんな言葉が恭子の頭の中を埋め尽くす。

トントントン

ドアをノックする音が聞こえた。

「仲原……くん!」

恭子は、がばっと起き上がつたが、そこには加藤の姿があった。

「参ったよ」

恭子は顔を背けた。今は何故か、顔を見るだけで吐き気がする。アレルギー反応のように、体中が嫌悪感でいっぱいになつた。

「師長に呼ばれて、さんざん聞き出されたよ。だから、言ひてやつた。仲原がお前と付き合つていながら、病棟の若いナースに手を出したつてさ。安心しろよ。仲原も、お前が殺したいほど憎んでいる渡辺ミサも終わりだよ」

「……ちがう」

「それで、話なんだけど。俺達も終わりにしないか? 他の男のせ

いで自殺未遂をしかけた女と一緒に居るほど俺もバカじゃない。それに

加藤は急に声色を変えた。

「俺、この病院の担当をはずされた……正直、参ったよ。ほんと、怖い女だよ」

自分の人生を狂わせた男が目の前にいる。しかも、自分に対して謝罪するどころか、罵つてくる。この男。この男さえいなければ今でも仲原と平穏に暮らしていたかもしれない。許せない。許せない。

「あははははは」

狂つたように笑いはじめた恭子に驚いたのか、加藤は後ずさりをした。

「やめろ！ おかしいぞお前」

「母親は父親のせいでの自殺したのよ！ あはははは。その後ね、父親の慌てる姿つたらたまらなく可笑しくて。あなた知つてた？」

ずりすりと加藤に近寄る恭子。美しかつた面影は消え去り、その顔は狂氣で満ちていた。

「あなた、知つてた？」

「何だ。正気に戻れ！」

「自殺つて最大の復讐なのよ」

加藤の顔が凍りついた。

ポタポタポタポタ

床に落ちた血の赤い線を辿ると、恭子の口唇に辿りついた。真っ赤に染まつた口角がわずかに動き、不気味に笑つた。

バタンと大きな音をたて、恭子は、直立の姿勢から、後ろへそのまま倒れた。スローモーションの様に。「バカ、いい加減にしろよ……」「どうしましたか？」

物音に気付き、ナースが入ってきたが、次の瞬間「キャーッ！」

と大きな悲鳴をあげた。

「ちょっと、誰か来てえ！」

最終話 死んでいく人たちへ

あの日も雨。白衣の列が一糸乱れぬ動きで、一台の車を見送る。
そう、小園の遺体が載せられた車。

「死ぬな。そんなことで亜美ちゃんは帰つてこないんだぞ。亜美ちゃんは、苦しみながらも必死で生きよつとした。だから、君は死んだりなんかしちゃダメだ」

小園の言葉がこだまする。

10年前、亜美が死んだ日。

可愛かつたピンクの頬は何色というのか。黄色に灰色を混ぜたような色で、体はといふと、元気だったころの3倍も膨れて、むくんでいた。浮腫んで醜くなつた妹の姿。

でも、声を聞くと、あの時の妹の姿がよみがえる。

「お兄ちゃん……亜美……」

死んでいく、ほんの数分前のことだった。今まで、喉が痛くて話すこともままならなかつた妹が、珍しく声を出した。

「亜美！ 無理するな。喉、痛いんだろ」

「お兄ちゃん……亜美……」

「何だ？ 亜美！」

「くやしい……お兄ちゃん」

全く自分では動かせない体。はあはあと苦しそうな息使い。

「お兄ちゃん……亜美……お家に……」

「わかつた。わかつた。お兄ちゃんが連れて帰つてやる。大丈夫だ

亜美

「つ……こわ……い……お母……ちゃん……」

段々、妹の息使いは荒くなり、少年の仲原にも異変に気がついた。ナースコールを何回も押し、ナースがバタバタ入つてくる。

「助けてやつて！ 助けて！ 亜美、お母さん呼んでくる」

仲原は、母に連絡をとるために病室を飛び出した。無我夢中だつ

た。

「血圧、測れません」

「ドクター呼んで」

「モニター！ 救急カート！」

病室内に、ナースの指示が行きかう。

「酸素、あげて！ アンビューブー！ ドクターはまだ？ 家の人は？」

「心電図、フラットです」

「ちょっと、高津はまだ？」

「はい。呼んでるんですが」

「じゃ、小園先生呼んで！」

「は、はい」

「死んじやダメよ、亜美ちゃん」

ゴボッという音をたてて、大きな血の塊を吐いた。

「ああ……」

ナース達は一瞬絶望のため息をもらした。

「吸痰！ 早く！」

「亜美――――！」

戻ってきた少年の目に映つたのは、妹の死。

体に触れるのもためらわれる位、醜く変わり果てた姿。血の匂い。

「亜美――――逝くな――」

少年の甲高い声が、病室に響いた。

「亜美ちゃん！」

小園が慌てて入ってきた。

「小園先生！ 亜美ちゃん心停止してます。心臓マッサージ続けますか？」

「もう、いいだろう。これ以上苦しむのは可哀想だ」

「でも……高津先生が……」

「いい！ やめろっ！」

ツ――

モニターの波形が一直線になった。横には0（ゼロ）の数字。

それまでバタバタしていたナースの動きが止まつた。皆、涙を浮かべている。

あまりにも幼すぎる命。壮絶な死。誰もその場を動く事が出来なかつた。

「亜美、亜美」

仲原は妹の傍に近寄り、むくんだ手を握つた。

今ではなぜ、そんな事をしようと思ったのか。思い出せない。あまりにもむごい妹の姿に動搖したのかもしない。とつさの事だつた。

病室の窓から飛び降りようとしている自分を、引っ張り、必死に訴えかけてくる小園医師の声で我に返つた。

「死ぬな。そんなことで亜美ちゃんは帰つてこないんだぞ。亜美ちゃんは、苦しみながらも必死で生きようとした。だから、君は死んだりなんかしちゃダメだ」

それから、どうしたのか記憶が無い。

今ここに立つていていう事は、助かつたのだ。

そこから先は、人伝えで聞いた。

「小園！ 貴様！ 何で救命処置をしないんだ」

後から来た高津は、小園を叱責した。

「まだ、若いんだぞ。救命して然るべき。何てことをしてくれたんだ。主治医の私が到着するまで何で待てなかつたんだ」

周りのナースは怒りに震えた。

「先生が到着しないので、小園先生を呼ばせてもらいましたー」

ベテランのナースが高津にそう言つた。

「主治医は俺だぞ。しかも。主治医の許可なく、何てことしてくれたんだ」

そのうち、仲原の両親が慌てて、病室内に入つて來たが、病室内、遺体の横で言い争う姿は、異様であつた。

「お言葉を返すようですが、私も彼女の主治医だつたんです。この先、救命したところで、彼女の苦しむ時間が長引くだけだと……」

「私の治療方針に逆らうのか、君は？ もしかしたら、彼女には、この先の未来があつたかもしれない。苦しむか苦しまないかなんて誰にもわからん」

「しかし、彼女の状態を考えたら、助かるか助からないかわからない」

「助かるか助からないが、救命処置はするべきだ」

「……」

小園は黙った。彼女にとつての、この先の未来……。

手も足も動かなくなつて、寝たきりの彼女。移植が失敗だつたと

なると、滅多に病室にも来なかつた高津の言葉とは思えない。

彼女にどんな未来があるのか。苦しむ時間が増えるだけではないのか。

高津に移植の依頼をしなければ良かつた。

自分は幼い命を救えなかつた。

小園は怒りと罪悪感、後悔の入り混じつた感情を抑えることが出来なかつた。真面目すぎる彼に、亜美的死は厳しすぎた。

「それから、しばらく経つて、小園先生の死を知つたのは、仲原は院長に言つた。

「私も、小園のことは可愛がつてたからな、この事はよく知つている。小園君は一生懸命で、いい医者だつたのに。勿体無い。高津のようなエリートを見ると、正直へどが出る」

院長は椅子から立ち上がると、仲原の元へゆっくりと移動した。

「私の知つている病院があつてね。遠いんだが」

仲原の肩に手を置くと、院長は続けた。

「医者というのは恐ろしい仕事だよ。なんせ命を扱う仕事だからね。君は、その恐ろしさも悲しさも知つていて。その上で、まだ医者を続けたいか？ 私なんか、そろそろ退職したいものだが……ははは」「はい……私にはやるべき事があります。医者を続けられるなら、どこでもいく覚悟です」

「それでいい」

院長は大きく頷いた。

ザンザン降る雨は、仲原を上から責めてくるようだつた。仲原はミサの元へ向かう。あえて、傘もささず。上から落ちてくる雨が、自分の業を洗い流してくれるよつだ。

俺は自殺なんかしない。

亜美のように、苦しんでも生きる。残された人間の痛みを知つていい。

仲原は吹っ切れたように、走つた。

ザー――――

ザー――――

彼の足音をかき消すように、雨は激しく降つた。人はなぜ生まれてくるのか、なぜ、死ななくてはいけないのか。なぜだ。わからな

い事ばかりだ。

亜美はなぜ、苦しまなくてはいけなかつたのか。

なぜ、恭子のように、自分で死を選ぶ人間がいるのか。

人は弱い。

ただ、それだけは言える。はつきりと。

そして、自分にとつて大切な人。

タンタンタンタン。階段を駆け上り、インター ホンを押す。

「はい……」

「ミサ、愛してる」

ドアが開き、頬を紅潮させたミサの顔がのぞく。

「せんせ……」

仲原はミサを抱き寄せ田を開じた。

「一生、守る」

2人の影は永遠に、純粹に重なりあつた。

ザー――――

雨の日。

これから思い出すのは、2人の始まり。止むことのない雨が2人を包みこんだ。

死んでいく人たちへ
怖がらなくていい

傍にいる

君が君らしままで、天国へいけるように
願っている

(完)

最終話 死んでいく人たちへ（後書き）

今まで、読んでくださった方、本当にありがとうございました。そして、評価、感想を寄せてくださった方に感謝します。コメントの一言一言が、書く原動力になりました。

そして、ようやく完結することができ感無量です！改めて、書くことが好きなんだなあ、と思います。

今度は何書こうかな～～～！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5126d/>

死んでいく人たちへ

2010年10月8日14時29分発行